

名古屋城調査研究報告6

埋蔵文化財調査報告書5

名古屋城表二の門試掘調査報告書

第1次・第2次調査

2023

名 古 屋 市

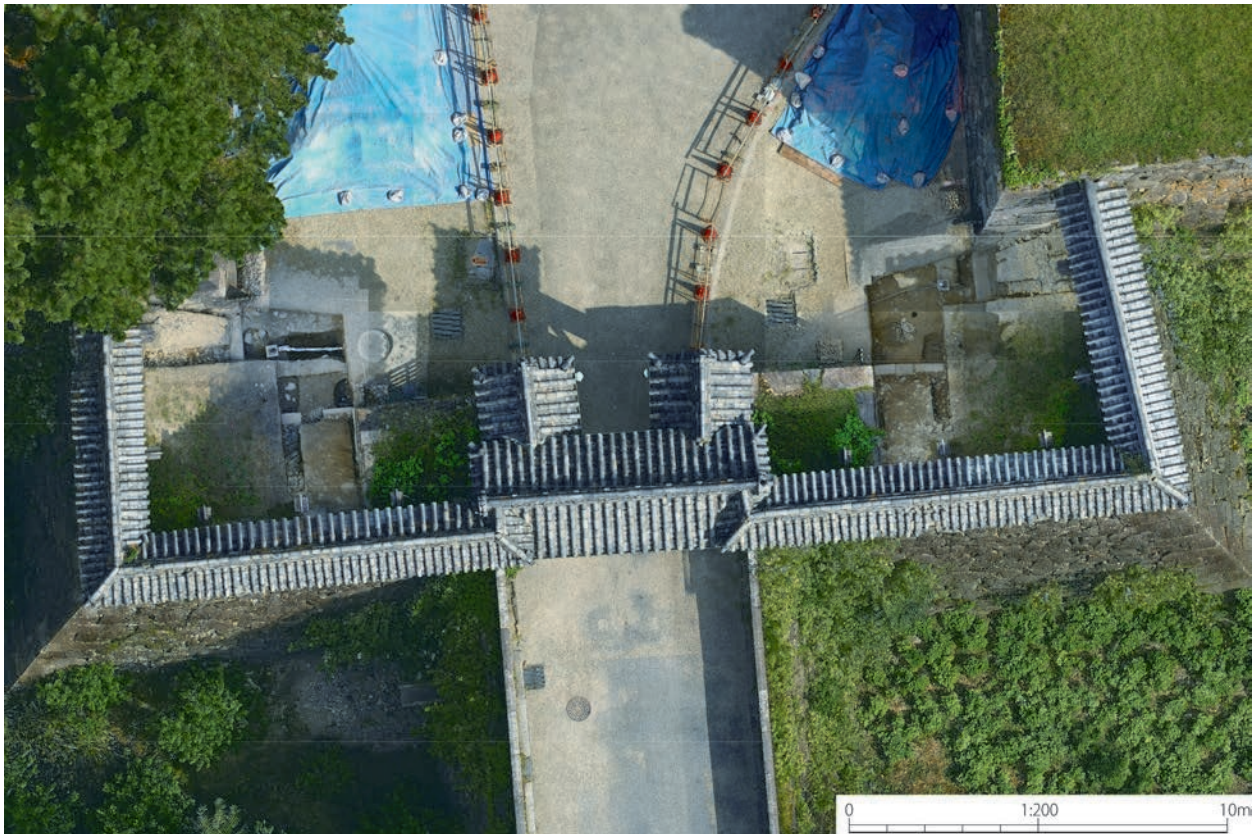


1 重要文化財名古屋城表二の門(手前)と再建天守閣(奥)空撮写真(南から)

巻頭図版 2



1 重要文化財名古屋城表二の門 第2次調査前状況（北から）



2 第2次調査完掘状況 オルソ画像



1 調査区 3・4 完掘状況 オルソ画像



2 調査区 5・6 完掘状況 オルソ画像

巻頭図版 4



1 調査区3・4 完掘状況（北西から）



2 調査区5・6 完掘状況（北東から）

例 言

1. 本書は、愛知県名古屋市中区本丸に所在する特別史跡名古屋城跡において、重要文化財名古屋城表二の門の大規模修理に向けて、令和元(2019)年度から令和4(2022)年度に実施した試掘調査等の報告書である。
2. 本調査及び本書作成は、名古屋市観光文化交流局名古屋城総合事務所名古屋城調査研究センター（以下、「名古屋城調査研究センター」という）が実施した。
3. 試掘調査の調査期間・調査面積・調査担当者は下記の通りである。

第1次	調査期間	令和元年(2019)11月7日～11月14日
	調査面積	約2㎡
	調査担当者	木村有作（名古屋城調査研究センター調査研究係学芸員） 古田成美（名古屋城調査研究センター調査研究係調査研究事務嘱託員）
	排土工事	岩間造園株式会社
第2次	調査期間	令和4年(2022)8月22日～9月22日
	調査面積	約36㎡
	調査担当者	大村 陸（名古屋城調査研究センター調査研究係学芸員） 酒井将史（名古屋城調査研究センター調査研究係学芸員）
	排土工事	有限会社さくら緑化
	測量業務	株式会社中部テクノス

4. 本書の執筆は、第1・2・4～6章を大村陸が、第3章を種田祐司が担当した。編集は大村陸が担当した。なお、第1次調査の成果は木村有作の協力のもと大村陸が整理した。
5. 本調査の図面・写真・出土品等の資料は、名古屋城調査研究センターで保管する。
6. 本書の作製にあたって下記の諸機関より資料を提供頂いた。
宮内省宮内公文書館 瀬戸市文化課 名古屋市博物館 名古屋市蓬左文庫 靖國神社遊就館

凡 例

1. 本書における水準高は、東京湾平均海面（T. P.）を、座標系は世界測地系第7系を使用している。
2. 方位は座標北である。
3. 本書における土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』による。
4. 本書での図版の縮尺は各図中に示した。
5. 本書での写真図版の縮尺は任意である。
6. 引用・参考文献は、章末ごとに掲載している。

目次

巻頭図版

例言

凡例

第1章 調査の経緯と経過

第1節	調査の経緯	1
第2節	調査の事業体制	2
第3節	調査の経過	4

第2章 位置と環境

第1節	地理的環境	7
第2節	歴史的環境 ―本丸・表二の門を中心に―	8
第3節	既往の調査	10

第3章 表二の門の概要

第1節	名古屋城内の諸門	13
第2節	表二の門の構造	14
第3節	雁木	15

第4章 試掘調査の成果

第1節	第1次調査（令和元〔2019〕年度）	21
第2節	第2次調査（令和4〔2022〕年度）	25
第3節	〔参考〕平成23(2011)年度調査	38
第4節	出土遺物	39

第5章 その他の調査成果

第1節	ビデオスコープ調査	42
第2節	雁木計測調査	46

第6章 総括

図版	53
----	----

報告書抄録

CD-ROM

巻頭図版目次

巻頭図版 1

- 1 重要文化財名古屋城表二の門(手前)と再建天守閣(奥) 空撮写真(南から)

巻頭図版 2

- 1 重要文化財名古屋城表二の門 第2次調査前状況(北から)
- 2 第2次調査完掘状況 オルソ画像

巻頭図版 3

- 1 調査区3・4 完掘状況 オルソ画像
- 2 調査区5・6 完掘状況 オルソ画像

巻頭図版 4

- 1 調査区3・4 完掘状況(北西から)
- 2 調査区5・6 完掘状況(北東から)

挿図目次

図1-1	アスファルト除去状況	4	図4-9	調査区3・4 平面図	28
図1-2	調査状況	4	図4-10	調査区3・4 土層断面図(1)	28
図1-3	埋戻し状況	4	図4-11	調査区3・4 土層断面図(2)	29
図1-4	アスファルト打設状況	4	図4-12	調査区5・6 平面図	31
図1-5	調査状況	6	図4-13	調査区5・6 土層断面図(1)	32
図1-6	石垣・埋文部会・建造物部会視察状況	6	図4-14	調査区5・6 土層断面図(2)	33
図1-7	遺構面土のう養生状況	6	図4-15	切石No.1～4 平面・断面図	35
図1-8	埋戻し状況	6	図4-16	切石No.5～8 平面・断面図	35
図2-1	名古屋市の地形と名古屋城の立地	7	図4-17	切石No.2 底面状況	35
図2-2	名古屋城既往の発掘調査位置図	10	図4-18	切石No.5 底面状況	35
図3-1	『金城温古録』での「南二之門」(表二の門)	14	図4-19	調査区3・4 石垣面加工痕	36
図3-2	城内雁木位置図	17	図4-20	調査区5・6・榎多門石垣面加工痕	37
図3-3	二之丸東二之門雁木(北側)	18	図4-21	基本土層	38
図3-4	二之丸東二之門雁木(南側)	18	図4-22	表二の門周辺調査状況	38
図3-5	二之丸大手二之門雁木(北側)	18	図4-23	出土遺物計測箇所	39
図3-6	二之丸大手二之門雁木(南側)	18	図5-1	東北隅櫓石段スコープ挿入箇所	42
図4-1	表二の門周辺 既往調査区位置重ね図	21	図5-2	東北隅櫓石段スコープ画像	43
図4-2	第1次調査 調査区位置図	22	図5-3	二之丸東二之門スコープ挿入箇所	44
図4-3	調査区1 平面・土層断面図	23	図5-4	二之丸東二之門スコープ画像	45
図4-4	調査区2 平面・土層断面図	24	図5-5	雁木石材寸法分布図	46
図4-5	ガラス乾板写真1(表二の門背面)	25	図5-6	二之丸東二之門「石工」刻銘	47
図4-6	ガラス乾板写真2(表二の門背面)	25	図5-7	東北隅櫓石段石材番号	47
図4-7	表二の門現況土塁測量図	26	図5-8	二之丸東二之門・大手二之門石材番号	48
図4-8	第2次調査 調査区位置図	27			

表目次

表1-1 有識者会議における協議経過……………3	表4-1 出土遺物観察表（瓦）……………40
表2-1 名古屋城表二の門関連年表……………9	表4-2 出土遺物観察表（陶器・磁器）……………41
表2-2 名古屋城既往の発掘調査履歴(1)……………11	表5-1 出土切石と城内雁木の比較……………47
表2-3 名古屋城既往の発掘調査履歴(2)……………12	表5-2 東北隅櫓石段 計測値一覧……………49
表3-1 名古屋城内の枡形門一覧……………13	表5-3 二之丸東二之門北側雁木 計測値一覧…50
表3-2 絵図にみる雁木の変遷(1)……………19	表5-4 二之丸東二之門南側雁木 計測値一覧…51
表3-3 絵図にみる雁木の変遷(2)……………20	表5-5 二之丸大手二之門雁木 計測値一覧…51

図版目次

図版 1	図版 6
1 第1次調査 調査区1完掘状況（東から）	1 第2次調査 調査区5完掘状況（北から）
2 調査区1完掘状況（南から）	2 調査区5近世層検出状況（北から）
図版 2	3 調査区5地表下石垣検出状況（北西から）
1 第1次調査 調査区2完掘状況（東から）	4 調査区5切石検出状況（北から）
2 調査区2控柱基部検出状況（北東から）	5 切石抜き取り痕検出状況（北から）
3 調査区1コンクリート基礎検出状況（北から）	図版 7
4 調査区2控柱下端鉄製ボルト検出状況	1 第2次調査 調査区6完掘状況（東から）
図版 3	2 調査区6控柱根固め検出状況（東から）
1 第2次調査 調査区3・4完掘状況（北から）	3 調査区6地表下石垣検出状況（南東から）
2 第2次調査 調査区5・6完掘状況（北から）	4 調査区6切石検出状況（東から）
図版 4	5 調査区6切石側面検出状況（東から）
1 第2次調査 調査区3完掘状況（西から）	図版 8
2 調査区3控柱根固め検出状況（西から）	1 調査区3・4土層断面 オルソ画像
3 調査区3石垣面検出状況（北西から）	図版 9
4 調査区3切石検出状況（西から）	1 調査区5・6土層断面 オルソ画像
5 調査区3切石側面検出状況（西から）	図版10
図版 5	1 出土遺物1 軒丸・軒棧瓦
1 第2次調査 調査区4完掘状況（北から）	2 出土遺物2 軒平・軒棧瓦
2 調査区4瓦だまり完掘状況（東から）	図版11
3 調査区4ピット検出状況（南から）	1 出土遺物3 刻印瓦、施釉瓦
4 調査区4切石検出状況（北から）	2 出土遺物4 陶器（碗類・皿類）
5 調査区4切石側面検出状況（北から）	図版12
	1 出土遺物5 陶器（鉢類・蓋類・壺類）
	2 出土遺物6 陶器（近世以前）・磁器
	3 出土遺物7 円礫サンプル

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

重要文化財指定と保存活用計画

重要文化財名古屋城表二の門は、特別史跡名古屋城跡の本丸地区南部に位置する、本瓦葺の高麗門である。昭和5年(1930)12月11日に宮内省から名古屋市へ下賜されて以降、名古屋市の所有管理となっている。名古屋城には現存する門として、名古屋城表二の門、名古屋城二之丸大手二之門、名古屋城旧二之丸東二之門(本丸東二之門跡へ移築再建)の3門があり、全て重要文化財に指定されている(表二の門:昭和25年(1950)8月29日指定〔昭和5年(1930)12月11日旧国宝指定の再指定〕、二之丸大手二之門・旧二之丸東二之門:昭和50年(1975)6月23日指定)。なかでも表二の門は両脇に附属土塀が現存しており、城内で唯一の事例である。なお、重要文化財名古屋城表二の門として指定されているのは門部分のみで、附属土塀及び土塀背面土塁は特別史跡名古屋城跡の構成要素となっている。

重要文化財の3門のうち、旧二之丸東二之門が平成25年(2013)に解体修理を実施、二之丸大手二之門が昭和46年(1971)に修理再建されている一方で、表二の門はこれまで大規模修理等が行われていない。このため、経年劣化が著しく、小規模な修理の繰り返しによる保全が困難な状態となっていた。

平成30年(2018)には『特別史跡名古屋城跡保存活用計画』が策定され、表二の門は保存のための整備として、「劣化状況調査や耐震診断を実施し、保存状況に応じた適切な修復計画を策定した上で、修復整備を行う」(p.203)と明記された。

第1次調査と耐震診断調査の実施

保存活用計画を受けて、令和元(2019)年度には耐震診断調査が実施された(令和元年8月5日～令和2年3月13日)。構造計算の結果、表二の門は控柱の柱脚と既存の基礎コンクリートが十分接合されていれば、現状でも耐震性能を有するとされた。附属土塀は桁行方向が地震力・風圧力とも所定強度を満たすが、梁間方向は風圧力に対して不足する計算結果が得られた。このほかに表二の門各所の破損確認調査も実施され、計25箇所破損が見られることが報告された。

構造計算を行うために地表下の基礎部分を確認する必要があり、試掘調査(第1次調査)を実施した(令和元年11月7日～11月14日)。表二の門と附属土塀の控柱下端を確認する目的で、控柱に隣接して2箇所の調査区(計2㎡)を設けて調査を行った。調査の詳細は第4章第1節にて報告する。

また、表二の門の過去の修理状況が不明瞭であったため、名古屋離宮であった時期(明治26年[1893]～昭和5年[1930])に管理していた宮内省の工事記録について、宮内庁宮内公文書館にて史料調査を実施した。「名古屋離宮沿革誌」や「工事録」に表二の門の修理について記載があり、宮内省によって計4度の修理工事が行われていたことを確認した。

保存修理方針の策定

耐震診断調査の成果等から、令和2(2020)年度に『名古屋城表二の門等保存修理方針』を策定した。策定にあたっては、表二の門各所の破損状況が改めて整理され、解体修理を前提とした修理計画が作成され

た。有識者会議等を通して検討するなかで、修理工事に合わせて、附属土塀の背面にかつて存在した雁木を復元整備する必要性が指摘された。

第2次調査の実施

これを受けて、令和3(2021)年度より雁木を復元整備できるかどうか検討するための調査を開始した。

まず令和3年度に城内事例の検討として、ビデオスコープ調査と雁木計測調査を行った。それぞれの調査は雁木（二之丸大手二之門雁木：現存、二之丸東二之門雁木：修復整備）と石段（東北隅櫓石段：現存）の3事例を対象とした。ビデオスコープ調査では、石同士の隙間からビデオスコープを挿入し、背面構造を確認した。雁木計測調査では、雁木1石の寸法を悉皆的に計測し、整理した。これらの調査の詳細は第5章にて取り扱う。

令和4(2022)年度には試掘調査（第2次調査）を実施した（令和4年8月22日～9月22日）。雁木の遺構を確認する目的で、土塀背面の土塁を調査対象とした。令和3年度調査で確認した、土塁に隣接する石垣面で雁木に合わせて加工したような痕跡や遺構の残存状況の想定から、石垣に沿うように4箇所の調査区（計36㎡）を設けた。調査の詳細については第4章第2節にて報告する。

第2節 調査の事業体制

事業体制

名古屋城表二の門試掘調査にあたっては、特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議（以下、「全体整備検討会議」という）、特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議建造物部会（以下、「建造物部会」という）、特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議石垣・埋蔵文化財部会（以下、「石垣・埋文部会」という）から指導を受け、文化庁、愛知県県民文化局文化部、名古屋市教育委員会等の関係諸機関の協力を得て実施した。各有識者会議の構成員は以下の通りである（令和5年3月31日現在）。

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議（令和元年度～令和4年度）

座 長：瀬口 哲夫 名古屋市立大学名誉教授
副 座 長：丸山 宏 名城大学名誉教授
構 成 員：赤羽 一郎 前名古屋市文化財調査委員会委員長・元愛知淑徳大学非常勤講師
小濱 芳朗 名古屋市立大学名誉教授
高瀬 要一 公益財団法人琴ノ浦温山荘園代表理事
麓 和善 名古屋工業大学名誉教授
三浦 正幸 広島大学名誉教授
藤井 譲治 京都大学名誉教授（令和2年度より）

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 建造物部会（令和元年度～令和4年度）

座 長：小濱 芳朗 名古屋市立大学名誉教授
副 座 長：溝口 正人 名古屋市立大学大学院教授
構 成 員：小松 義典 名古屋工業大学大学院准教授
野々垣 篤 愛知工業大学准教授

麓 和善 名古屋工業大学名誉教授

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 石垣・埋蔵文化財部会（令和元年度～令和4年度）

座 長：北垣聰一郎 石川県金沢城調査研究所名誉所長

副 座 長：赤羽 一郎 前名古屋市文化財調査委員会委員長・元愛知淑徳大学非常勤講師

構 成 員：千田 嘉博 奈良大学教授

西形 達明 関西大学名誉教授

宮武 正登 佐賀大学教授

梶原 義実 名古屋大学大学院教授（令和2年度より）

有識者会議における協議経過

名古屋城表二の門試掘調査の実施に向け、令和元年度から令和4年度に全体整備検討会議で4回、建造物部会で4回、石垣・埋蔵部会で4回、調査内容の検討や報告、現地視察を行った（表1-1）。

表1-1 有識者会議における協議経過

開催日程					議 事
年度	全体整備 検討会議	建造物部会	石垣・ 埋蔵部会	日 付	
令和元		現場視察		11月13日	耐震診断調査経過報告、試掘調査（第1次）状況確認 史料調査成果報告
令和2年度		第25回		8月7日	耐震診断調査成果報告 保存修理方針検討
		第26回		2月22日	名古屋城表二の門等の保存修理方針（案）内容 ・細部の修理方針、スケジュール、雁木復元整備
	第38回			3月30日	名古屋城表二の門等の保存修理方針（案）内容 ・修正事項、雁木復元整備
令和3年度	第41回			7月9日	名古屋城表二の門等の保存修理方針（案）内容 ・修正事項
			現場視察	10月29日	試掘調査計画
	第45回			11月5日	城内事例調査・史料調査成果報告 試掘調査計画
			第46回	1月25日	城内事例調査・史料調査成果報告 試掘調査内容 ・調査目的、調査区設定、調査方法
		第29回		2月21日	城内事例調査・史料調査成果報告 試掘調査内容 ・調査目的、調査区設定、調査方法
	第47回			3月4日	試掘調査内容 ・調査目的、調査区設定、調査方法
令和4年度			現場視察	9月7日	試掘調査（第2次）状況確認
		現場視察		9月7日/ 9月12日	試掘調査（第2次）状況確認
	第54回			2月3日	試掘調査（第2次）成果報告、次年度計画
			第54回	2月10日	試掘調査（第2次）成果報告、次年度計画
	第32回			2月10日	試掘調査（第2次）成果報告、次年度計画

第3節 調査の経過

第1次調査（令和元〔2019〕年度）

令和元年度の第1次調査は、同年度に実施した耐震診断調査に伴い、試掘調査を実施した。10月18日に試掘調査に係る現状変更の許可を受け（元受文庁第4号の1024）、11月7日より調査を開始した。調査区は表二の門西控柱下端部と附属土塀控柱下端部の2か所で1mずつ計2mに設けた（調査区1・2）。

調査開始から2日間掘削したのち記録作業を行い、11月13日には教育委員会文化財保護室（以下、「文化財保護室」という）の確認と建造物部会の視察を受けた。翌日の11月14日に埋戻しを実施して調査を終了した。

【調査日誌抄（11月7日～11月14日：作業6日間）】

- 11月7日 調査区1：調査区設定、アスファルト除去、掘削開始
- 11月8日 調査区1：掘削、写真撮影 調査区2：調査区設定、掘削開始
- 11月11日 基準点・水準測量 調査区1：平面図作成、断面図作成、土層注記
- 11月12日 調査区2：写真撮影、平面図作成、断面図作成、土層注記
- 11月13日 文化財保護室確認、建造物部会視察
- 11月14日 調査区埋戻し 調査区1：碎石転圧、アスファルト打設



図1-1 アスファルト除去状況



図1-2 調査状況



図1-3 埋戻し状況



図1-4 アスファルト打設状況

第2次調査（令和4〔2022〕年度）

令和4年度の第2次調査は、大規模修理工事に合わせて雁木の復元整備が可能かどうか検討するため、雁木に関する遺構の確認を目的として、試掘調査を実施した。5月20日に試掘調査に係る現状変更の許可を受け（4文庁第530号）、8月2日より調査を開始した。附属土塀背面の土塁部を調査対象とし、斜面上端から両脇の石垣面に沿って平坦面までを覆うようにL字状の調査範囲を東西の土塁で設定した。2か所のL字状の調査範囲をそれぞれ2つに分け、4か所の調査区（計36㎡）とした（調査区3～6）。

掘削に先立って土塁の現況測量を実施し、調査前の状態を記録した。8月22日に土塁を囲んでいた木柵を撤去し、調査区の設定を行った。8月24日には調査区5で雁木の最下段を検出し、他の調査区でも同様に検出した。各調査区の斜面部では幅50cmのサブトレレンチを設定し、栗石を検出した。また、各調査区の石垣面で雁木の痕跡を確認したため、斜面部の石垣際に幅15cmのサブトレレンチを設定し、石垣面の観察・記録を実施した。調査上の節目において文化財保護室の立会いがあり、調査の指導・助言を受けた。9月7日に石垣・埋文部会、9月7・12日に建造物部会構成員の視察を受けた。9月14日から20日かけて記録作業を行い、21日に埋戻しを実施、22日に木柵を復旧して調査を終了した。

【調査日誌抄（8月2日～9月22日：作業23日間）】

8月2日	ドローン撮影、現況土塁測量	9月6日	調査区3掘削
8月3日	基準点・水準測量		調査区4サブトレ掘削
8月22日	木柵撤去、調査区設定 調査区5掘削開始 文化財保護室立会い		調査区5・6清掃
8月24日	調査区5掘削 調査区3・4・6掘削開始 調査区5にて雁木最下段検出	9月7日	調査区3～6清掃 調査区5・6写真撮影 石垣・埋文部会、建造物部会視察 文化財保護室立会い
8月25日	調査区4～6掘削 調査区4・6にて雁木最下段検出	9月8日	調査区3～5掘削
8月26日	調査区4～6掘削 調査区5・6石垣面に雁木痕跡を確認	9月9日	調査区3～5掘削 調査区5サブトレ掘削 調査区3石垣面に雁木痕跡を確認 三浦正幸全体整備検討会議構成員視察
8月29日	調査区4掘削 調査区5・6サブトレ掘削 栗石検出 調査区5にて雁木最下段採取痕を検出	9月12日	調査区3～5掘削 調査区6サブトレ掘削 建造物部会視察
8月30日	調査区5掘削 調査区4・6サブトレ掘削 栗石検出 文化財保護室立会い	9月13日	調査区4掘削 調査区4～6サブトレ掘削
8月31日	調査区4～6掘削 調査区3掘削開始 サブトレ掘削 調査区5・6石垣面3Dモデル作成	9月14日	調査区3～6サブトレ掘削 調査区5・6断面図作成
9月2日	調査区4～6掘削 調査区3サブトレ掘削 雁木最下段検出 調査区5・6石垣面雁木痕跡の観察	9月15日	調査区3・4サブトレ掘削、断面図作成 調査区5・6完掘写真撮影 文化財保護室立会い
9月5日	調査区3・4掘削 調査区3サブトレ掘削 調査区5・6清掃 調査区3・4石垣面3Dモデル作成	9月16日	ドローン撮影、平面図測量 調査区3・4完掘写真撮影
		9月20日	調査区3～6断面図作成 重機搬入、遺構面土のう養生
		9月21日	調査区埋戻し
		9月22日	木柵復旧



図1-5 調査状況



図1-6 石垣・埋文部会・建造物部会視察状況



図1-7 遺構面土のう養生状況



図1-8 埋戻し状況

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

名古屋市は、濃尾平野の東に位置し、伊勢湾に南面して緩やかな東高西低の地勢にある。名古屋市域の地形は大きく丘陵・台地・低地の3つに分けることができる。この特徴的な地形は、東から西に向かって傾斜する地質構造に起因し、遺跡の分布にも大きな影響を与えている。

市域東部の丘陵地帯は標高30～100m程度であり、北東部から南の知多半島へと直線的に連なり、低いながら東側の境川水系との分水嶺となっている。

市域北部と西部には低地帯が台地や丘陵部を取り巻くように広がる。台地北側は守山へと続く台地を庄内川や谷田川が浸食してできた低地であり、旧流路・自然堤防・後背湿地などが沖積層の下に埋没している。

市域中心部は標高5m～30mのきわめて平坦な台地地形を呈する。台地は6～9万年前に火山灰降灰の海底堆積物が隆起してできたといわれる洪積台地であり、熱田層と呼ばれている海成の砂・シルト・粘土の互層で構成されている。この台地は熱田層が堆積した後、海面が低くなった時期に河川の浸食によって削り残された部分が台地化したもので、熱田台地と呼ばれている。熱田台地は名古屋城付近から熱田神宮までの南北15kmほどで、東西は広いところで3kmほどの細長い形状をしている。台地北側は旧流路の浸食崖と思われ、崖下には後背湿地の沼地が広がっていた。また台地西側は平野部深く入り込んでいた海による浸食崖が南北にのび、崖下には波食台と呼ばれる洪積世の地盤が沖積層の浅い部分で埋没している。

名古屋城は標高約10mの熱田台地北西端に位置しており、北西方が断崖であるとともに濃尾平野の眺望が開ける絶好の立地にある。東と南に連なる台地は、城下町の中心部を形成するのに安定した地盤が広がり、その南端には東海道と熱田湊が位置していた。

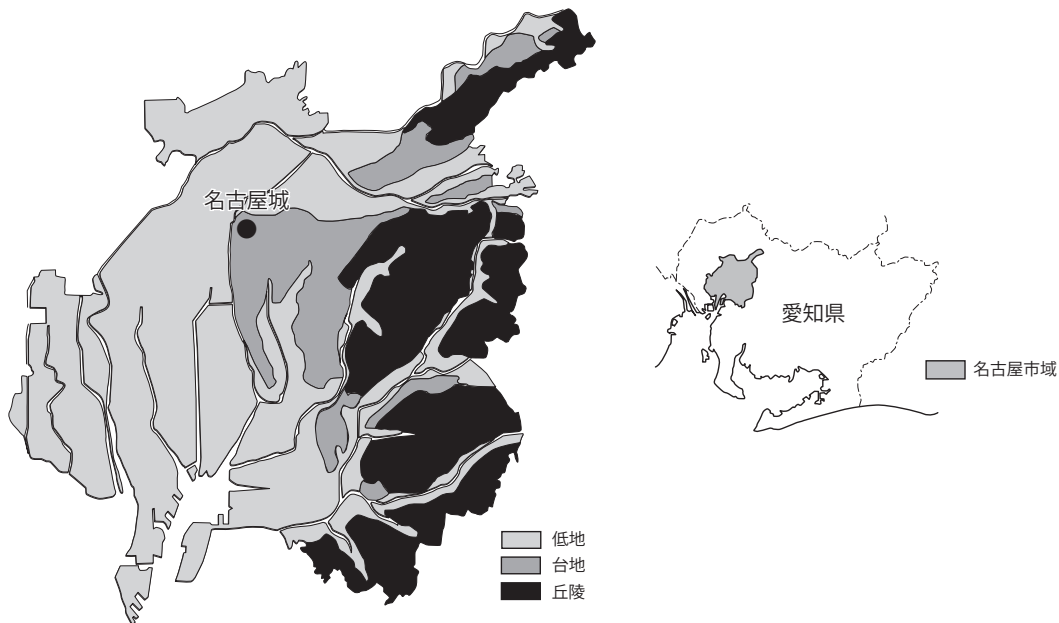


図2-1 名古屋市の地形と名古屋城の立地

第2節 歴史的環境 一本丸・表二の門を中心に一

名古屋城は、徳川家康の命により、慶長15年(1610)に西日本を中心とした諸大名20名を動員し、公儀普請によって築城が開始された。方形で直線状の縄張りが特徴的で、本丸を取り囲むように二之丸・西之丸・御深井丸・塩蔵構があり、その外側に三之丸を設ける曲輪配置であった。その各所に馬出や土橋、枳形門、堀などが駆使され、強固な防衛がなされた。慶長17年(1612)には大・小天守が完成し、同じ頃に表二の門や東南隅櫓、西南隅櫓も完成した。

慶長20年(1620)には本丸御殿が完成し、翌元和2年(1621)に尾張徳川家初代藩主である徳川義直が駿府城から名古屋城に居を移した。元和3年(1617)に二之丸御殿が完成し、その後藩主の拠点は二之丸へ移ることとなる。江戸時代を通して表二の門がどのように取り扱われていたのか修理履歴などは記録が残っていないが、嘉永年間(1848~1854)に尾張藩士奥村得義が著した『金城温古録』や絵図などからおおよその状況を確認することができる。

慶応3年(1867)に大政奉還が起こり、王政復古の大号令が発せられ新政府が発足した。明治5年(1872)には名古屋城本丸に陸軍の東京鎮台第三分営が置かれ、名古屋城は陸軍省の管轄となった。本丸では天守が仮兵舎、本丸御殿が本部として利用された。明治7年(1874)に二之丸や三之丸に兵舎等が整備されると、天守から兵舎が移転したが、本丸御殿については明治20年(1887)に三之丸に司令部建物が新築されるまで、名古屋鎮台本部として利用された。

明治24年(1891)に名古屋城が陸軍省から宮内省へ移管されることが決定されたが、同年に濃尾地震が発生し、本丸の多聞櫓の大破をはじめとして石垣も崩壊するなど城内で甚大な被害を受けた。濃尾地震後の表二の門の被害状況を正面から写した写真が残されており、土塀の漆喰がひどく剥落していたことが分かる。明治26年(1893)に本丸と西之丸東部が宮内省に移管されて名古屋離宮となった。宮内省は明治43年(1910)に榎多門の位置に旧江戸城蓮池門を移築したほか、表二の門では少なくとも4回の修理工事を行った記録が残されている。これらの記録は『名古屋離宮沿革誌』に箇条書きで事項のみ記されており詳細は不明だが、明治39年(1906)の工事のみ『明治三十九年工事録』に決裁文書があり、修理箇所を示した図などが確認できる。

昭和5年(1930)に名古屋離宮が廃止となり、本丸・西之丸・御深井丸が名古屋市所管となった。同年、元離宮名古屋城内城郭建造物24棟が城郭として初めて国宝(旧国宝)に指定された。昭和7年(1932)からは指定された建造物の実測調査を開始し、詳細な図面(「昭和実測図」)等を作成した。また、昭和15年(1940)からは写真撮影も開始し、「ガラス乾板写真」として今も残されている。この両方で表二の門は記録され、正面・背面ともに当時の状況を知ることができる。

昭和20年(1945)5月14日の大空襲により、天守、本丸御殿をはじめとして主要な建造物が焼失した。表二の門と附属土塀は戦災を免れ、昭和25年(1950)には表二の門が重要文化財として再指定された(附属土塀は未指定)。同年、附属土塀の修理工事を実施している。

昭和27年(1952)には史跡指定地一帯が特別史跡に指定された。これにより現在まで表二の門は、表二の門の建物部分が重要文化財、附属土塀の建物部分と一帯の土地範囲が特別史跡の取り扱いとなっている。昭和34年(1959)には市制70周年記念事業として、大・小天守と正門(榎多門)を鉄骨鉄筋コンクリート造で再建した。昭和47年(1972)の台風20号では附属土塀の屋根瓦が飛ぶなど被災し、翌年(1973)部分修理を

行っている。昭和59・60年(1984・1985)には表一の門の石垣積み直し工事が実施され、それに伴って附属土塀の土塁に設置されていた木柵が一時撤去・復旧された。

平成21年(2009)から本丸御殿の再建工事が開始され、表二の門でも門扉の養生や発掘調査が行われた。工事期間中にも小規模な修理工事が行われ、平成30年(2018)には本丸御殿の全体を一般公開した。また、同年「特別史跡名古屋城跡保存活用計画」が策定され、そのなかで表二の門の修復整備について方針が定められた。令和元年(2019)に実施した耐震診断調査なども受け、現在、表二の門の大規模修理に向けて保存方針の策定と調査を進めている。

表2-1 名古屋城表二の門関連年表

和暦	西暦	事 項	管理者	備 考	
慶長17年	1612年	名古屋城築城に伴い、この頃南二之御門(表二の門)が完成	尾張徳川家	江戸期修理記録不明	
嘉永年間	1848年 ～1854年	この頃に奥村得義が『金城温古録』前半部を作成 南二之御門(表二の門)の詳細な図面が作成される			
明治5年	1872年	名古屋城が陸軍省へ移管	陸軍省	陸軍期修理記録不明 震災前後の写真あり	
明治24年	1891年	濃尾地震が発生し、城内各所とともに表二の門が被害を受ける			
明治26年	1893年	本丸と西之丸東部が宮内省へ移管となり、名古屋離宮となる	宮内省	工事図面あり	
明治39年	1906年	[門]屋根修繕、[塀]木材取替え・屋根葺替え・壁漆喰塗替え ※1			
明治43年	1910年	「表二ノ門空濠間木柵改造」の記録あり ※2			
明治44年	1911年	「表二ノ門外濠上柵左右修繕」の記録あり ※2			
大正8年	1919年	「表二ノ門及練塀修繕」の記録あり ※2			
昭和5年	1930年	名古屋離宮が廃止となり、名古屋市へ下賜される 元離宮建造物のひとつとして国宝(旧国宝)に指定	名古屋市	～平成30年まで	
昭和7年	1932年	「昭和実測図」の作成を開始 表二の門の図面が作成される			
昭和15年	1940年	「ガラス乾板写真」の撮影を開始 表二の門正面・背面の写真が撮影される			
昭和20年	1945年	空襲により城内各所とともに表一の門が焼失 表二の門及び附属土塀は戦災を免れる			
昭和25年	1950年	隅櫓・本丸御殿障壁画とともに重要文化財に再指定 [塀]壁漆喰修繕・屋根瓦補修・瓦漆喰塗替え			
昭和47年	1972年	台風20号により附属土塀が被災			
昭和48年	1973年	[塀]屋根葺き替え・部分修理			
昭和59年	1984年	表一の門石垣積み直し工事に伴い、附属土塀の木柵を撤去・復旧			
平成20年	2008年	本丸御殿復元工事に伴い、鉄骨フレームにより門扉を養生する			
平成21年	2009年	表二の門破損状況調査を実施			
平成23年	2011年	本丸御殿復元工事に伴い、表二の門周辺通路の発掘調査を実施			
平成24年	2012年	[塀]屋根漆喰補修・控柱取替え			工事図面、写真あり
平成25年	2013年	[門]屋根漆喰補修			工事図面、写真あり
平成30年	2018年	「特別史跡名古屋城跡保存活用計画」を策定			
令和元年	2019年	耐震診断調査、破損箇所調査を実施 耐震診断調査に伴い、門・附属土塀控柱の試掘調査を実施			
令和2年	2020年	「名古屋城表二の門等保存修理方針」を策定			
令和3年	2021年	雁木復元検討に伴い、城内雁木の検討調査を実施			
令和4年	2022年	雁木復元検討に伴い、附属土塀背面土塁の試掘調査を実施			

[門]…表二の門部分の修理工事、[塀]…附属土塀部分の修理工事

※1『明治三十九年工事録』(宮内庁宮内公文書館蔵)に修理内容記録あり

※2『名古屋離宮沿革誌』(宮内庁宮内公文書館蔵)に修理記録あり(詳細不明)

第3節 既往の調査

名古屋城での発掘調査は、昭和50年(1975)の名古屋城二之丸庭園の調査を先駆けとして、愛知県埋蔵文化財センター、名古屋市教育委員会、名古屋城調査研究センターなどにより断続的に行われており、現在までに40箇所以上の地点で調査が行われている。出土品については、調査主体の各機関等にて保存されている。

特別史跡名古屋城跡では、本丸搦手馬出石垣や本丸御殿、西之丸の米蔵などの整備事業に伴って発掘調査が行われており、名古屋市教育委員会や平成31(2019)年度の名古屋城調査研究センター設立以降は当センターが主体となり、城内各所で調査が進められている。遺構の残存状況は場所ごとに異なり、多くの近世・築城期の遺構のほか、築城時の盛土によって埋め立てられた中世以前の遺構・遺物が確認されており、整備事業の基盤根拠として活用されている。本報告で取り扱う表二の門試掘調査は図2-2中の④⑩である。

名勝二之丸庭園では、昭和50年(1975)の発掘調査成果から昭和54年(1979)に遺構の露出展示を含めて、東庭園の整備が行われた。平成25年(2013)には名勝全域を整備する計画が策定され、整備に先行するかたちで平成25年(2013)から毎年継続的に発掘調査が行われている。

名古屋城三の丸遺跡では、周知の埋蔵文化財包蔵地として、官公庁舎や裁判所・病院・図書館などの公

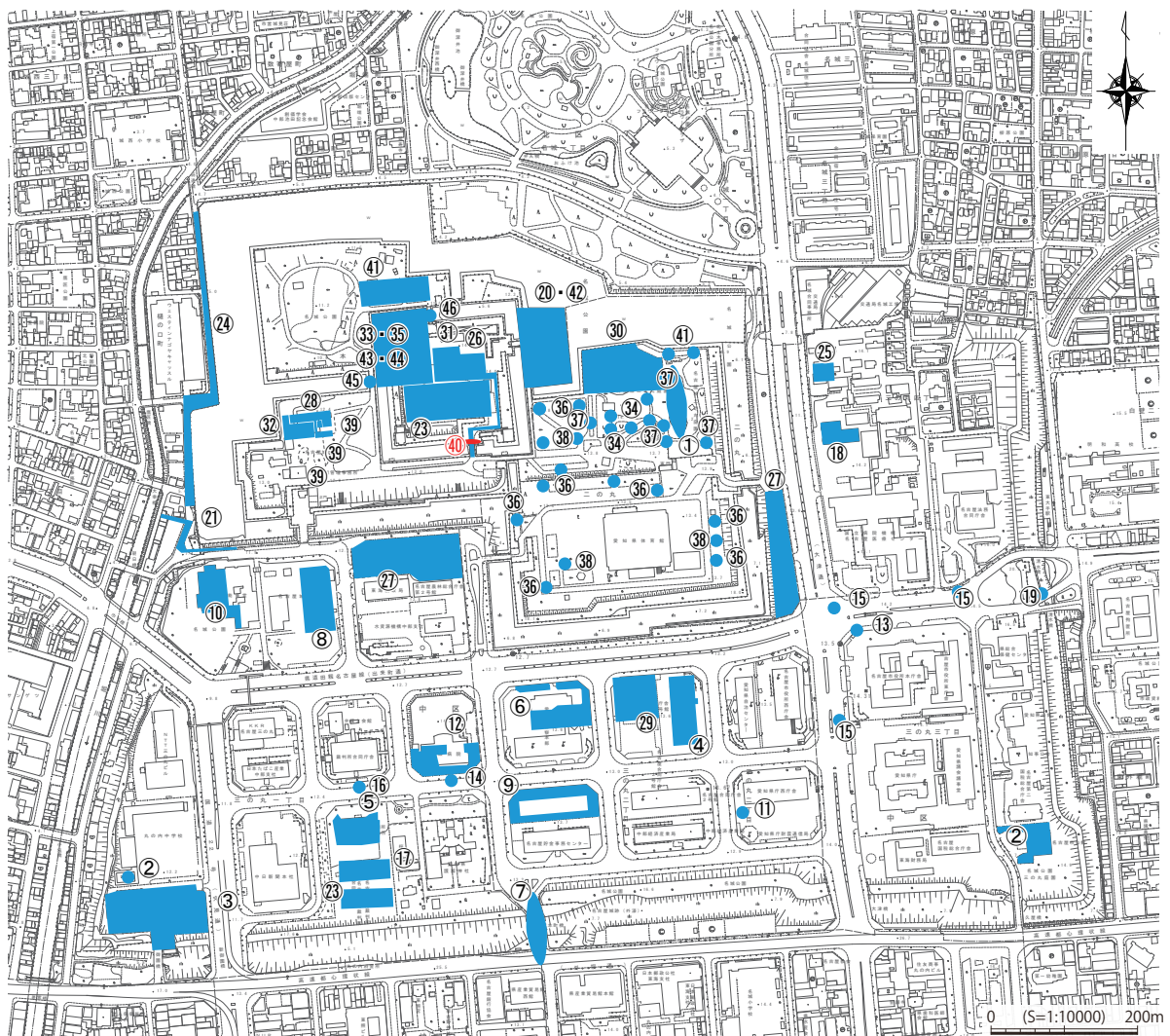


図2-2 名古屋城既往の発掘調査位置図

共施設建設に伴って発掘調査が行われており、近世の武家屋敷や城下町に関する遺構・遺物が多く確認されている。

表2-2 名古屋城既往の発掘調査履歴(1)

No.	発掘調査位置	調査年	事業主体	報告書等
①	名古屋城二之丸庭園	1975～1976	名古屋市教育委員会	『名古屋城二之丸庭園発掘調査概要報告書』(1976)
②	名古屋市公館(1次・3次) 丸の内中学校(2次)	1987～1988	名古屋市教育委員会	『名古屋城三之丸遺跡-1,2,3次調査の概要』(1989)
③	愛知県図書館	1988	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅰ』(1990)
④	名古屋第一地方合同庁舎	1988	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅱ』(1990)
⑤	名古屋家庭簡易裁判所合同庁舎	1990～1991	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅲ』(1992)
⑥	愛知県警察本部	1991	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅳ』(1993)
⑦	本町門	1991	名古屋市教育委員会	『名古屋城本町門跡発掘調査概要報告書』(1992)
⑧	中部電力地下変電所	1992～1993	名古屋市教育委員会	『名古屋城三之丸遺跡第4・5次発掘調査報告書-遺構編・遺物編』(1994)
⑨	愛知県三の丸庁舎	1993～1994	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅴ』(1995)
⑩	名古屋市能楽堂	1993～1994	名古屋市教育委員会	『名古屋城三之丸遺跡第6・7次発掘調査報告書』(1995)
⑪	無線統制室	1995	愛知県教育委員会	『代替無線統制室建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(1997)
⑫	名城病院	1995～1996	名古屋市教育委員会	『名古屋城三之丸遺跡第8・9次発掘調査報告書』(1997)
⑬	地下鉄出入口	1998	名古屋市教育委員会	『名古屋城三之丸遺跡第10次発掘調査報告書』(1999)
⑭	下水道管築造	1999～2000	名古屋市教育委員会	『下水道工事に伴う埋蔵文化財報告書』(2000)
⑮	NTT電話工事	2000	(株)西日本電信電話名古屋支店	『名古屋城三之丸遺跡-平成12年度NTT電話工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(2001)
⑯	ガス管理設工事	2001	(株)東邦ガス	『名古屋城三之丸遺跡-ガス管理設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(2002)
⑰	地方簡易裁判所庁舎	2001	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅵ』(2003)
⑱	国立名古屋病院	2002	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅶ』(2005)
⑲	東清水橋東交差点	2002	名古屋市教育委員会	『愛知県埋蔵文化財情報19』(2004)
⑳	名古屋城本丸搦手元御春屋門	2003・2005	名古屋市教育委員会	『特別史跡名古屋城跡本丸搦手馬出石垣修復工事発掘調査報告書』(2006)
㉑	名古屋城中下門跡	2003	名古屋市上下水道局水道本部	『名古屋城跡中下門跡発掘調査報告書-西区樋ノ口町地内400号排水管布設工事にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書-』(2004)
㉒	地方簡易裁判所合同庁舎	2006～2007	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三之丸遺跡Ⅷ』(2008)
㉓	名古屋城本丸御殿	2006～2008	名古屋市教育委員会	『本丸御殿跡発掘調査報告書-第1,2,3,4次調査-』(2009)

表2-3 名古屋城既往の発掘調査履歴(2)

No.	発掘調査位置	調査年	事業主体	報告書等
②4	樋ノ口町線	2009～2011	名古屋市緑政土木局	『特別史跡名古屋城跡発掘調査報告書(2011)-市道樋ノ口町線整備事業に伴う埋蔵文化財調査の記録-』(2011)
②5	名古屋医療センター職員宿舎	2011	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡-職員宿舎建設予定地埋蔵文化財発掘調査報告書-』(2011)
②6	名古屋城本丸御殿	2012	名古屋城総合事務所	『本丸御殿跡発掘調査報告書-第5,6,7,8次調査-』(2012)
②7	名城公園宿泊所、二之丸東駐車場	2014	名古屋城総合事務所	『名古屋城三の丸遺跡 金シャチ横丁事業に伴う発掘調査報告書』(2015)
②8	名古屋城西之丸四番蔵	2014	名古屋市教育委員会	『特別史跡名古屋城跡発掘調査報告書(名古屋城西之丸)』(2016)
②9	名城東小公園	2015～2016	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡 第12次発掘調査(中央新幹線「名城非常口」地点)』(2017)
③0	名勝名古屋城二之丸庭園笹巻山・栄螺山・多春園・御文庫・二子山・権現山・兵舎跡・余芳・外縁	2013～2015	名古屋城総合事務所	『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書(第1次～第3次)』(2017)
③1	名古屋城本丸御殿	2015	名古屋市教育委員会	『本丸御殿跡発掘調査報告書-第9次調査-』(2017)
③2	名古屋城西之丸三番蔵	2016～2017	名古屋市教育委員会	『特別史跡名古屋城跡西之丸(第2次)(2018)』
③3	名古屋城本丸内堀・小天守	2017～2018	名古屋城総合事務所	『特別史跡名古屋城跡 天守台周辺石垣発掘調査報告書』(2019)
③4	名勝名古屋城二之丸庭園栄螺山・北園池・風信・笠巻山・植木屋・前庭・旧将校集会所跡・枯池・外縁	2016～2018	名古屋城調査研究センター	『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書第4次～第6次』(2020)
③5	名古屋城本丸内堀	2019～2020	名古屋城調査研究センター	『特別史跡名古屋城跡本丸内堀発掘調査報告書』(2023)
③6	名古屋城二之丸地区二之丸御殿・向屋敷・馬場	2018～2019	名古屋城調査研究センター	『名古屋城二之丸地区試掘調査報告書』(2021)
③7	名勝名古屋城二之丸庭園	2019～2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中
③8	名古屋城二之丸地区二之丸御殿・馬場	2020～2021	名古屋城調査研究センター	『特別史跡名古屋城跡未告示地区(二之丸)発掘調査報告書 第3次・第4次』(2023)
③9	名古屋城西之丸	2021～2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中
④0	表二之門附属土塀	2019～2022	名古屋城調査研究センター	『名古屋城表二之門試掘調査報告書 第1次・第2次調査』(2023)
④1	名古屋城御深井丸・小天守	2020	名古屋城調査研究センター	整理調査中
④2	名古屋城本丸搦手境門	2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中
④3	名古屋城本丸天守穴蔵	2021～2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中
④4	名古屋城本丸天守背面石垣	2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中
④5	名古屋城鶴の首(小天守西)水堀側石垣	2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中
④6	名古屋城不明門北土橋石垣	2022	名古屋城調査研究センター	整理調査中

参考文献

名古屋市観光文化交流局名古屋城総合事務所 2018 『特別史跡名古屋城跡保存活用計画』

名古屋市観光文化交流局名古屋城総合事務所名古屋城調査研究センター 2021 『名古屋城二之丸地区試掘調査報告書 第1次・第2次調査』

第3章 表二の門の概要

第1節 名古屋城内の諸門

名古屋城内には多数の門があったが、大きく分けると曲輪内を仕切る門と、枳形門（後述）に分かれる。後者は内堀・外堀を越える門と三之丸外堀・土居を越える門に分けることができる。まず本丸を囲む内堀を越える門として本丸表門（南門）・本丸東門・不明門があり、外堀を越える門には二之丸と三之丸をつなぐ二之丸東門（東鉄門）・二之丸大手門（西鉄門）と、西之丸（江戸時代は御深井丸）と三之丸をつなぐ榎多門（現在は正門）がある。以上6つの門はすべて枳形の虎口を持つ枳形門という形式の門である。典型的な枳形門は、石垣や多門櫓で四角形に囲んだ空間（枳形）の外側に高麗門、内側に櫓門を設けている。最初の門を突破されても次の門へ敵兵が直進できないようにするため、二つの門は直交していることが多い。枳形門には曲輪の外側に付け足したような「外枳形」と、曲輪内の一画を使用する「内枳形」がある。三之丸外堀・土居西から巾下門・御園御門・本町門・東門・清水門の5門があり、枳形の虎口を持つが、門扉は一門に一つずつしかない。

以上11門の門扉のうち、場所も変わらず現存するのは表二の門と二之丸大手二之門のみで、ほかに二之丸東二之門は戦後まで現存していたが、現在は本丸東二之門跡に移築されている。三之丸外堀の5門は現存しないだけでなく、道路拡張のため石垣・土居が大きく改変されている。とくに清水門は何の痕跡も残していない。

表3-1 名古屋城内の枳形門一覧

堀	門名	内	外	門	門の種類	沿革	雁木
内堀	本丸表門 (南門)	本丸	本丸大手馬出	一之門	櫓門	昭和20年(1945)焼失	—
				二之門	高麗門	現存(重要文化財)	撤去
	本丸東門	本丸	本丸搦手馬出	一之門	櫓門	昭和20年(1945)焼失	—
				二之門	高麗門	昭和20年(1945)焼失	撤去
不明門	本丸	御深井丸	外側のみ	埋門	昭和20年(1945)焼失、昭和53年再建	撤去	
外堀	二之丸東門 (東鉄門)	二之丸	三之丸	一之門	櫓門	明治初期、撤去	現存
				二之門	高麗門	昭和47年(1972)本丸東二之門の位置に移築。現存(重要文化財)	—
	二之丸大手門 (西鉄門)	二之丸	三之丸	一之門	櫓門	明治初期、撤去	現存
				二之門	高麗門	現存(重要文化財)	—
榎多門 (正門)	西之丸	三之丸	(内側)	櫓門	明治24年(1891)以後撤去。明治43年(1910)江戸城蓮池門を移築、昭和20年(1945)焼失。昭和34年(1959)蓮池門の姿で再建。	撤去	
			(外側)	高麗門	明治42年(1909)頃撤去か	—	
三之丸外堀	巾下門	三之丸	新馬場	内側のみ	櫓門	明治初期に撤去か	—
	御園門	三之丸	御園筋	内側のみ	櫓門	明治初期に撤去か	—
	本町門	三之丸	本町筋	内側のみ	櫓門	明治初期に撤去か	—
	東門	三之丸	長堀筋	内側のみ	櫓門	明治初期に撤去か	—
	清水門	三之丸	土居下	内側のみ	高麗門	明治初期に撤去か	—

第2節 表二の門の構造

この門は前述のように枅形門である。枅形とは枅（升）のような四角形のことで、城門についていえば、門の内側に設けられた広場（虎口という）のことである。ここに侵入した敵兵に四方から矢を射ることができる。名古屋城の場合も表一之門と二之門の間はほぼ正方形の空間で、四辺は門・多門櫓で囲まれ、枅形の一部が内堀に張り出している。この形式の門は堀に張り出した土塀にも狭間を設けることができ、堀底に侵入した敵兵を撃つことができる。本丸表門は『金城温古録』第一六之冊によれば東西10間、南北11間5尺の大きさである。次にこの門を構成する要素ごとに解説する。なお他の城では外側を一之門、内側を二之門としていることが多く、名古屋城はその逆である。

- 一之門 門の形式は櫓門。櫓門は、門の上に長屋状の建物（多門櫓・渡櫓）を設けた門である。門扉は木製であるが、全面鉄板に覆われていた。『金城温古録』によれば門柱は3尺1寸角、扉は両開きで高さ1丈5尺、1枚の幅7尺8寸であった。左側の扉には高さ5尺7寸、幅4尺5寸の片開きの通用扉が付属していた。昭和20年(1945)戦災で焼失。
- 二之門 門の形式は高麗門。高麗門は、鏡柱と控柱を一つの大きな屋根に収める構造の薬医門を簡略化したもので、屋根を小ぶりにして守備側の死角を減らす工夫が施された。さらに鏡柱と控柱をつなぐ部分にも屋根が置かれ、門扉も屋根で保護されるなどの工夫がなされた。柱の構造は、鏡柱2本と内側の控柱2本から構成されている。名古屋城は高麗門と左右の土塀の屋根が同じ

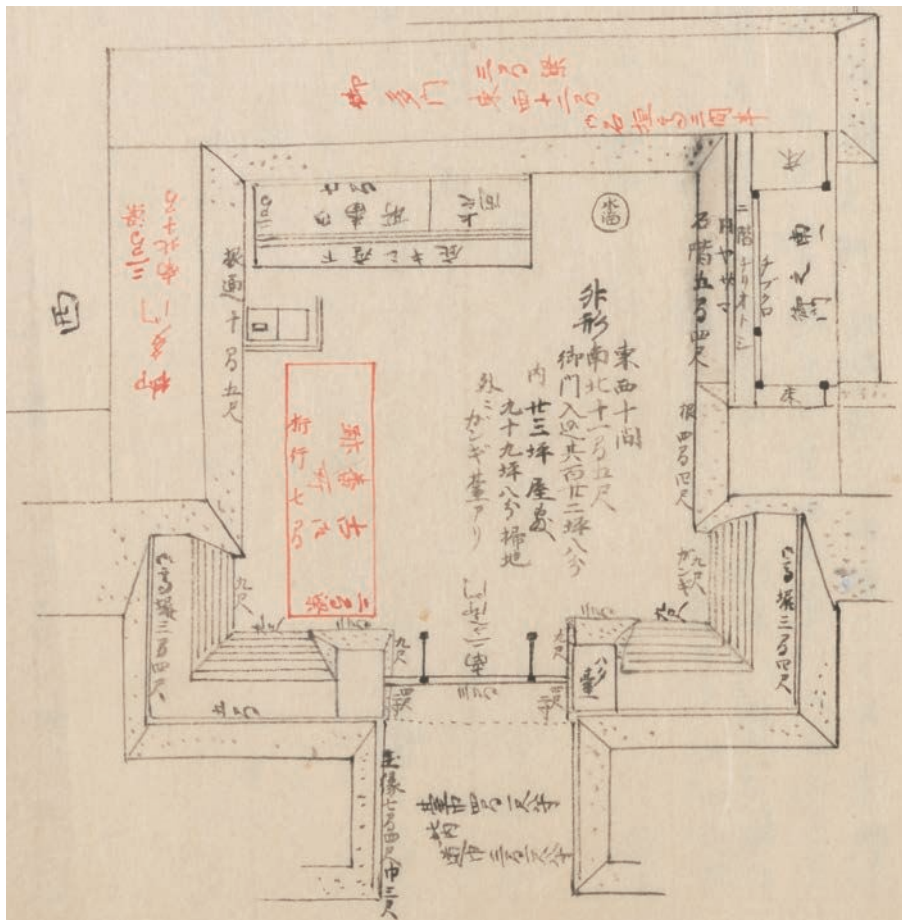


図3-1 『金城温古録』での「南二之門」(表二の門)

高さとなるが、高麗門が左右の塀より高くなる城も多い。『金城温古録』によれば門柱は2尺1寸角、扉は両開きで高さ1丈3尺3寸、1枚の幅6尺3寸である。左側の扉には高3尺5寸、幅2尺2寸の片開きの通用扉が付属する。現存。

石垣（多門櫓や土塀の土台） 現存 表門の二つの門以外は石垣で囲われており、『金城温古録』によれば多門櫓部分は地表から高さ3間半、二之門の両側、雁木の部分の高さは9尺である。

多門櫓 枡形の北辺と西辺北側は石垣の上に多門櫓があった。『金城温古録』によれば幅は3間、長さは北辺12間、西辺10間である。明治24年(1891)の濃尾震災で被害を受け、間もなく取り壊された。

土塀 二之門の両側（雁木があった部分）L字部分には、土台上部に土塀がある。土塀上部には瓦屋根が葺かれた。また2つの土塀それぞれ正面に4つ、側面に2つの円形の狭間がある。現存。

雁木 両側の土塀内側には雁木があった。雁木については次節で詳しく述べる。大正年間(1912～1926)頃に取り払われたと考えられ、現在は土居（土塁）となっている。

旗台 表二之門扉の両側にある石垣で囲まれた台。構造上、門柱を支えるものではなく、用途は不明。

橋台 内堀を渡る通路。『金城温古録』によれば通路は長さ3間1尺8寸、幅四間1尺8寸である。現存。

番所 枡形内の北辺に沿って間口7間、奥行2間の番所があった。元禄年間(1688～1709)には同じ大きさの番所が西辺に沿ってあったようである。ここは本丸足軽（後に本丸詰同心）が門番を勤めた。三道具・長柄槍などの警備道具や、円座竹・水籠などの防火道具が常備された。明治初期に取り払われたと思われる。

第3節 雁木

『金城温古録』にみる「雁木」

『金城温古録』第四之冊には、次のように雁木の用語解説がある。

がんぎ 御本丸に於て、坂の石段、その製造の精粗に拘はらず、いづ方にも石段をガンギといふ、常に雁木と書て通用す。謹按ずるに、

続撰清正記に、豊太閤の御在世、大坂城大地震の条にがんぎと見ゆ。

後太平記、毛利元就安藝国郡山籠城の段に、塀の内には三間の武者走、百歩一所に三段の岩岐（がんぎ）と書けり。今、地方向諸役所坂路に如斯踏しろ土留のせぎを入る、其形、直横にも雁行にもせよ、是を雁木と云へり、元皆、これ岩岐に因ての称なり。

続撰清正記三三卷十五丁ウ慶長元年七月十二日夜大地震、大坂城の段に、太閤様も政所様も松の丸殿をはじめおのおの石垣のうしろ、築地犬走へ挑燈を御上なされ、其時、太閤御錠には、未だ御前をも御ゆるしなきものが、御前をとりもち候間、石垣より上には無用と仰らるゝといへども、主計（清正）はそれにもかまはず、がんぎの下に立居られ候

大坂御城記 雁木御門御加番持内に番所有之、家来出番也。

得義云。此書中、天保八年を差すの条あれば、古からず、是、御番衆の私記の体なり、察すべし。今、雁木と書るは名府のみにあらず、世間通用なり

とあるように雁木とは石の階段のことで、名古屋城内では約20か所あり、その多くが櫓や土塁（土居）上に登るために設けられた。土塁上の土塀や多門櫓には狭間があった。足軽が土塁のどこからでも登れるように、雁木が横に連続している場合があった。

枳形門、土塀、雁木の組み合わせによる門は、前述のようにこの表門（南門）だけでなく、本丸東門、西の丸榎多門（現正門）、二之丸大手門（西鉄門）、二之丸東門（東鉄門）も同じで、不明門を含む6つの門すべてに連続した雁木があった。雁木の構造は、役割とその場所の傾斜にもよるが、『金城温古録』には多門櫓に登る雁木の記事に、

雁木 十七段、踏石の中壺尺、高九寸程、不同

とあるように、踏石の幅（奥行）は1尺（30.3cm）、高さ9寸（27.3cm）とある。

そのほか『金城温古録』にある雁木に関する記事をいくつかを紹介する。ただし、多くが天守や櫓に登るための石段で、門の雁木については記事が少ない。

・雁木 坂形りに長七間六寸、巾一丈四尺、石階二十四段 小天守北面丑寅の角辺より西へ登り坂、切廻しの石にて組並らべ、石間土築なり、此石段登り口、御制限の所なり。

・雁木 六段 御天守へ登り口、石の段階なり。下より二段にて草履を脱するの慣ひあり、其故を知らず。
(以上第九之冊)

・雁木 十七段、踏石の中壺尺高九寸程不同 御馬出、東西南三面外、御構の御多門台に登る所の石階なり
(第十六之冊)

・櫓御多門前雁木 登り二十七段 北御土居にあり

・丑寅隅御櫓雁木 切石十八段在り 峻しく組有之。長隅の御櫓のみに非、御多門に入処なり。慶長・元和年中、此辺は大奥勤男子向之部屋とも申。扱、丑寅御櫓より西へ之処は女中方の長局なるよし、古老の話なり。

・雁木 不明の御門より西に在り。
(以上第二十一之冊)

名古屋城門の雁木

内堀・外堀を越える6つの門すべてに、創建当初から雁木があった。雁木が設けられた場所は、不明門を除いた5門はそれぞれ二之門両側の内側である。不明門は片側(西)のみ直線状に設けられた。また二之丸大手門（西鉄門）は枳形が全部城壁内に納まっているので、これも雁木は直線状であり、左右両側に設けられた。あとの4門は枳形が一部堀に張り出しているため、左右ともL字形である。

明治以降の雁木

これらの雁木は明治初期まで存在していたが、その後は異なる経緯をたどった。まず不明門と榎多門の雁木は大正の絵図には描かれていない。本丸表門と東門の雁木は大正4年(1915)には描かれているが、大正8年(1919)には描かれていない。もちろん、それぞれの絵図は雁木を描くことが目的ではないので、単に省略しただけとも考えられる。しかし二之丸の門の雁木は描かれており、現在も雁木が残っているので、本丸表門と東門は大正4年から8年にかけて撤去されたと考えることもできる。なぜ二之丸2門の雁木だけ

が残ったかは不明だが、この2門は他の4門と違い、陸軍省の管轄であったことが関係しているかもしれない。4門についていかなる理由で雁木が撤去されたか、石材としてまとめてどこかで再利用されたのか、現時点では不明である。逆に残存している雁木の石材を発見できれば、撤去の時期や経緯がわかるかもしれない。

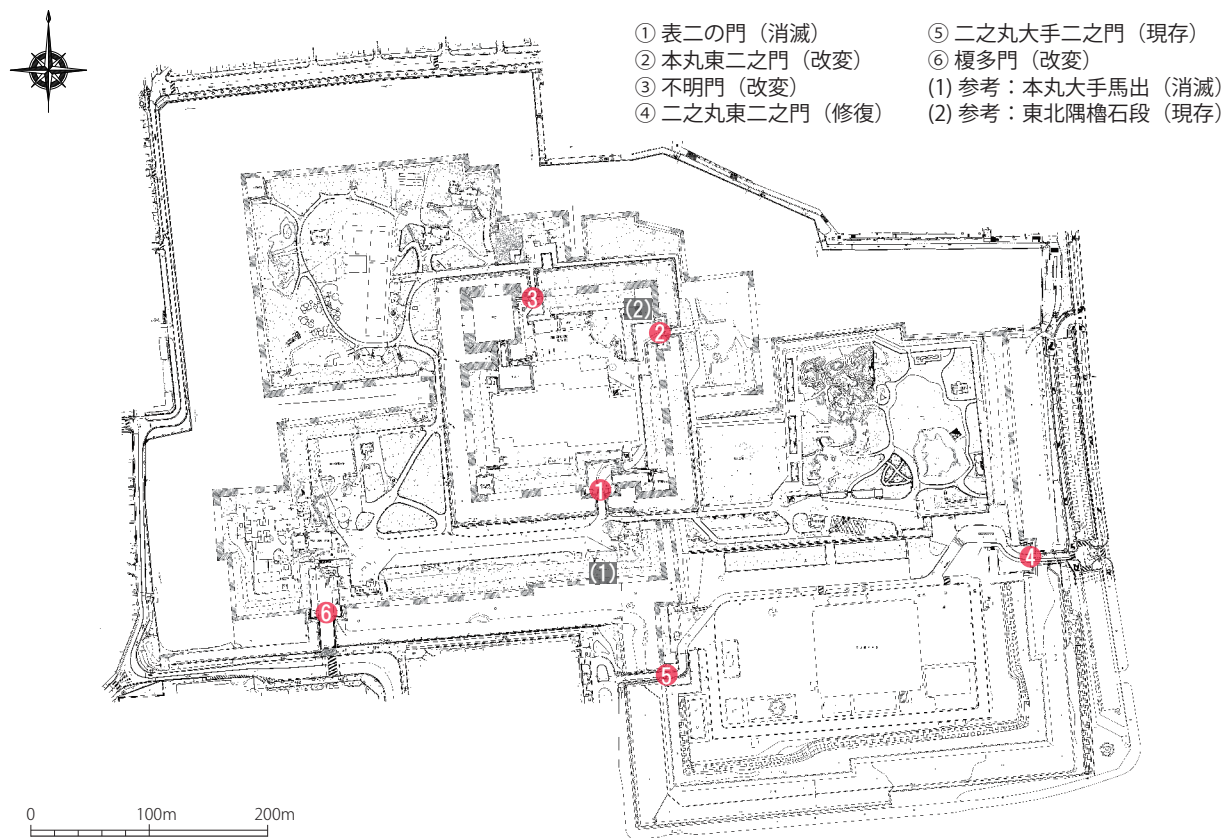


図3-2 城内雁木位置図

雁木撤去の理由としてひとつ考えられるのは、明治24年(1891)の濃尾震災である。この地震で名古屋城は大きな被害を受け、建物や石垣の多くが崩れた。とくに被害が大きかった多門櫓は、この後全部が撤去されてしまった。雁木撤去についても濃尾震災が関係しているかもしれない。ほかに、現存する東北隅櫓の雁木と二之丸東二之門の雁木の石材の仕上がり状況が全く違う（前者の方が粗削り）のはなぜか、という疑問もある。

馬出の雁木

名古屋城では連続した雁木は、6つの門以外にも大手馬出の東面と南面にもあった。東西43間、南北16間と6つの門の雁木に比べ規模が大きい。ただし雁木の上には土塀ではなく、多門櫓があった。この雁木は明治初期に撤去されたようである。名古屋城御石垣絵図（靖國神社遊就館蔵）には、搦手馬出にも大手馬出同様に雁木が描かれている。ただし、この雁木は他の江戸時代の名古屋城図にはなく、計画だけであったようだ。



図3-3 二之丸東二之門雁木（北側）



図3-4 二之丸東二之門雁木（南側）



図3-5 二之丸大手二之門雁木（北側）



図3-6 二之丸大手二之門雁木（南側）

他城の雁木事例

雁木は名古屋城特有のものではなく、枡形門を有する近世城郭を主として全国各地で見ることができる。一例を挙げると、山形城本丸一文字門、江戸城大手門など多数、小田原城銅門、金沢城河北門など三御門、福井城山里口御門、松本城太鼓門、駿府城東御門、彦根城大手門、二条城西橋、大坂城大手門など多数、姫路城菱の門、津山城五番門、丸亀城大手門がある。どれも大きさや形状、使用石材(切石・割石)が異なっており、江戸城や大坂城では城内に多数の雁木があるが、統一性はみられず、それぞれの立地環境に合わせて作られていると思われる。こうした全国各地の雁木事例の検討は整備に向けて今後の課題としたい。

このうち、金沢城橋爪門と津山城五番門は整備に伴って発掘調査されており、成果が報告されている。金沢城橋爪門では西側の石垣面に階段痕跡が確認でき、他の部分より平滑に仕上げられているという(石川県金沢城調査研究所 2015)。津山城五番門では、地表下に雁木の最下段のみ残存しており、石垣面には階段状の加工痕が残されていた(津山市教育委員会 2007)。同様の調査事例として非常に参考となる。

参考文献

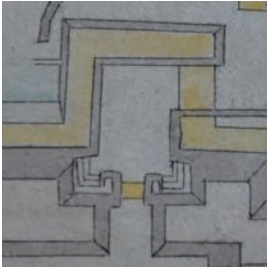

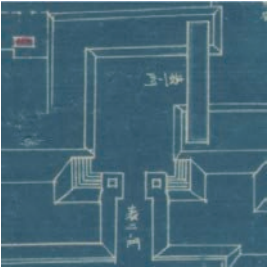
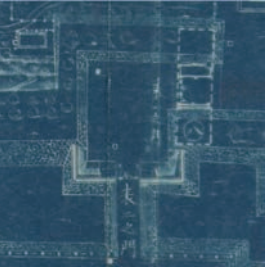
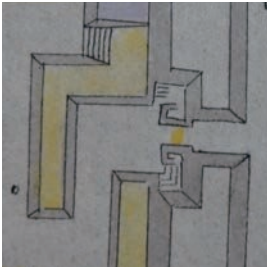
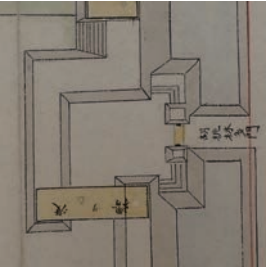
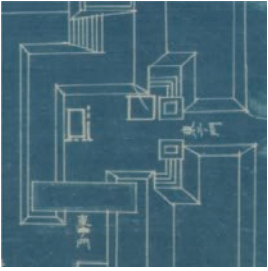
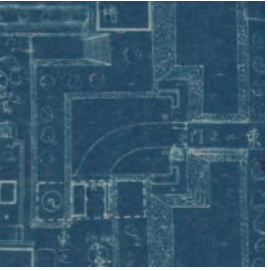
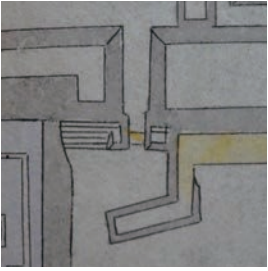
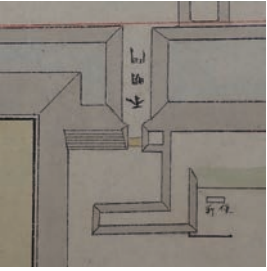


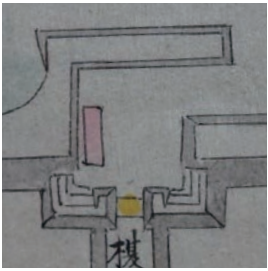
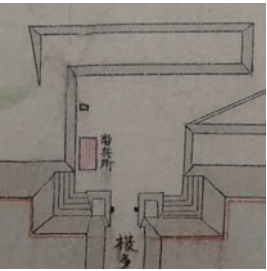
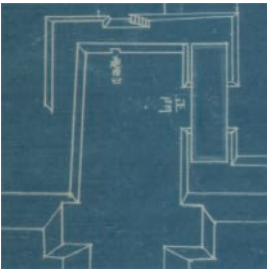
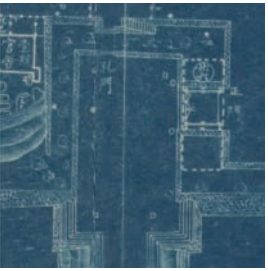
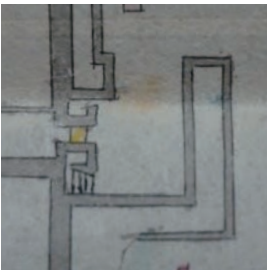
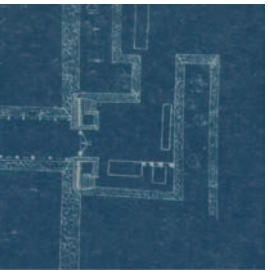
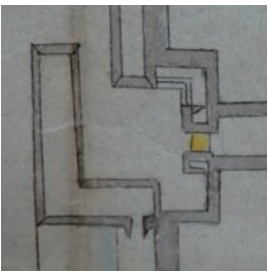
- 石川県金沢城調査研究所 2015『金沢城跡—橋爪門—』
- 津山市教育委員会 2007『史跡津山城跡 保存整備事業報告書Ⅰ』
- 三浦正幸 2022『図説 近世城郭の作事 櫓・城門の作事』原書房

表3-2 絵図にみる雁木の変遷(1)

	名古屋御城石垣絵図 (靖國神社遊就館蔵) 慶長 15 年 (1610)	元禄十年御城絵図 (名古屋市蓬左文庫蔵) 元禄 10 年 (1697)	御本丸御深井丸図 (名古屋市博物館蔵) 延享 3 年 (1746)-天明 2 年 (1782)	金城温古録 (名古屋市蓬左文庫蔵) 嘉永年間 (1848-1854)
表二の門				
本丸東二之門				
不明門				
榎多門				
二之丸大手二之門			描写なし	
二之丸東二之門			描写なし	

撮影：東京大学史料編纂所

表3-3 絵図にみる雁木の変遷(2)

	尾張国名古屋城郭図 (瀬戸市蔵) 明治13年(1880)	名古屋城榎多聞内配置図 (宮内庁宮内公文書館蔵) 明治33年(1900)	名古屋離宮平面図 (名古屋城総合事務所蔵) 大正4年(1915)	名古屋離宮総図 (名古屋城総合事務所蔵) 大正8年(1919)
表二の門				
本丸東二之門				
不明門				
榎多門				
二之丸大手二之門		描写なし	描写なし	
二之丸東二之門		描写なし	描写なし	描写なし

第4章 試掘調査の成果

第1節 第1次調査（令和元〔2019〕年度）

第1項 概要

令和元(2019)年度の第1次調査は、重要文化財名古屋城表二の門の耐震診断調査に伴い、門控柱と附属土塀控柱の基礎構造を確認する目的で実施した。調査期間は令和元年(2019)11月7日～11月14日で、2か所の調査区を設けた。調査面積は約2㎡である。

調査区1では、門控柱の石製根継ぎの下端を検出し、地表下にコンクリートの基礎があることを確認した。調査区2では、附属土塀控柱の銅製根巻きの下端を検出し、控柱最下端に鉄製ボルトが入れ込まれている状況を確認した。これらの状況から門控柱と附属土塀控柱は近代以降に改修されていると考えられる。

第2項 調査区の位置

本章で取り扱う第1次・第2次調査、平成23年度調査の調査位置を示したものが図4-1である。

第1次調査では、表二の門西側控柱の北東隅を検出するように調査区1（約1×1m）を設定し、調査に伴って園路アスファルトを撤去・復旧した。西側附属土塀の北から2つめの控柱の北東隅を検出するように調査区2（約1×1m）を設定し、土塁斜面部を発掘調査した（図4-2）。

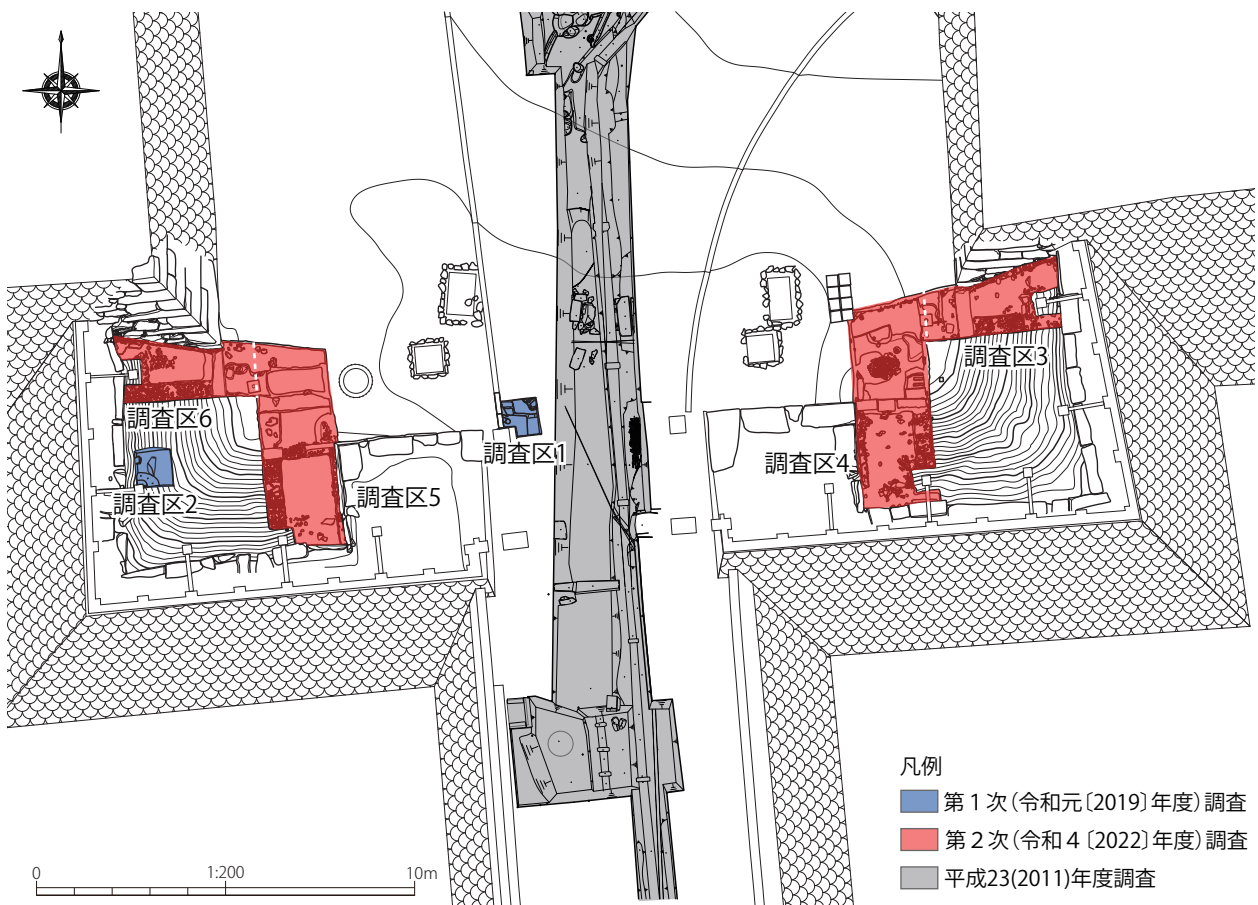


図4-1 表二の門周辺 既往調査区位置重ね図

第3項 各調査区の調査成果

(1) 調査区1

調査区1は、表二の門西側控柱の基礎構造を確認することを目的とした、約1㎡（約1×1m）の正方形の調査区である。地表高は13.73mから13.74mである。調査前の状況では、木製の控柱下端が花崗岩の切石で根継ぎされており、高さ約30cm分が露出していた。

園路となっているアスファルトと厚さ約3cmのアスファルト基層（1層）を除去すると、表二の門屋根から控柱をつたって下りている雨樋の屈曲部を確認した。地上部の雨樋は銅製だが、地表下はポリ塩化ビニル管（以下、「塩ビ管」という）が接続され、雨水桝へと繋がるようである。塩ビ管の約5cm下からは土管を検出し、掘方埋土（4層）もみられることから北方向へ続くと考えられる。土管は塩ビ管と重ならないように割られており、塩ビ管以前はこちらが排水路であった可能性がある。調査区の北東では直径約10～30cmの礫を含むかく乱（3層）があり、かく乱により掘り込まれた黒褐色砂質土（2層）を確認した。この層が現在の園路以前の旧表土と思われる。

控柱下端の根継石は地表から約48cm下でコンクリート基礎へ切り替わることを確認した。根継石は露出部と合わせて高さ約75cmあり、表面の整形具合が地表下では粗くなっていた。また、検出したコンクリート基礎は、控柱より約40cm方形状に張り出して壁中へと続いており、平面1辺が約1.2mの大きさと考えられる（図版2-3）。基礎の深さは約110cmで、地表から約155cm以下ではコンクリート片が詰まる状況に変化していた。地表から約50cm下の8層より下層では瓦片と漆喰片が含まれており、9・10層には大型の軒丸

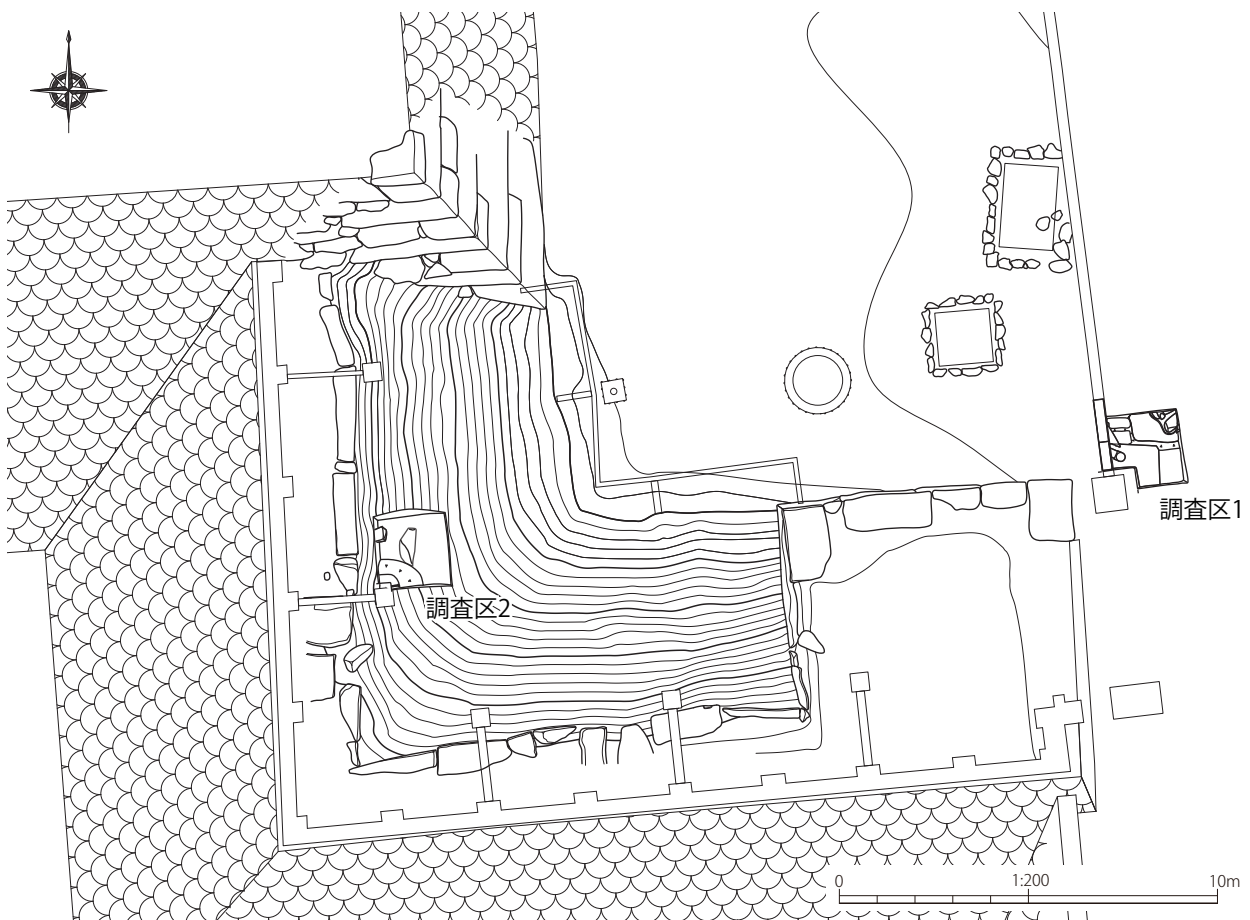
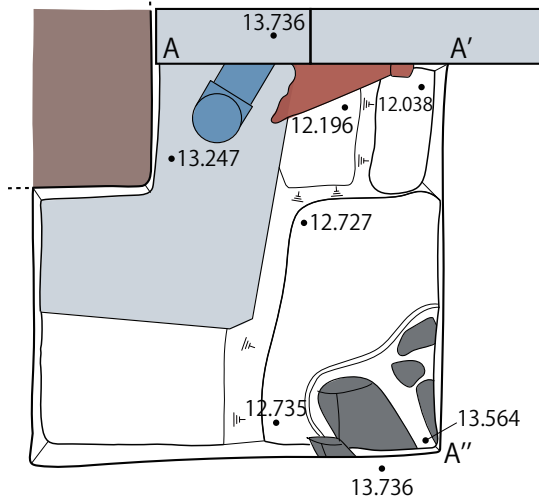


図4-2 第1次調査 調査区位置図

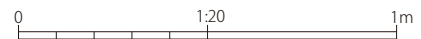
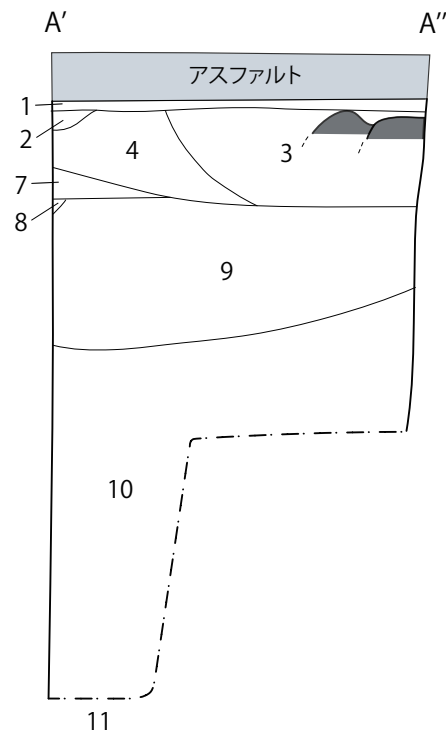
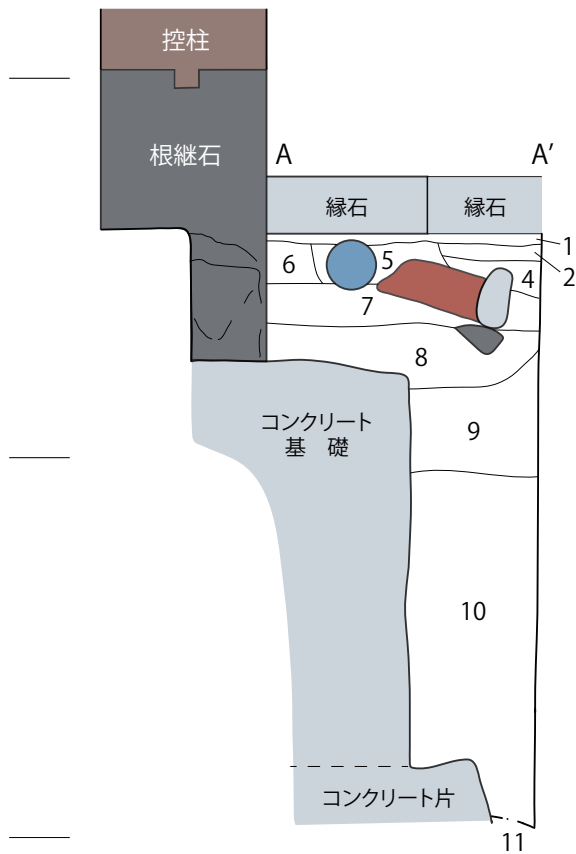


凡例

- コンクリート
- 石
- 木柱
- 土管
- 塩ビ管

西壁(A-A'断面)

北壁(B-B'断面)



- | | | | |
|----|----------|-----------|----------------------------------|
| 1 | 2.5YR | 暗褐色砂質土 | アスファルト基層。 |
| 2 | 10YR3/1 | 黒褐色砂質土 | 旧表土か。 |
| 3 | 7.5YR3/2 | 黒褐色シルト質土 | |
| 4 | 7.5YR3/2 | 黒褐色砂シルト質土 | しまりやや強 土管掘方埋土。 |
| 5 | 10YR4/2 | 灰黄褐色砂質土 | 粘性やや強 シルトやや目立つ。塩ビ管埋土。 |
| 6 | 7.5YR3/2 | 黒褐色砂シルト質土 | しまり強 4よりシルト目立つ。 |
| 7 | 10YR3/3 | 暗褐色砂シルト質土 | しまりやや弱 粗砂目立つ。 |
| 8 | 7.5YR4/3 | 褐色砂シルト質土 | しまりやや弱 5cm大の漆喰片まばら、瓦片10cm大以内目立つ。 |
| 9 | 10YR4/2 | 灰黄褐色砂質土 | しまり弱 5~10cmの漆喰片目立つ、瓦片20cm大以内多い。 |
| 10 | 7.5YR4/3 | 褐色砂質土 | しまりやや弱 漆喰片5cm以下まばら、瓦片20cm大以内多い。 |
| 11 | 5YR4/2 | 灰褐色砂質土 | しまりやや強 5mmの円礫多い。 |

図4-3 調査区1 平面・土層断面図

瓦片がみられた。コンクリート基礎の埋土と思われる。なお、調査区内では掘方の範囲は検出できていない。標高約12mで検出した11層には円礫が多く含まれていた。

(2) 調査区2

調査区2は、表二の門附属土塀控柱の基礎構造を確認することを目的とした、約1㎡（約1×1m）の正方形の調査区である。調査区は土塁斜面上に位置しており、西側から東側に向かって低く傾斜している。調査区の地表高は16.03mから15.25mである。調査前は、木製の控柱下端に銅製の根巻きが施されており、高さ約10cm分が露出していた。

厚さ約5cmの表土（1層）を除去すると、厚さ約8cmの黄褐色砂質土（2層）を確認した。第2次調査でも土塁斜面表層に同様の土層を確認しており、控柱改修時に敷かれた山砂と思われる。

地表から約15cmより下では、控柱の周囲約30～40cmの範囲で、標高約15.12mまで掘り下げたような痕跡（3層）を確認した。控柱改修時の掘方埋土と考えられる。地表から約95cm下、標高約15.16mの控柱下端では鉄製のボルトが止められた状態で出土した（図版2-4）。このことから、この控柱は近代以降に改修されていると考えられる。また、掘方埋土には直径約10～30cmの円礫が密に詰まっている一方で、4層には同様の円礫をまばらに含むとともに直径約40cm大の円礫が含まれていた。近代以降の控柱改修時の影響を受けていないと思われるため、近代の雁木取り外し時の埋土もしくは土塁盛土の可能性がある。掘方埋土はさらに下まで続くと考えられるが、鉄製ボルトの出土によって調査目的が達せられたため、ここで調査終了とした。

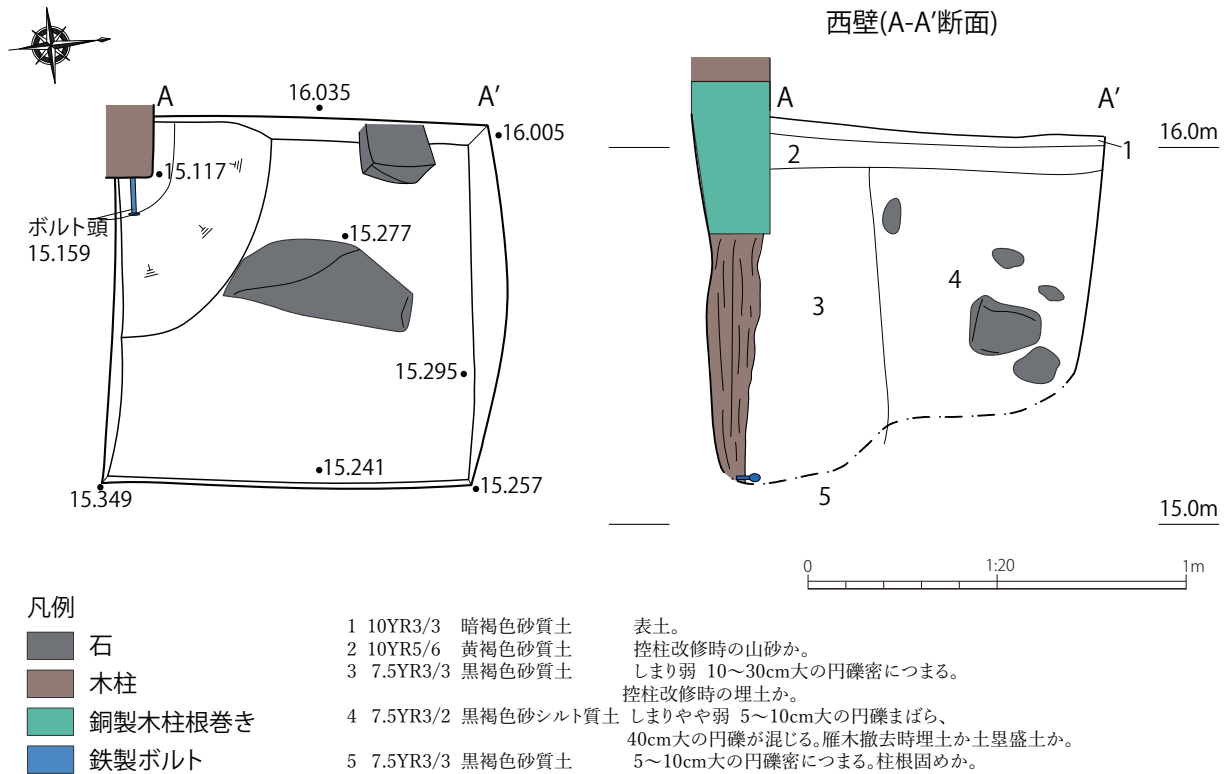


図4-4 調査区2 平面・土層断面図

第2節 第2次調査（令和4〔2022〕年度）

第1項 概要

令和4（2022）年度の第2次調査は、重要文化財名古屋城表二の門の大規模修理工事計画に伴い、雁木の復元整備を検討する目的で実施した。雁木の遺構を確認するため、附属土塀背面の土塁を調査対象とした。調査期間は令和4年（2022）8月22日～9月22日で、4箇所の調査区を設けた。調査面積は約36㎡である。

すべての調査区3～6において、土塁斜面裾部で高さが揃う切石が出土した。そのうち1箇所で切石が抜き取られており、その直下の円礫中に瓦片を確認した。出土した切石は雁木の最下段と考えられ、近世以降に積み直されている可能性がある。また、すべての調査区の石垣において、石垣の表面に階段状の加工痕がみられた。階段状についた加工痕から想定される雁木のラインと出土した切石は一致しなかった。加工痕は雁木に関連するものと考えられるが、部分的にしか認められず、表二の門の雁木が何段であったかは確認することができなかった。また、すべての調査区で土塁斜面部に円礫が密集する状況を確認したが、地表下約50cm掘り下げても円礫が密集する中に瓦が含まれていた。

第2項 土塁現況

表二の門附属土塀の土塁部分は、戦前の昭和7年（1932）頃に作成された「昭和実測図」以降の測量成果がなかった。そのため、発掘調査の開始前に現況を測量し、図面を作成した。図4-7は表二の門及び附属土塀の屋根部分を取り除いたものである。

土塁は東土塁と西土塁に分けられる。左右対称に近い形状となっているが、門両脇にある旗台石垣の平面形は東側の方が大きくなっており、土塁についても東土塁が約35㎡、西土塁が約33㎡と東側が若干広がっている。東西の土塁どちらも標高約13.9m～約16.6mに位置しており、L字状の屈曲部が最も高くなっている。土塁斜面は高さ約2.7mで幅約2.8～4.8mとなっており、斜面勾配は約29°～43°である。

現在、東西土塁の裾部には来場者の安全確保のため木柵が設置されている。昭和15年（1940）頃に撮影された「ガラス乾板写真」では、雁木は確認できず土塁となっており、木柵がない状態を確認することができる（図4-5、4-6）。昭和59・60年（1984・1985）に行われた表一の門石垣の積み直し工事の際、東側土塁の木柵の撤去・復旧をしたことから、現在の木柵は昭和15年（1940）～昭和59年（1984）の間に設置されたものと考えられる。この木柵の復旧工事により、東側土塁斜面の下部が大きく掘削されている可能性が高い。



図4-5 ガラス乾板写真1（表二の門背面）



図4-6 ガラス乾板写真2（表二の門背面）



図4-7 表二の門現況土塁測量図

第3項 調査区の位置

第2次調査では、雁木の遺構及び石垣面を確認するため、東西土塁でそれぞれの石垣際に調査区を設定した。土塁の裾部には木柵が設置されていたため、調査前に木柵を一時撤去し、調査後復旧した。

東土塁の調査区3（約2×4m）は表一の門石垣と接続し、土塁斜面上端で石垣際から幅約2m長さ約4mで、調査区南壁が調査区4の東壁と直交するように設定した。調査区4（約2×5m）は東旗台石垣と接続し、石垣際から幅2m、土塁斜面上端から長さ5mの規模で設定した。調査区3と4は平坦部で繋がっているが、便宜上分けて調査を行った。

西土塁の調査区5（約2×5m）は西旗台石垣と接続し、石垣際から幅2m、土塁斜面上端から長さ5mの規模で設定した。調査区6（約2×4m）は多門櫓石垣と接続し、土塁斜面上端で石垣際から幅約2m、長さ約4mで、調査区南壁が調査区5の西壁と直交するように設定した。調査区5・6も平坦部で繋がっているが、分けて調査を行った。

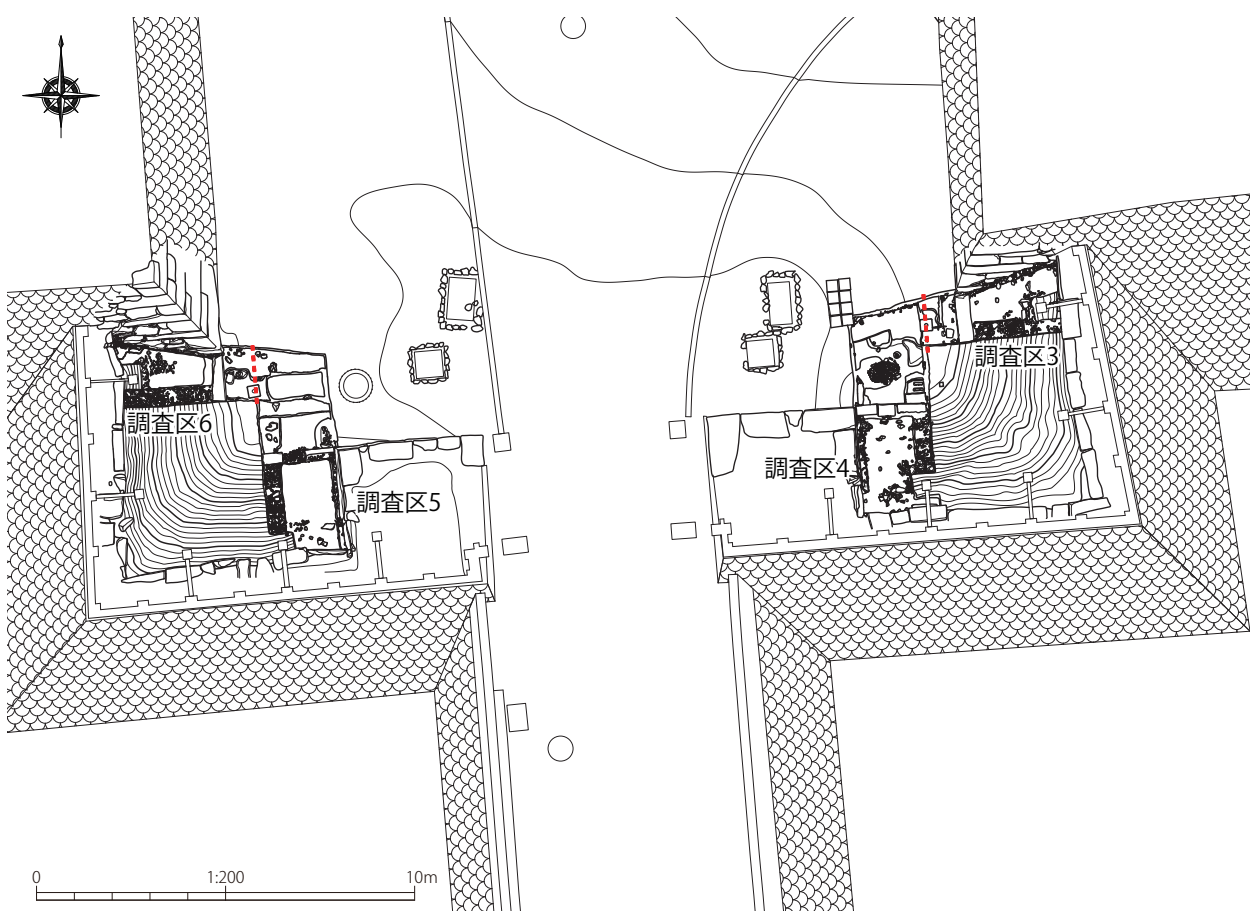


図4-8 第2次調査 調査区位置図

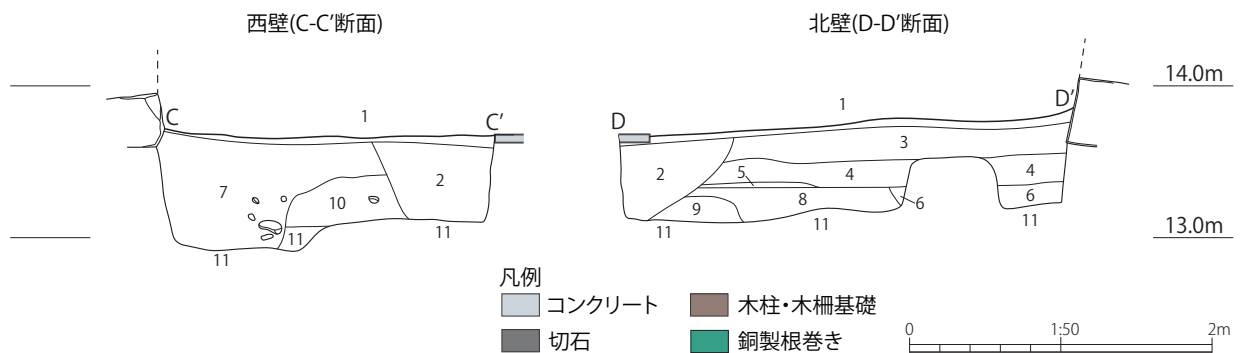
第4項 各調査区の調査成果

(1) 調査区3

調査区3は、雁木の遺構及び表一の門石垣との関係を確認することを目的とした、約8㎡(約2×4m)の調査区である（西端が調査区4と繋がる）。調査区は土塁斜面上にあり、東側から西側にかけて低く傾斜している。地表高は13.82mから16.10mである。調査区東端中央には附属土塀控柱が位置しており、経年劣化が進んでいるため、約25cm控えをとって掘削を行った。



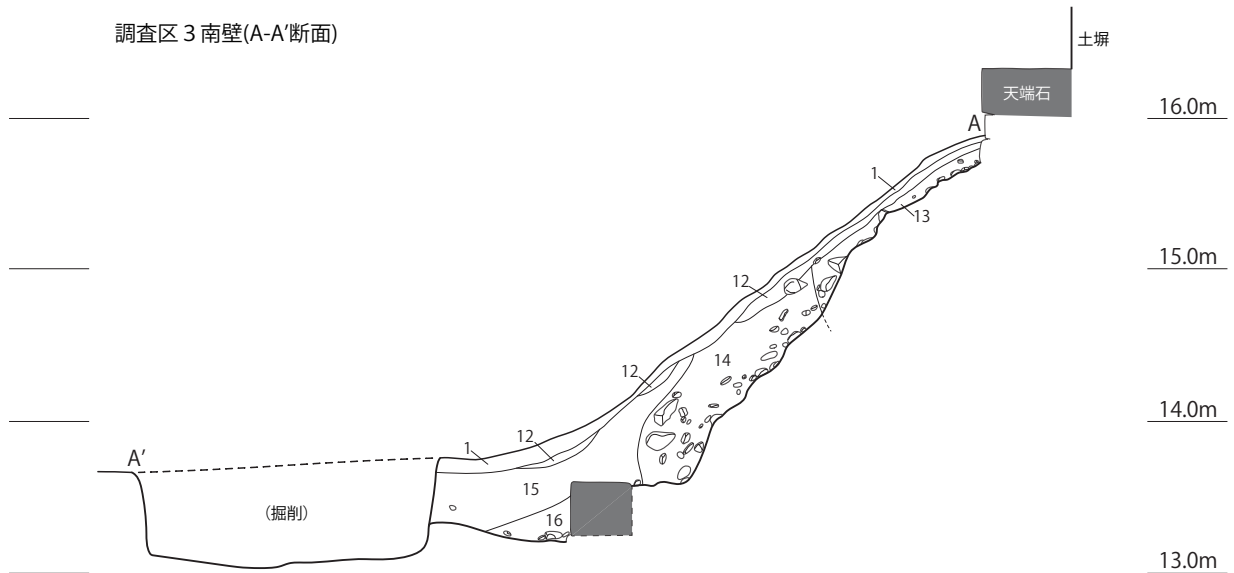
図4-9 調査区3・4 平面図



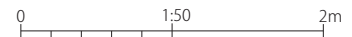
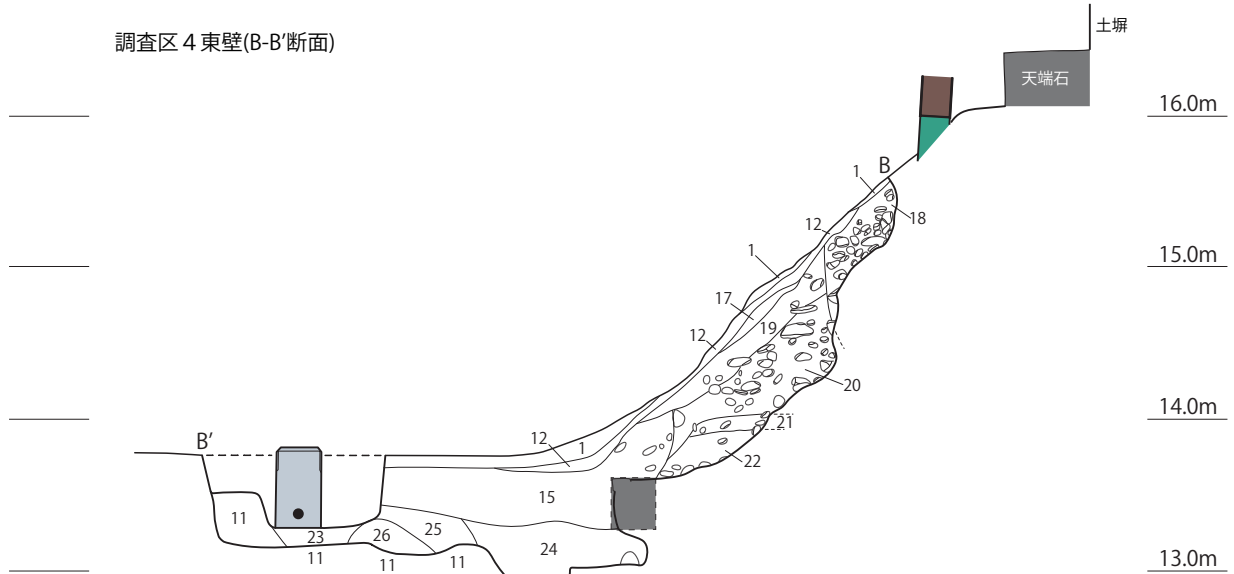
色調	粘性	しまり	粒度	含有物など
1:10YR3/4 暗褐色	やや弱	やや弱	細粒	径1cm未満の礫を30%含む。表土。
2:10YR2/4 黒褐色	弱	弱	細粒	径1~3cmの礫を5%含む。白色粘土ブロックを1%含む。かく乱。
3:10YR3/4 暗褐色	やや弱	やや弱	細粒	径1~3cmの礫を5%含む。瓦を含む。
4:10YR2/3 黒褐色	やや弱	やや弱	細粒	径1~3cmの礫を3%含む。
5:10YR4/3 にぶい黄褐色	弱	弱	細粒	径1cm未満の花崗岩細粒を20%含む。
6:10YR4/4 褐色	やや弱	やや弱	細粒	径3~5cmの礫を5%含む。かく乱。
7:10YR4/2 灰黄褐色	弱	弱	細粒	径3~10cmの礫を30%含む。瓦を含む。かく乱。
8:10YR2/3 黒褐色	やや弱	やや弱	細粒	径3~5cmの礫を5%含む。白色粘土ブロックを1%含む。
9:10YR2/2 黒褐色	やや弱	やや弱	細粒	白色粘土ブロックを1%含む。
10:10YR5/3 にぶい黄褐色	やや弱	やや弱	細粒	径3~5cmの礫を5%含む。白色粘土ブロックを3%含む。
11:10YR4/6 褐色	やや強	やや強	細粒	白色粘土ブロックを40%含む。近世層か。

図4-10 調査区3・4 土層断面図(1)

調査区3 南壁(A-A'断面)



調査区4 東壁(B-B'断面)



色調	粘性	しまり	粒度	含有物など
12: 10YR6/8 明黄褐色	弱	弱	極細粒	10YR7/1 黒色土が薄く上面にのる。控柱改修時の山砂か。
13: 10YR3/3 暗褐色	やや弱	やや弱	細粒	径 5~30cm の礫を 30% 含む。瓦を含む。控柱根固めか。
14: 10YR3/3 暗褐色	やや弱	やや弱	細粒	径 3~10cm の礫を 5% 含む。瓦を含む。
15: 10YR3/2 黒褐色	やや弱	やや弱	細粒	径 1~10cm の礫を 10% 含む。瓦・漆喰片を含む。かく乱。
16: 10YR3/4 暗褐色	やや弱	やや弱	細粒	径 5~10cm の礫を 5% 含む。
17: 10YR2/3 黒褐色	弱	弱	細粒	径 1cm 程度の礫を 20% 含む。
18: 10YR2/3 黒褐色	やや弱	やや弱	細粒	径 5~30cm の礫を 30% 含む。瓦・割石を含む控柱根固めか。
19: 10YR3/4 暗褐色	やや弱	やや弱	細粒	径 3~10cm の礫を 10% 含む。5YR4/8 赤褐色土を 1% 含む。瓦・花崗岩の細粒を含む。
20: 10YR4/4 褐色	やや弱	やや弱	細粒	径 3~10cm の礫を 20% 含む。白色粘土ブロックを 1% 含む。瓦を含む。
21: 10YR2/2 黒褐色	弱	弱	細粒	炭化物を 30% 含む。
22: 7.5YR4/2 黒褐色	やや弱	やや弱	細粒	径 3~5cm の礫を 10% 含む。瓦を含む。
23: 10YR3/4 暗褐色	弱	弱	細粒	径 1cm 未満の礫を 30% 含む。かく乱。
24: 10YR4/2 灰黄褐色	やや弱	やや強	細粒	径 1~5cm の礫を 30% 含む。瓦・漆喰片を含む。かく乱。
25: 10YR3/4 にぶい黄褐色	やや強	やや強	細粒	径 3~5cm の礫を 5% 含む。白色粘土ブロックを 5% 含む。
26: 7.5YR4/6 褐色	やや弱	やや弱	細粒	径 1cm の礫を 5% 含む。三和土片を含む。

図4-11 調査区3・4 土層断面図(2)

調査区斜面部では、全面で厚さ約3～10cmの表土（1層）を除去すると、薄く堆積した山砂（12層）が部分的に確認された。その直下には円礫を含んだ暗褐色土があり、斜面上部では径30cm程度の円礫が集中する（13層）ことから、これは第1次調査でも確認していた控柱の根固めと思われる（図版4-2）。土塁の崩壊を防ぐため、面的な掘り下げはせず、調査区南側で幅約50cmのサブトレンチを設定し、地表から約50～90cmほど掘り下げた。円礫が土塁斜面に密集する状況を確認したが、14層には瓦が含まれており、瓦を含まない円礫層や近世盛土層を検出することはできなかった。また、調査区北側では石垣面に階段状の加工痕を確認したことから、石垣際から幅約15cmでサブトレンチを設定した。地表から約15cm掘り下げ、地中へと続く石垣と土塁中に径5～30cmほどの円礫が密集する状況を確認した（図版4-3）。

調査区斜面裾部では、長さ120cm以上（土中へ続く）、奥行約39cm、高さ約30cmの花崗岩の切石（切石No.1）を確認した（図版4-4）。瓦・漆喰片を含むかく乱（15層）は切石を覆うように堆積しており、切石は一時露出していた可能性が高い。切石は水平に据わっており、表面に目立った破損痕は見られないため、切石自体はほとんどかく乱の影響を受けていないと考えられる。

調査区平坦部では、15層のかく乱埋土を検出した。かく乱埋土を取り除いたところ、表一の門石垣の下端部を確認した。露出する築石から少なくとも1石が地中に続く状況がみられた。また、現在設置されている人感センサーのコンクリート基礎を検出したが、転倒する恐れがあったため、西面を除いて周囲は完掘しないうまま調査を終了した。

（2）調査区4

調査区4は、雁木の遺構及び東旗台石垣との関係を確認することを目的とした、約10㎡（約2×5m）の長方形の調査区である（北東隅が調査区4と繋がる）。調査区は土塁斜面上にあり、南側から北側にかけて低く傾斜している。地表高は13.76mから16.30mである。調査区南東端には附属土塀控柱が位置しており、調査区3と同様に約25cmの控えをとって掘削を行った。

調査区斜面部では、全面で厚さ約3～10cmの表土（1層）と山砂（12層）を除去し、調査区東側で幅約50cmのサブトレンチを設定した。斜面上部は他の調査区と同じく径約30cmの円礫や割石が集中しており、控柱の根固めと考えられる。斜面中央部では地表から約10cm下に赤褐色土と花崗岩の細粒を含む土層（19層）があり、直下の円礫が密集する20層には瓦が含まれていた。21層は炭化物を多く含んだ土が水平堆積している。地表より約40cm下まで掘り下げた22層でも円礫と瓦を含み、調査区4でも瓦を含まない円礫層や面的に広がる円礫面を検出することはできなかった。また、調査区西側では石垣際から幅約15cmでサブトレンチを設定した。地表から約15cm掘り下げ、地中へと続く石垣面と土塁中に径5～30cmほどの円礫が密集する状況を確認した。

調査区斜面裾部では、花崗岩の切石3石（東から、切石No.2～4）を確認した（図版5-4）。切石の寸法（長さ・奥行・高さ）は、No.2が約78・22・30cm、No.3が約45・30・30cm、No.4が約55・28・30cmであった。また、No.2の上面には矢穴痕を確認した。詳細は第5項にて取り扱う。調査区4の切石も15層のかく乱埋土が覆うことから工事で露出したことが考えられるが、こちらも調査区3と同様に切石自体はほとんど影響を受けていない可能性が高い。

調査区平坦部では、15層のかく乱を除去して東旗台石垣の下端部を確認した。露出する築石から少なくとも1石が地中に続くことを確認した。平坦部南東部では2本の丸太を検出し、現在の木柵と重なる位置

にあることから木柵基部と思われる。また、平坦部中央では長さ約80cm幅約50cmの瓦だまりを検出し、深さは約40cmであった（図版5-2）。瓦だまり北東では直径約30cmのピットを検出した（図版5-3）。深さは約20cmで、底部には径約10cmの上面が平たい円礫1石が据えられていたことから柱穴の可能性がある。埋土中に木質は残っておらず、同様のピットは調査区内で確認できなかった。絵図等には周辺に建物が描かれていないため、その性格は不明である。木柵設置時のかく乱（6・7層）を掘り込むように整地層（3・4層）がみられ、部分的に花崗岩細粒を含む整地層（5層）もみられた。その下層には白色粘土ブロックを若干含んだ8・9層があり、これらを除去したところ、近世盛土層と思われる白色粘土ブロックを40%程度含んだ11層を平坦部全体で面的に確認することができた。

(3) 調査区5

調査区5は、雁木の遺構及び西旗台石垣との関係性を確認することを目的とした、約10㎡（約2×5m）の長方形の調査区である（北西隅が調査区6と繋がる）。調査区は土塁斜面上にあり、南側から北側にかけて低く傾斜している。地表高は13.73mから16.35mである。調査区南西端には附属土塀控柱が位置しており、他の調査区と同様に約25cmの控えをとって発掘調査を行った。

調査区斜面部では、全面で厚さ約3～10cmの表土（1層）と山砂（12・13層）を除去し、調査区西側で幅約50cmのサブトレンチを設定した。斜面上部は径約30cmの円礫が集中しており（14層）、控柱の根固めと考えられる。表土直下の斜面中央部を覆うように15層があり、径約1～3cmの礫を含む。地表より約30

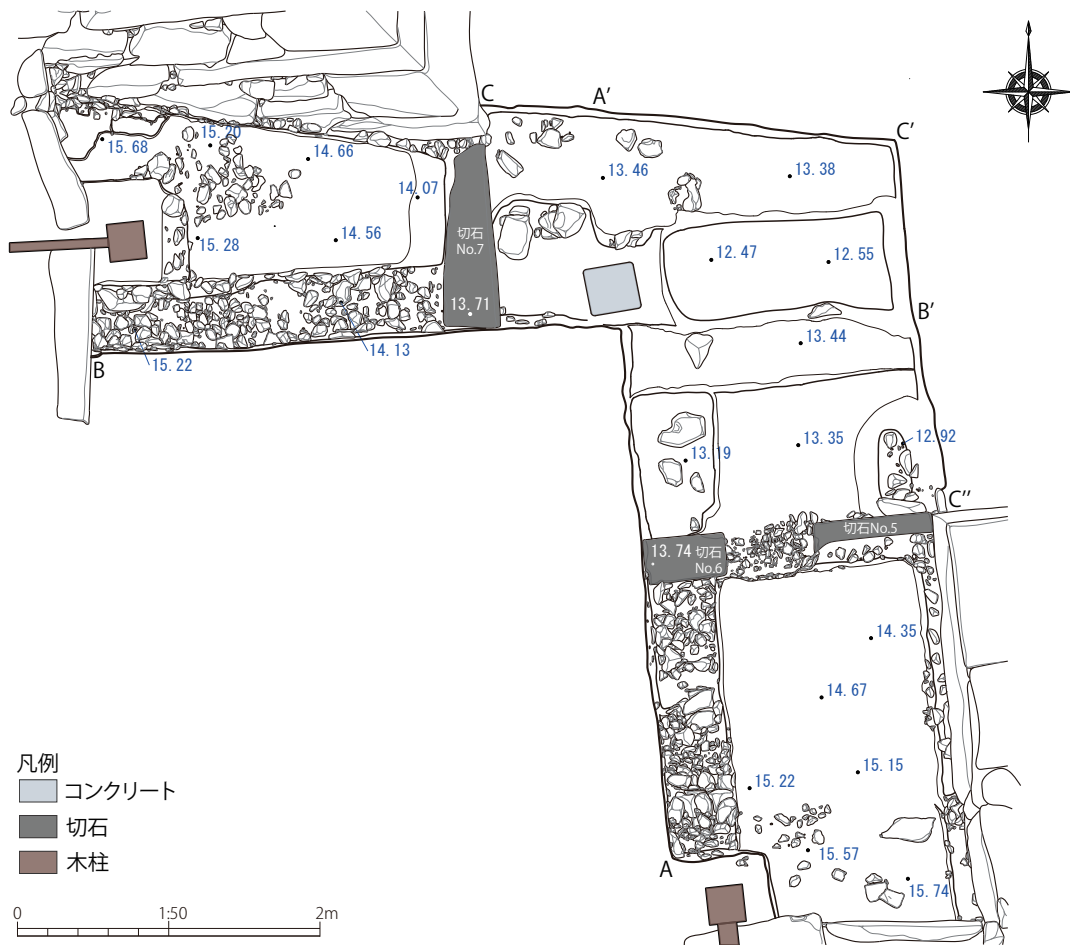


図4-12 調査区5・6 平面図

cm下の16層は白色粘土ブロックを1%含み、ステップ状に堆積している。16層は近代に雁木を取り外した際の作業面である可能性がある。また、調査区4の21層と同様に17層では炭化物を多く含んだ土が水平堆積していた。地表から約80cm掘り下げた16層では円礫の密集する層の中に瓦が含まれていた。また、調査区東側の石垣面に階段状の加工痕を確認し、石垣際から幅約15cmでサブトレンチを設定した。サブトレンチは地表から約15cm掘り下げ、地中へと続く石垣と土塁中に径5~10cmほどの円礫が密集する状況を確認した。

調査区斜面裾部では、花崗岩の切石2石と切石が抜き取られた1箇所（東から、切石No.5~7）を確認した（図版6-3）。切石の寸法（長さ・奥行・高さ）は、No.5が約78・15・36cm、No.6（痕跡）が約(60)・(30)・(30)cm、No.7が約53cm以上（西側の未掘部分へ続く）・28・33cmであった。特に注目できるのがNo.6で、1石だけ抜き取られた後、それを埋めるように山砂が入っており、おおよその形状を推定することができた。切石の背面には径約5~10cmの円礫が密に詰まること、切石の底面には径約3~5cmの円礫が敷かれており、そのなかに瓦片が混じることを確認した（図版6-5）。背面と底面では明らかに円礫の状態が異なっており、底面に敷かれた円礫は根固めの役割を果たしていると考えられる。また、切石は直下の層に瓦片が混じることから築城期に積まれたものではない可能性がある。19層のかく乱は切石を覆うように堆積している。一度露出され、埋め戻されたのであろうか。

調査区平坦部では、20層のかく乱埋土を掘削して、西旗台石垣の下端部を確認した。露出している築石から少なくとも1石が地中へ埋没する状況がみられた（図版6-3）。2層のかく乱は地表から約60cm掘り込んでおり、平坦部全体の遺構残存状況が悪いことから、かく乱が広がる範囲でサブトレンチを設定した。サブトレンチは標高約12.5mまで掘削し、灰黄褐色で近世の軒丸瓦を含む8層、にぶい黄褐色でほとんど含有物がない（一部で瓦を含む）9層、均質な砂質土をもつ10層、その下層に白色粘土ブロックを30%程度含んだ11層を確認した（図版6-2）。9層~11層は近世盛土層と考えられる。

(4) 調査区6

調査区6は、雁木の遺構及び多門櫓石垣との関係を確認することを目的とした、約8㎡（約2×4m）

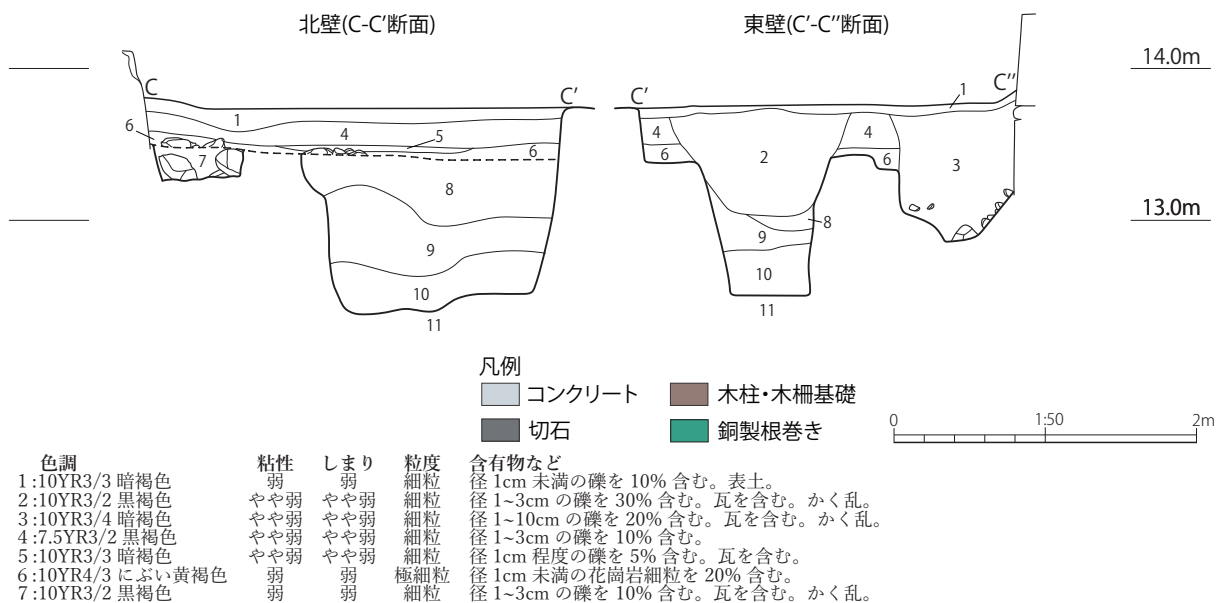
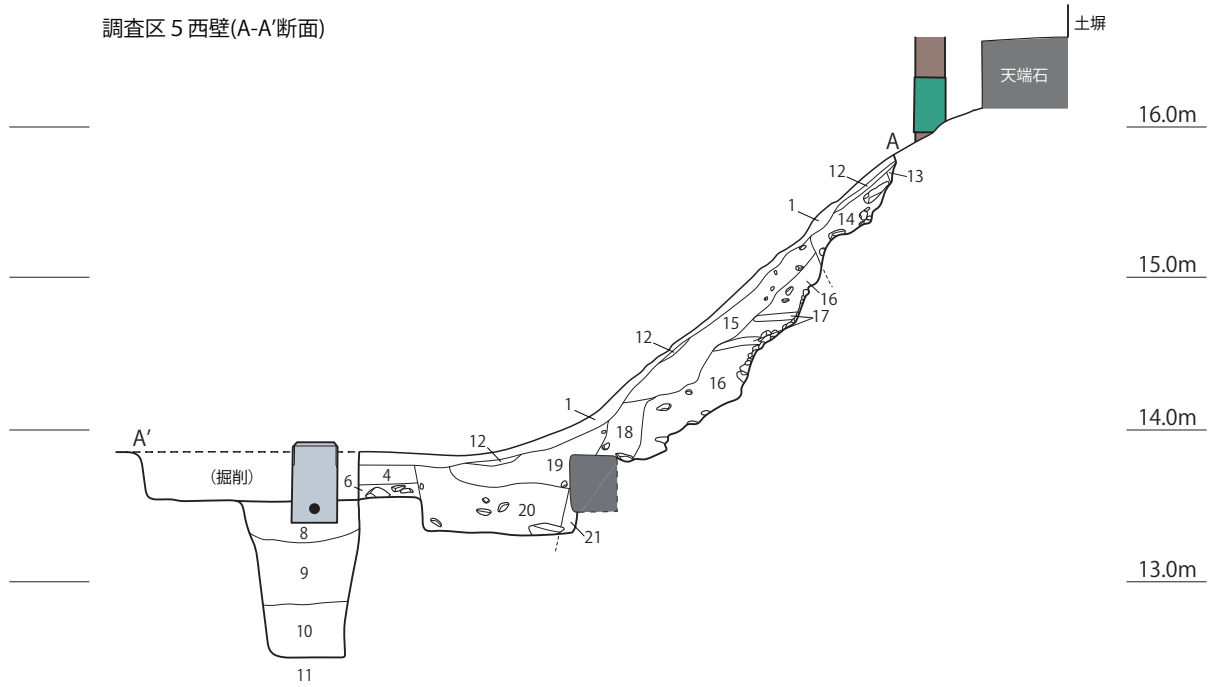
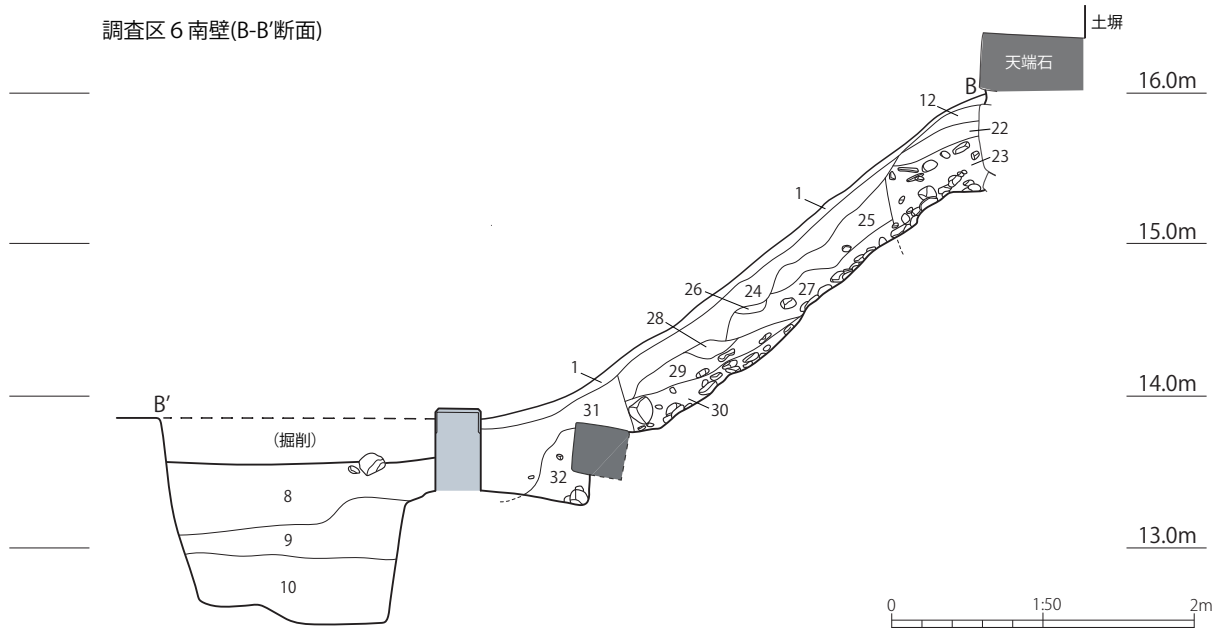


図4-13 調査区5・6 土層断面図(1)

調査区5 西壁(A-A'断面)



調査区6 南壁(B-B'断面)



色調	粘性	しまり	粒度	含有物など
8:10YR4/2 灰黄褐色	弱	弱	細粒	径1~10cmの礫を10%含む。瓦を含む。
9:10YR4/3 にぶい黄褐色	やや弱	やや弱	細粒	一部で瓦を含む。近世層か。
10:10YR5/3 にぶい黄褐色	やや弱	やや弱	細粒	均質な砂質土層。近世層か。
11:10YR5/2 灰黄褐色	やや強	やや弱	極細粒	白色粘土ブロックを30%含む。近世層か。
12:10YR6/8 明黄褐色	弱	弱	極細粒	控柱改修時の山砂か。
13:2.5YR6/4 にぶい黄色	弱	弱	中粒	控柱改修時の山砂か。
14:10YR4/3 にぶい黄褐色	弱	やや弱	細粒	径5~30cmの礫を50%含む。瓦を含む。控柱の根固めか。
15:10YR4/2 灰黄褐色	やや弱	やや弱	細粒	径1~3cmの礫を1%含む。
16:10YR4/4 褐色	やや弱	やや弱	細粒	径5~10cmの礫を10%含む。瓦を含む。白色粘土ブロックを1%含む。
17:10YR2/2 黒褐色	やや弱	やや弱	細粒	炭化物を30%含む。
18:10YR3/3 暗褐色	やや弱	やや弱	細粒	径1~3cmの礫を1%含む。黄色粘土・白色粘土ブロックを3%含む。
19:10YR4/2 灰黄褐色	弱	弱	細粒	径1~10cmの礫を20%含む。瓦・漆喰片を含む。かく乱。
20:10YR3/2 黒褐色	弱	弱	細粒	径1~3cmの礫を10%含む。瓦を含む。かく乱。
21:10YR4/3 にぶい黄褐色	やや弱	やや弱	細粒	径2~5cmの礫を3%含む。白色粘土ブロックを5%含む。近世層か。
22:10YR5/4 にぶい黄褐色	やや弱	やや弱	極細粒	径3~0cmの礫を30%含む。白色粘土ブロックを1%含む。瓦を含む。
23:10YR4/4 褐色	やや弱	やや弱	細粒	径5~30cmの礫を40%含む。控柱の根固めか。
24:10YR4/2 灰黄褐色	やや弱	やや弱	細粒	径1~3cmの礫を3%含む。瓦・山砂を含む。
25:10YR3/3 暗褐色	やや弱	やや弱	細粒	径3~5cmの礫を30%含む。瓦を含む。
26:10YR2/2 黒褐色	やや弱	やや弱	細粒	径1~3cmの礫を3%含む。
27:10YR2/3 黒褐色	やや弱	やや弱	細粒	径5~10cmの礫を10%含む。瓦・花崗岩細粒を含む。
28:10YR8/3 浅黄橙色	強	やや弱	細粒	黄色粘土ブロックを50%含む。瓦を含む。
29:10YR3/3 暗褐色	やや弱	やや弱	細粒	径5~10cmの礫を5%含む。瓦を含む。
30:10YR3/2 黒褐色	やや弱	やや弱	細粒	径5~10cmの礫を30%含む。瓦・花崗岩細粒を含む。
31:10YR3/2 黒褐色	やや弱	やや弱	細粒	径1cm程度の礫を20%含む。瓦・漆喰片を含む。かく乱。
32:10YR5/6 黄褐色	強	やや強	細粒	白色粘土ブロックを5%含む。近世層か。

図4-14 調査区5・6 土層断面図(2)

の長方形の調査区である（東端が調査区5と繋がる）。調査区は土塁斜面上にあり、西側から東側にかけて低く傾斜している。地表高は13.73mから16.35mである。調査区北東端には附属土塀控柱が位置しており、他の調査区と同様に約25cmの控えをとって掘削を行った。

調査区斜面部では、全面で厚さ約3～10cmの表土（1層）と山砂（12層）を除去し、調査区南側で幅約50cmのサブトレンチを設定した。斜面上部は白色粘土ブロックを含んだ22層の下層で径約30cmの円礫が集中しており（23層）、円礫は控柱の根固めと考えられる。また、サブトレンチ西端では附属土塀基礎石の地中状況を確認でき、土塁内部まで築石が少なくとも2石続いていた（図版7-2）。斜面中央部は調査区5と同じく表土直下で斜面全体を覆うように径約1～3cmの小さい礫や山砂を含む24層がある。その下層の25～30層はステップ状に堆積しており、近代に雁木を取り外した際の作業面である可能性がある。地表から約50cm掘り下げた27・30層では円礫の密集する中に瓦や花崗岩の細粒が含まれていた。また、調査区北側の石垣面に階段状の加工痕を確認し、石垣際から幅約15cmでサブトレンチを設定した。地表から約15cm掘り下げ、地中へと続く石垣と土塁中に径5～10cmほどの円礫が詰まる状況を確認した。地表下で確認した築石は、斜面中央部では露出部から南へ約5～10cmほどずれていた（図版7-3）。

調査区斜面裾部では、花崗岩の切石1石（切石No.8）を確認した（図版7-4）。切石は長さが約118cm（南側の未掘部分へ続く）、奥行が約32cm、高さが約34cmであった。31層はかく乱と思われるが、切石を覆うようにかく乱埋土が堆積している。その直下にはかく乱に掘り込まれるように32層があり、白色粘土ブロックを5%含んでいる。しまりもやや強く、近世盛土層の可能性はある。

調査区平坦部では、地表面より約30cm下で花崗岩の細粒を20%ほど含んだ6層が面的にみられ、平成23（2011）年度の調査成果から近代整地層と考えられる（第3節を参照のこと）。また、調査区5のサブトレンチで近世盛土層（9～11層）を確認したことから、調査区北半は6層を除去して掘削を終了した。南半はかく乱（7層）を掘削して、切石No.8の下端部と底面を確認した。詳細は次項にて取り扱う。

第5項 切石について

第2次調査では、調査区の斜面裾部で計7石の切石が出土した（図4-15・4-16）。

切石の寸法をまとめると、高さが約30～36cmと揃っており、奥行はNo.5のみ約15cmと短いを除くと約22～39cmである。横幅は約44～121cmとばらつきが大きい。城内の雁木は、高さが約30cmで揃い、奥行は若干ばらつきがあって平均約33cm、横幅は不揃いである。比較すると切石は雁木石材と類似した形状といえる。この詳細な比較検討は第5章第2節で取り扱う。

切石の整形状態は、No.2は側面が粗いスタレ、底面がほぼ自然面となっているが、その他の切石は上面・側面・底面どれも丁寧に仕上げられていた。また、切石側面下部は黒く変色しており、その上下で整形の違い（下部はノミ叩き、上部は平滑なナラシ）がみられた。変色の境界線はNo.5・7・8が標高約13.6m、No.1～4は2本あって上線が約13.54mとNo.1と揃い、下線が約13.45mであった。変色部分まで土が埋まっていた時期があったと考えられる。

No.2上面南端には矢穴列を確認した。4つの矢穴口（上面）が見えており、現位置から垂直方向に割られている。矢穴は矢穴口長辺が約9cmで、短辺が約2cm（全長は4cmか）、深さは確認できなかった。

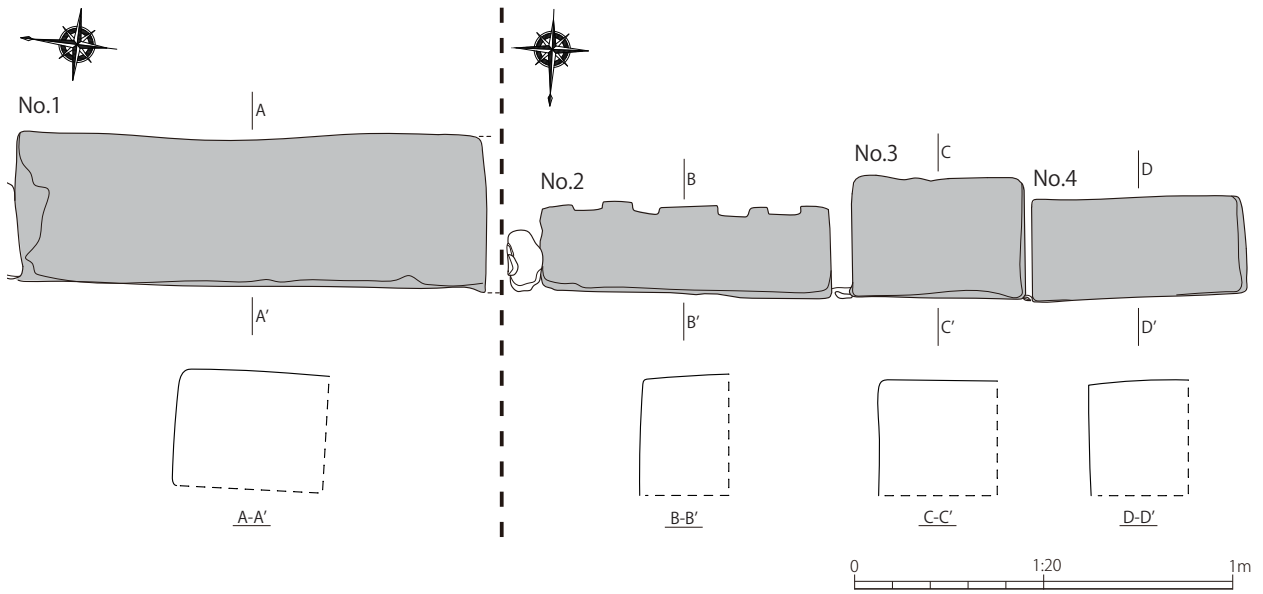


图4-15 切石No. 1 ~ 4 平面·断面图

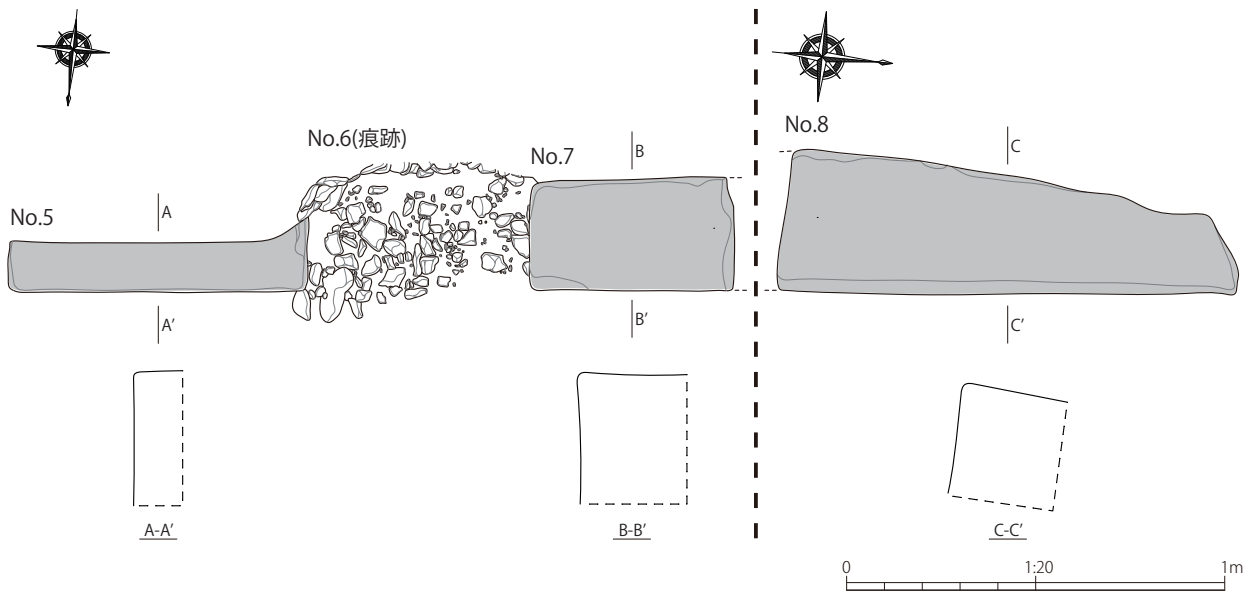


图4-16 切石No. 5 ~ 8 平面·断面图



图4-17 切石No. 2 底面状况



图4-18 切石No. 5 底面状况

第6項 石垣面の雁木痕跡

第2次調査では調査区に面した各石垣で階段状に加工した痕跡を確認した。その石垣面を3次元計測し、メッシュモデルと可視化処理を施した画像が図4-19・4-20である。

各石垣面で1～4段の階段状の加工痕を確認したが、1段の大きさは約20～40cmと不揃いであった。今回確認した加工痕をもとに雁木の設置ラインを想定すると、出土した切石とは一致しなかった。これらは切石が後の時期に積み直されている可能性を示すことも考えられるが、階段状の加工痕は雁木を設置する際、石垣と雁木を噛み合わせるために加工を施した痕跡と考えられる。確認した加工痕は斜面の一部に限られており、ここから雁木の段数を確定させることはできなかった。

階段状の加工痕が明瞭に残る榎多門でも同様に調査し、表二の門と類似するものであることを確認した。

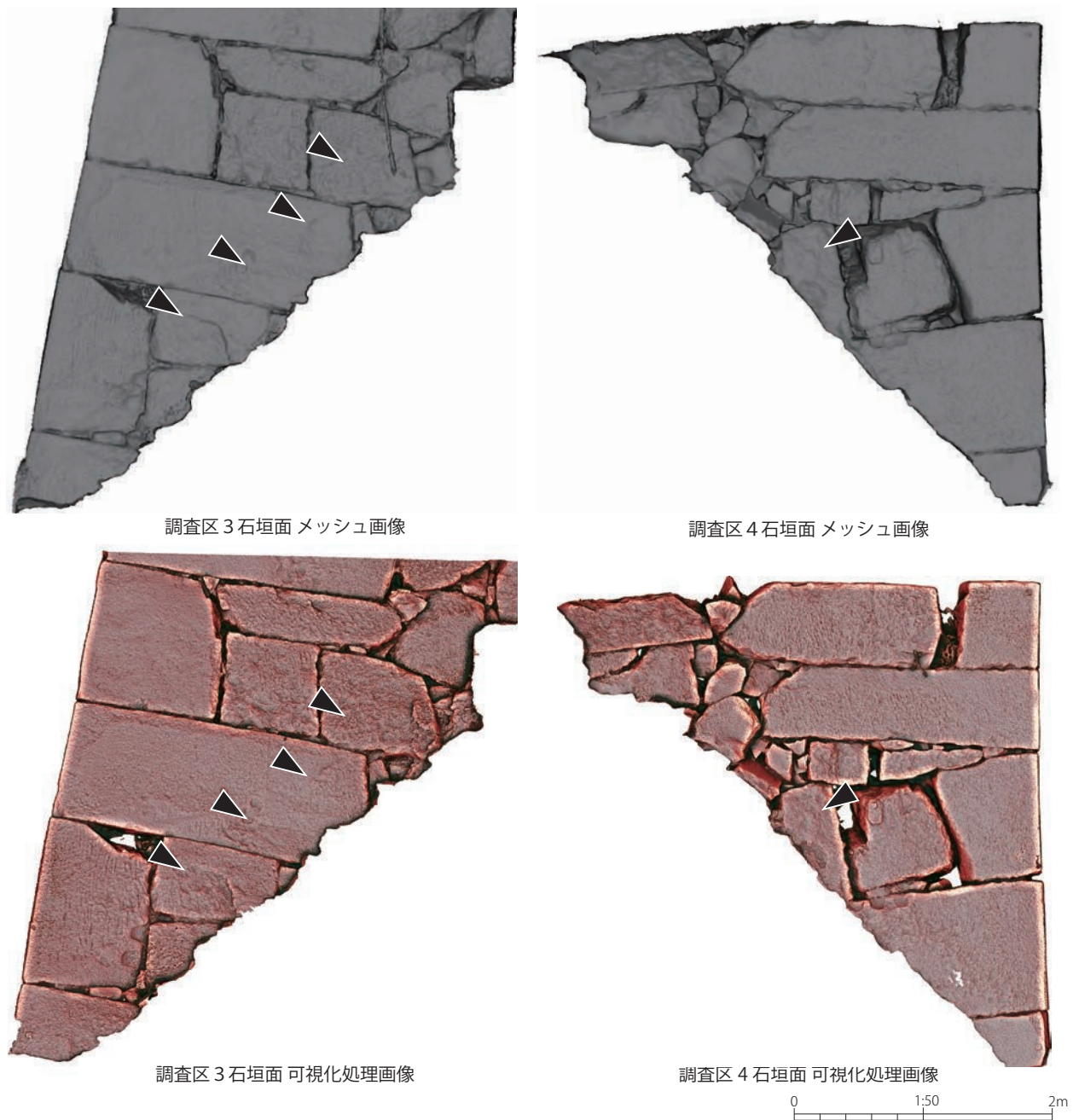


図4-19 調査区3・4石垣面加工痕



調査区5石垣面メッシュ画像



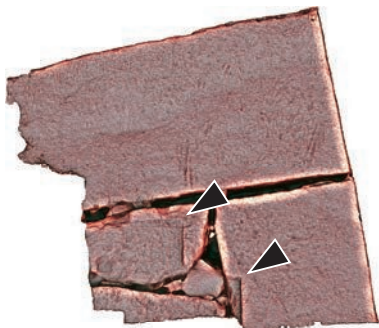
調査区6石垣面メッシュ画像



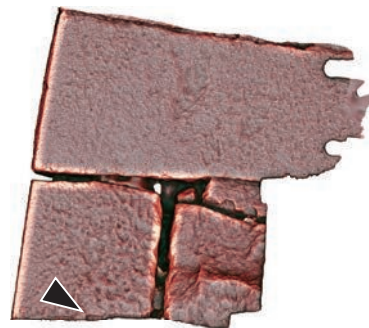
調査区5石垣面可視化処理画像



調査区6石垣面可視化処理画像



榎多門西石垣面可視化処理画像



榎多門東石垣面可視化処理画像

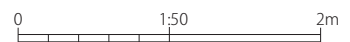


図4-20 調査区5・6・榎多門石垣面加工痕

第3節 [参考] 平成23(2011)年度調査

第1次・第2調査で表二の門及び附属土塀を調査範囲としたが、平成23(2011)年度にその周辺で発掘調査を実施している。この調査は本丸御殿復元工事の一環として、実施したものである。その報告は本丸御殿第8次調査として刊行済みであるが(名古屋城総合事務所 2012)、一帯を評価するにあたり参考となるため、改めて概要をここに取り上げる。

平成23(2011)年度調査の1区6トレンチは表二の門をくぐり南北の調査区であった(図4-19、4-20)。門周辺では地表から約50cm下で地山面を検出した。地山南端部は南方向へ大きく落ち込んでおり、その斜面には近世の盛土が堆積していた。また、表二の門下では、雨落溝と思われる平瓦を立てて並べた遺構を検出した。攪乱を受けていたため溝の掘方は確認できなかったが、瓦は地山ブロックを含んだ淡褐色シルト質土層に埋置され、直上に離宮期の整地層と思われる礫層がみられた。

このほか小天宇北東の3区では土層の堆積状況が良好であったため、本丸内の基本土層を整理している(図4-21)。I層(近代～現代)は厚さ12cmで、II層(近代)は厚さ4cmで明治時代離宮造営に伴う黄褐色土(表二の門周辺の1区では淡赤褐色土)の整地層である。この直下には厚さ数cmの礫層が敷かれる。III層(近世以降包含層)は厚さ10cmで地山ブロックを含む淡褐色シルト質土層、IV層(近世盛土)は厚さ44cmで砂粒・地山ブロックを多量に含む灰白色シルト質土層である(V層以下は中世以前)。このうちII層直下の礫層は図4-13の5層に対応し、IV層は図4-13の11層に対応していると思われる、参考となる。

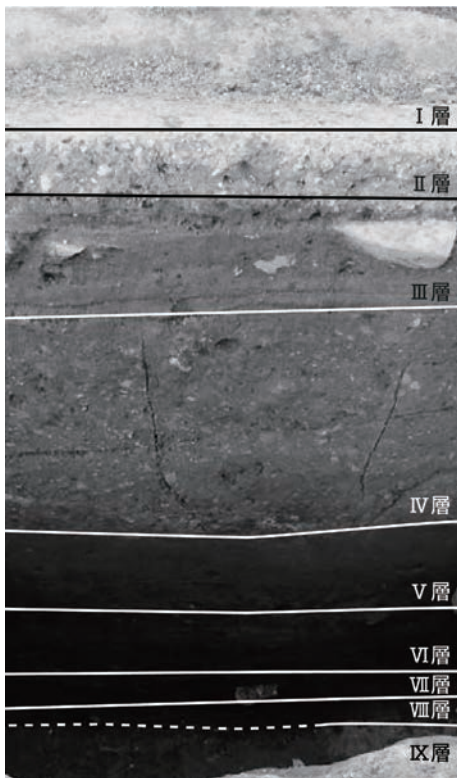


図4-21 基本土層



図4-22 表二の門周辺調査状況

引用文献

名古屋城総合事務所 2012『特別史跡名古屋城跡 本丸御殿跡発掘調査報告書—第5・6・7・8次調査—』

第4節 出土遺物

第1次調査ではタバコ2箱分、第2次調査ではタバコ20箱分の遺物を採集した。採集した遺物は、瓦、陶磁器、附属土塀に伴うものと思われる和釘などの鉄製品、漆喰片などである。第2次調査の調査区2では瓦だまりを検出したが、すべての瓦片ではなく、西側半数のみを採集した。ここでは瓦と陶磁器の主要な遺物の概要を報告し、観察表(表4-1・4-2)と縮尺を調整した写真(図版10~12)を掲載する。

瓦

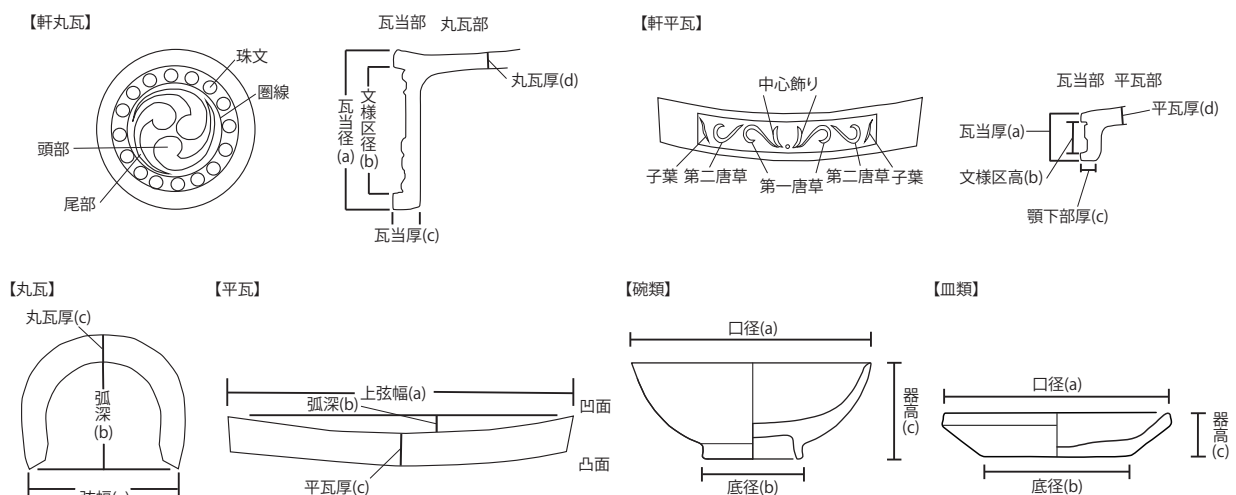
瓦は出土遺物の中で出土量が最も多く、第1次調査ではすべての瓦片を取り上げず、完形品に近いものをはじめ瓦当を選別して採集を行ったが、第2次調査では瓦だまりを除いてすべての瓦片を取り上げた。

第1次調査では調査区1の9・10層から軒丸瓦(図版番号2、以下も同様)・軒平か軒棧瓦(16)が出土したが、第2次調査で出土した瓦当は多くが表土や表土直下の土層、かく乱埋土からの出土であった。軒平瓦は東海式の文様をもつものを4点確認し(9~12)、1点は表採ではあるが大坂式のものもみられた(13)。20は文様区をもたない近代の軒平か軒棧瓦で、二次焼成を受けていた。刻印のついた瓦は十数点出土し、多くは「丸」の刻印であった(13~26、29・30)。このほか、27は「丸」と「井桁」の2つの刻印が押されており、28には「丸に一」の刻印がみられた。また、鉄軸がかけられた丸瓦が1点出土したが(31)、瓦だまりに含まれていたものであるため、他の場所からの混入の可能性が高い。

陶器

表二の門周辺という調査箇所性格から、出土遺物の大半は瓦であったが、その瓦片に混じるように多くの陶器が出土した。

特筆すべきは萩焼の碗と思われる陶器片(32~35)で、それぞれ接合はしないが、同一個体の可能性がある。このうち32は近世と思われる土層からの出土であるが、他の33~35は表土や近代以降の層に含まれ



- 瓦の各部名称や計測点、成形手法や調整法による分類は、下記の凡例と文献を主に使用した。
- 加藤晃・金子智1990「御殿下記念館地点、山上会館地点検出の瓦について」『山上会館・御殿下記念館地点』第3分冊(考察編)東京大学埋蔵文化財調査室
- 軒平瓦・軒棧瓦の文様分類は、下記の文献を主に使用した。
- 梶原義典2017「第2節 瓦の生産と流通」『愛知県史 資料編5 考古5』愛知県史編さん委員会
- 千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会2003「東京駅八重洲北口遺跡」

図4-23 出土遺物計測箇所

ていた。

皿類では、灯明皿・灯明受皿が6点みられた（38～43）。いずれも近世以降と思われる土層からの出土である。また、近代の刷毛皿（44）も出土した。45～51が鉢類で、このうち47・48が第1次調査で出土したものである。45～48は火鉢と推定され、48には口縁部に叩打痕がみられる。このほか火入と考えられる49、挿鉢の50などがある。52・53の合子蓋、54・55の小壺の破片も出土した。

近世以前の遺物

表土及び表土直下からの出土遺物には近世以前の遺物が含まれていた。56～58は中世の山茶碗と考えられる。また、調査区5の近代層と思われる6層から大窯期の碗類が出土し、調査区4の柱穴と思われるピット埋土からハケ目のついた土師器片が出土した。

磁器

磁器は第2次調査で十数点出土し、近世の碗と思われる破片（61）や近代の銅版転写により絵付けされた瓶類の破片（62）などがみられた。

表4-1 出土遺物観察表（瓦）

表中（ ）は推定計

図版 番号	調査区	出土地	層位	種類	器種	重量 (g)	法量 (cm)				備考
							a	b	c	d	
1	調査区2	—	1層（表土）	瓦類	軒丸瓦	871	13.5	10.1	2.0	1.7	九珠左巻三巴文
2	調査区1	北東部	9・10層	瓦類	軒丸瓦	582	13.4	9.6	2.0	1.6	十二珠右巻三巴文
3	調査区5	平坦部北サブトレ	8層	瓦類	軒丸瓦	334	13.5	9.5	2.0		欠損
4	調査区3	平坦部南かく乱	15層	瓦類	軒丸瓦	249	(18)	(11)	2.2		欠損
5	調査区5	平坦部	1層（表土）	瓦類	軒丸瓦	255	(15)	(10)	2.4		欠損
6	調査区4	平坦部南東かく乱	15層	瓦類	軒丸瓦	285	(18)	(13)	2.5		欠損
7	調査区4	平坦部	1層（表土）	瓦類	軒丸瓦	132	(15)	(11)	2.2		欠損
8	調査区3	平坦部	1層（表土）	瓦類	軒棧瓦	173	(9)	(7)		1.8	
9	調査区4	斜面部	1層（表土）	瓦類	軒棧	266	3.8	2.4	1.9	1.8	東海式
10	調査区3	斜面部南サブトレ	14層	瓦類	軒平か軒棧	142	5.0	2.8	1.5		欠損
11	調査区4	平坦部北かく乱	2層	瓦類	軒平か軒棧	175	欠損	欠損	欠損	1.9	東海式
12	調査区6	斜面部北サブトレ	—	瓦類	軒平か軒棧	62	欠損	欠損	欠損	欠損	東海式
13	調査区4	表採	—	瓦類	軒平か軒棧	118	3.9	2.2	1.5		欠損
14	調査区4	斜面部東サブトレ	19・20層	瓦類	軒平か軒棧	104	欠損	1.5	1.5		欠損
15	調査区4	平坦部瓦だまり	—	瓦類	軒平か軒棧	106	欠損	欠損	1.9		欠損
16	調査区1	北東部	9・10層	瓦類	軒平か軒棧	157	3.5	1.6	1.6	1.5	唐草・子葉のみ
17	調査区4	平坦部	1層（表土）	瓦類	軒平か軒棧	106	欠損	欠損	2.3		欠損
18	調査区5	平坦部	1層（表土）	瓦類	軒平か軒棧	142	3.7	2.1	1.6	1.2	唐草のみ
19	調査区4	平坦部瓦だまり	—	瓦類	軒平か軒棧	85	3.5	2.2	欠損	欠損	唐草のみ
20	調査区6	平坦部	1層（表土）	瓦類	軒平か軒棧	310	4.3	—	1.7	1.4	二次焼成
21	調査区3	斜面部	14層	瓦類	平か棧瓦	506	欠損	欠損	1.8	—	刻印「丸」
22	調査区4	平坦部瓦だまり	—	瓦類	平か棧瓦	463	欠損	欠損	2.0	—	刻印「丸」
23	調査区4	斜面部西サブトレ	—	瓦類	平か棧瓦	213	欠損	欠損	2.0	—	刻印「丸」
24	調査区4	平坦部瓦だまり	—	瓦類	平か棧瓦	255	欠損	欠損	1.8	—	刻印「丸」
25	調査区5	斜面部西サブトレ	15・16層	瓦類	平か棧瓦	317	欠損	欠損	2.3	—	刻印「丸」
26	調査区3	斜面部	1層（表土）	瓦類	平か棧瓦	141	欠損	欠損	1.6	—	刻印「丸」
27	調査区5	平坦部南西かく乱	20層	瓦類	平か棧瓦	224	欠損	欠損	2.0	—	刻印「丸」「井桁」
28	調査区5	平坦部	1層（表土）	瓦類	平か棧瓦	100	欠損	欠損	1.8	—	刻印「丸に一」
29	調査区6	斜面部北サブトレ	—	瓦類	丸か軒丸瓦	76	欠損	欠損	欠損	—	刻印「丸」
30	調査区5	平坦部北サブトレ	8層	瓦類	丸か軒丸瓦	184	欠損	欠損	欠損	—	刻印「丸」
31	調査区4	平坦部瓦だまり	—	瓦類	丸か軒丸瓦	516	欠損	欠損	欠損	—	鉄釉瓦

表4-2 出土遺物観察表（陶器・磁器）

表中()は推定計

図版 番号	調査区	出土地	層位	種類	器種	重量 (g)	法量 (cm)			備考
							a	b	c	
32	調査区4	平坦部	11層	陶器	碗類	26	(10)	欠損	欠損	萩焼
33	調査区4	斜面部	1層(表土)	陶器	碗類	5	(11)	欠損	欠損	萩焼
34	調査区4	平坦部	25層	陶器	碗類	12	欠損	欠損	欠損	萩焼
35	調査区4	斜面部	1層(表土)	陶器	碗類	5	(12)	欠損	欠損	萩焼
36	調査区4	平坦部	1層(表土)	陶器	碗類	12	(15)	欠損	欠損	
37	調査区4	平坦部	25層	陶器	碗類	13	欠損	(4)	欠損	
38	調査区5	斜面部西サブトレ	15・16層	陶器	灯明皿	9	欠損	(4)	欠損	
39	調査区5	斜面部東サブトレ	—	陶器	灯明皿	5	(11)	欠損	欠損	
40	調査区5	平坦部	6層	陶器	灯明皿	22	欠損	欠損	欠損	
41	調査区6	斜面部	1層(表土)	陶器	灯明皿	15	(11)	欠損	欠損	
42	調査区4	斜面部	1層(表土)	陶器	灯明皿	10	(10)	欠損	欠損	
43	調査区6	斜面部南サブトレ	24層	陶器	灯明受皿	27	(12)	(6)	1	
44	調査区4	平坦部	1層(表土)	陶器	皿類	45	欠損	6.5	欠損	刷毛目皿
45	調査区4	平坦部瓦だまり	—	陶器	火鉢	38	(18)	欠損	欠損	
46	調査区4	斜面部	1層(表土)	陶器	火鉢	65	欠損	(15)	欠損	
47	調査区2	—	1層(表土)	陶器	火鉢	70	欠損	欠損	欠損	
48	調査区1	—	1層(表土)	陶器	火鉢	100	(22)	欠損	欠損	口縁部叩打痕
49	調査区3	斜面部南サブトレ	14層	陶器	火入か	15	(13)	欠損	欠損	
50	調査区6	平坦部南西かく乱	31層	陶器	播鉢	60	欠損	欠損	欠損	
51	調査区4	平坦部瓦だまり	—	陶器	鉢類	17	欠損	欠損	欠損	
52	調査区6	斜面部南サブトレ	1層(表土)	陶器	合子蓋	14	(11)	欠損	欠損	
53	調査区5	斜面部西サブトレ	15・16層	陶器	合子蓋	11	(11)	欠損	欠損	
54	調査区4	斜面部	1層(表土)	陶器	小壺	5	(11)	欠損	欠損	
55	調査区3	斜面部南サブトレ	14層	陶器	小壺	15	(10)	欠損	欠損	
56	調査区4	斜面部	1層(表土)	陶器	碗類	13	欠損	(5)	欠損	山茶碗
57	調査区5	斜面部西サブトレ	15・16層	陶器	碗類	10	欠損	(5)	欠損	山茶碗
58	調査区4	斜面部	1層(表土)	陶器	碗類	3	欠損	欠損	欠損	山茶碗
59	調査区5	平坦部	6層	陶器	皿類	28	欠損	(8)	欠損	大窯期
60	調査区4	平坦部中央	ピット埋土	陶器	碗類	52	欠損	欠損	欠損	土師器か
61	調査区4	平坦部瓦だまり	—	磁器	碗類	2	(8)	欠損	欠損	
62	調査区4	平坦部	25層	磁器	瓶類	11	欠損	欠損	欠損	銅板転写

第5章 その他の調査成果

第1節 ビデオスコープ調査

ビデオスコープ調査は、雁木の背面構造及び雁木石材の奥行を確認する目的で、アールエフ社製先端可動式工業用内視鏡VJ-ADV（φ3.9mm）をレンタルし、令和3年(2021)12月15日～12月24日の期間で実施した。調査対象としたのは、現存の東北隅櫓石段と平成7～11年(1995～1999)に積み直されている二之丸東二之門の雁木2箇所である。現状で生じていた石材間の隙間にケーブルを挿入し、挿入深度を確認したうえで雁木の背面状況を記録した。なお、挿入箇所の記録には石垣オルソ画像を使用した。

東北隅櫓石段は近代以降に積み直された記録がなく、近世から現存すると考えられる石段である。それゆえに石段の踏面（上面）はひどく傾斜しており、各所に隙間が生じている。表二の門や二之丸東二之門などの桁形門に伴う雁木とは性格が異なり、本丸から東北隅櫓へ登るための石段であるが、構造は雁木と類似している可能性があるため、調査対象とした。この石段も広義には雁木に含まれるが、ここでは区別して石段と呼称する。

東北隅櫓石段では12箇所ビデオスコープを挿入し（図5-1）、その状況を画像で記録した（図5-2）。全体の状況をみると、基本的な背面構造として土砂と円礫が詰まっている状況を確認することができた。円礫の大きさはビデオスコープでは正確に計測できないが、相対的にみると径30cm以上の径の大きい円礫で構成されていると推定される。また、石段の上面は上下の段で重なる部分が数cm～10cm程度のみで、奥行は踏面とほとんど変わらないことが明らかとなった。石段1石の奥行が小さい分、背面に円礫を詰めて段を形成している状況も確認することができた（⑤・⑥・⑦・⑪）。石段は石材同士が踏面と蹴上を揃えて設置されているように見えるが、背面部分は表面ほど揃っておらず、間に円礫を詰めて整えていることが分かる（②・④）。

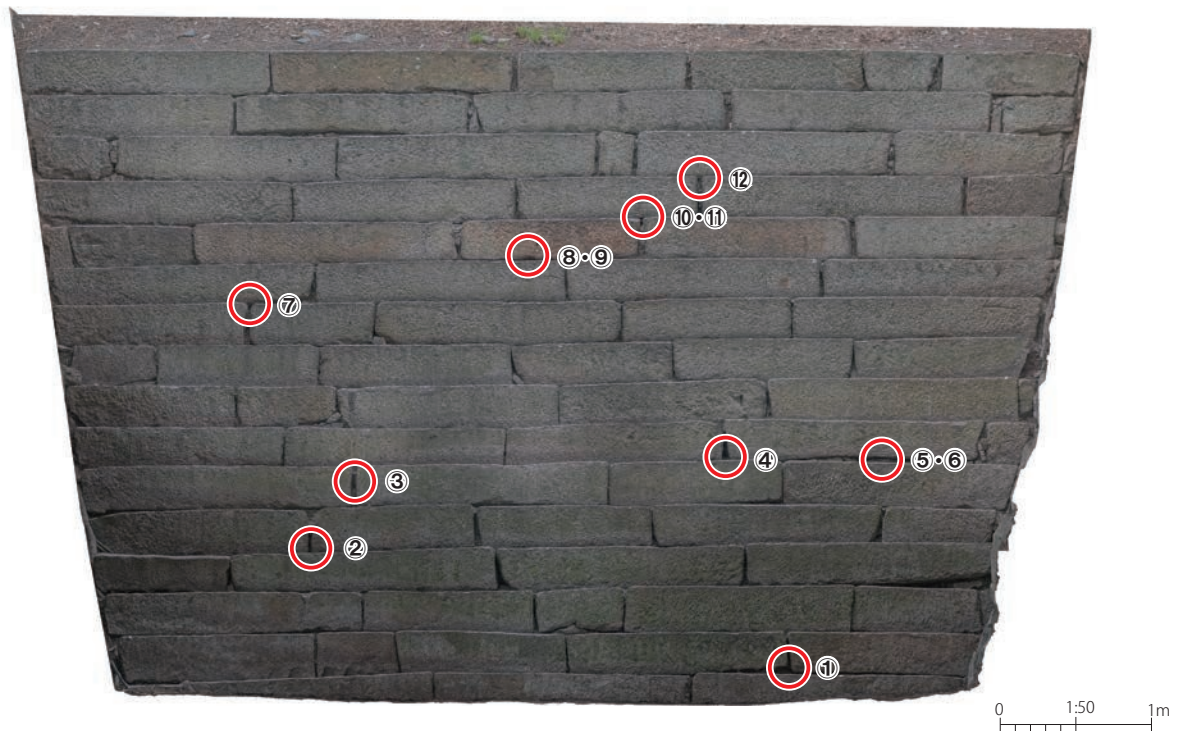


図5-1 東北隅櫓石段スコープ挿入箇所



① 深さ 0.3m
円礫が詰まる



② 深さ 0.25m
石段（左右）間に円礫が詰まる



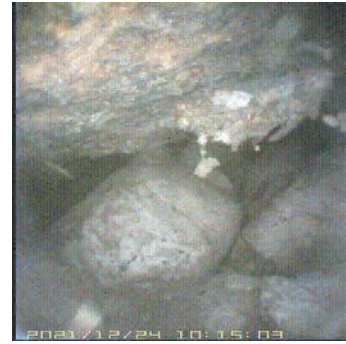
③ 深さ 0.25m
石段（左右）間が土砂と根で詰まる



④ 深さ 0.3m
石段（左右）間に円礫が詰まる



⑤ 深さ 0.1m
石段（上）の下に円礫が詰まる



⑥ 深さ 0.4m
石段（上）の下に円礫が詰まる



⑦ 深さ 0.4m
石段（上）の下に円礫が詰まる



⑧ 深さ 0.2m
円礫が詰まる



⑨ 深さ 0.35m
円礫が詰まる



⑩ 深さ 0.3m
円礫が詰まる



⑪ 深さ 0.5m
石段（上）の下に円礫が詰まる



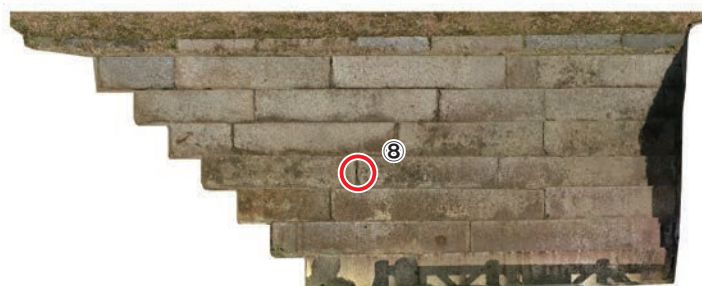
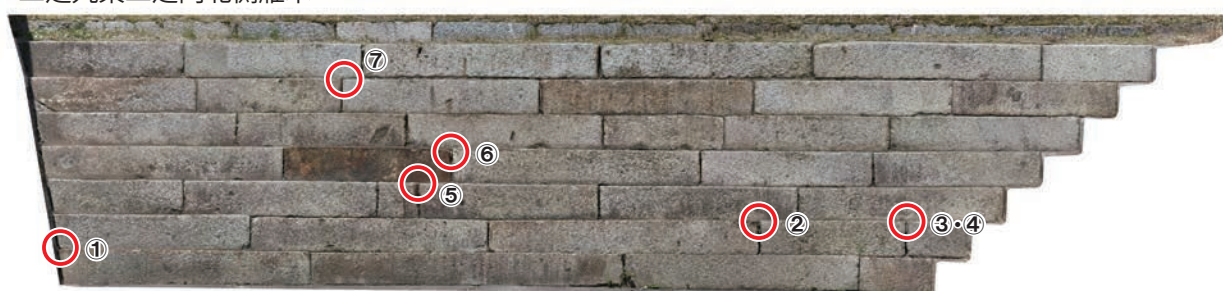
⑫ 深さ 0.5m
円礫が詰まる

図5-2 東北隅櫓石段スコープ画像

二之丸東二之門の雁木は北側南側ともに平成7～11年(1995～1999)にかけて積み直されており、工事報告書も刊行されている(名古屋市教育委員会1997・2000)。報告書では記録から元の所在位置の通りに積み直し、再利用できないものは新補石材に取り替えたと記載されているが、具体的な箇所は示されていない。工事の実状が不明な部分も多いため、現在の状況を確認するためにも調査を実施した。

二之丸東二之門の雁木は積み直し工事から20年ほど経つが、目立った隙間はほとんどなく、東北隅櫓石段のような傾斜もみられなかった。11箇所ビデオスコープを挿入し(図5-3)、その状況を記録した(図5-4)。全体の状況を見ると、東北隅櫓石段とは異なって土砂はあまり詰まっておらず、円礫などが充填されている背面構造を確認できた。②・⑦・⑪では円礫間に径の小さい礫が含まれている状況がみられ、④では花崗岩の割石がみられた。また、背面構造の円礫にモルタルかコンクリート由来と思われる針状結晶が発達していることを確認した(③・⑤)。

二之丸東二之門北側雁木



二之丸東二之門南側雁木



0 1m

図5-3 二之丸東二之門スコープ挿入箇所



① 深さ 0.35m
円礫が詰まる



② 深さ 0.45m
円礫中に径の小さい礫を含む



③ 深さ 0.4m
円礫にモルタル付着する



④ 深さ 0.5m
花崗岩と思われる割石



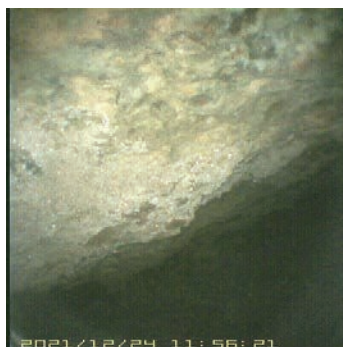
⑤ 深さ 0.35m
円礫にモルタル付着する



⑥ 深さ 0.45m
円礫が詰まる



⑦ 深さ 0.4m
円礫中に径の小さい礫を含む



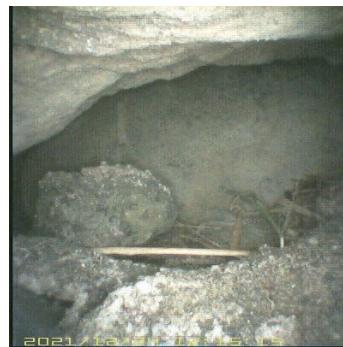
⑧ 深さ 0.35m
円礫の表面状態



⑨ 深さ 0.4m
円礫が詰まる



⑩ 深さ 0.4m
円礫が詰まる



⑪ 深さ 0.5m
円礫と径の小さい礫が詰まる

図5-4 二之丸東二之門スコープ画像

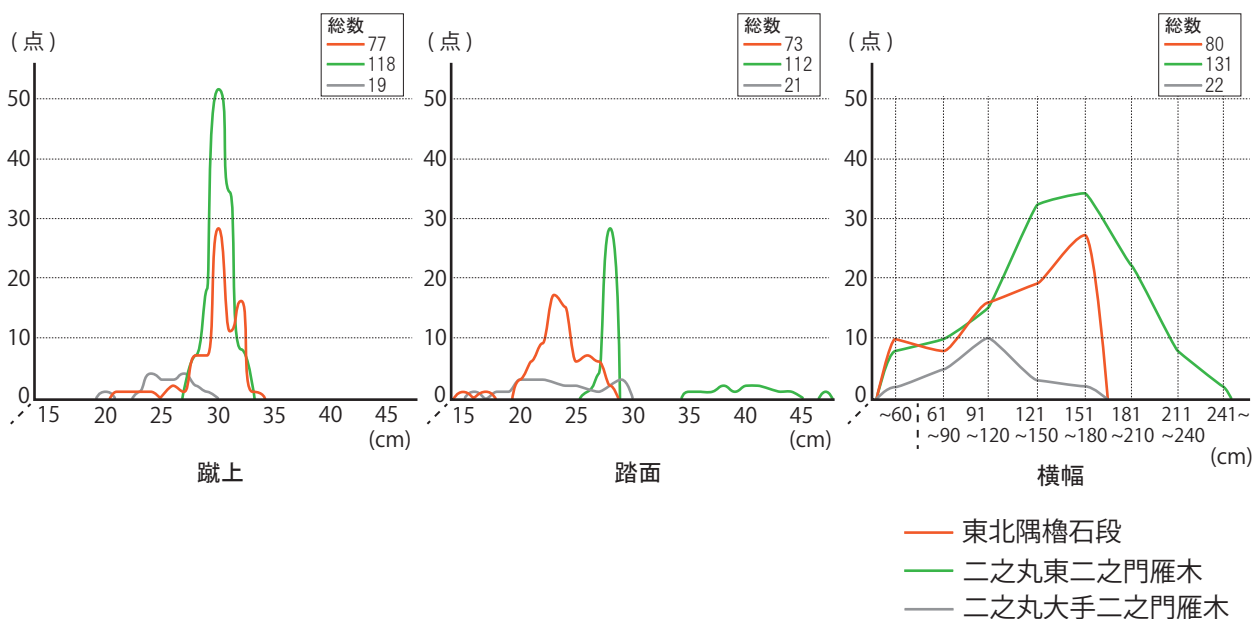
第2節 雁木計測調査

雁木計測調査は、城内の雁木石材の寸法を調査し、雁木石材のおおよその傾向を確認することを目的として、令和3(2021)～令和4(2022)年度にかけて実施した。調査対象としたのは、現存の東北隅櫓石段と二之丸大手二之門の雁木、積み直されている二之丸東二之門の雁木である。合計259石の石材に対し、蹴上、踏面、横幅、奥行（ビデオスコープや露出によって確認できたもののみ）、傾斜度（東北隅櫓石段のみ）を計測した。調査に際して、対象の雁木ごとに任意で石材番号を振り（図5-7・5-8）、各石材の計測値は表5-2～5-5にまとめた。なお、石材番号の下図には石垣オルソ画像を使用した。

計測した石材の寸法から、蹴上・踏面・横幅の要素ごとに大きさの傾向を示したのが図5-5である。3つの要素のうち、蹴上と踏面は大半の石材が27～33cmの間に収まっていることが明らかとなり、ここに雁木石材としての規格をみることができる。一方で横幅については180～210cmのものが最大となっているが、明確な規格はみられず、それぞれの元の石材形状に合わせて決められていたと考えられる。各要素の平均値・中央値は蹴上が29.6cm・30.0cm、踏面が27.3cm・28.0cm、横幅が134.2cm・140.0cmであった。なお、『金城温古録』では雁木の寸法に関して「踏石の中壺尺（30.3cm）高九寸（27.3cm）程不同」（括弧内は筆者加筆）と記載がある。

雁木石材の傾向と第2次調査で出土した切石を比較したのが表5-1である。No.5の奥行のみ雁木と比べて短く外れてしまうが、それ以外は雁木石材の寸法に収まるもので、平均値に近い大きさであることから、雁木の石材である可能性が高いといえる。

また、今回の調査を実施するなかで、二之丸東二之門の雁木に未報告の刻銘があることを確認した（図5-6）。刻印がみられたのは二之丸東二之門北側雁木のNo.40の石材で、踏面部分に「石工□吉」と刻まれていた（定吉？半吉？）。城内の刻銘をみると、ほとんどが大名家やその家臣の銘で、職人の銘が刻まれている例はない。このため、築城期のものとは考えにくく、築城期以降に彫られたものである可能性がある。



※分布図には各箇所ですべての寸法を計測できた数値のみ使用した。

図5-5 雁木石材寸法分布図

表5-1 出土切石と城内雁木の比較

No.	高さ (m)	奥行 (m)	横幅 (m)	備 考
切石No.1	0.29	0.39	1.21	
切石No.2	0.30	0.22	0.77	
切石No.3	0.29	0.30	0.44	
切石No.4	0.30	0.28	0.55	
切石No.5	0.36	0.15	0.78	
(切石No.6)	(0.33)	(0.30)	(0.60)	抜き取り痕の計測値
切石No.7	0.33	0.25	0.53	
切石No.8	0.34	0.32	1.18	
城内雁木平均	0.296(0.20~0.33)	0.273(0.15~0.48)	1.342(0.1~2.64)	

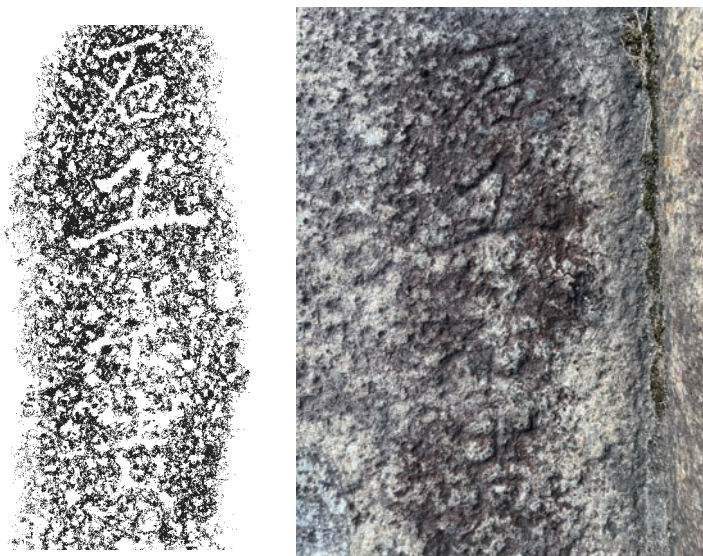
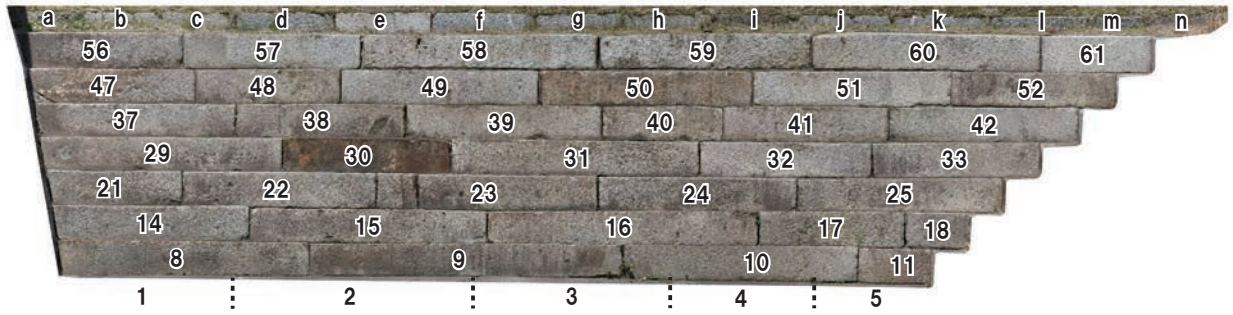


図5-6 二之丸東二之門「石工」刻銘

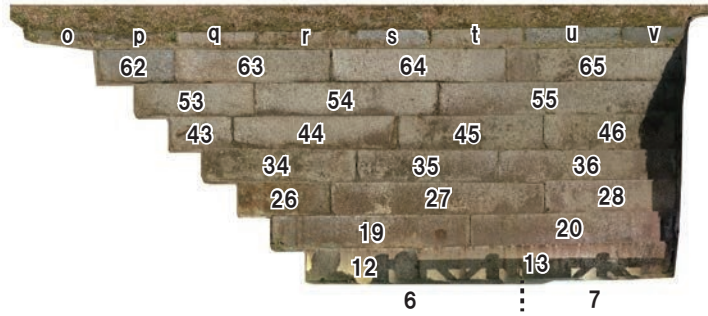


図5-7 東北隅櫓石段石材番号

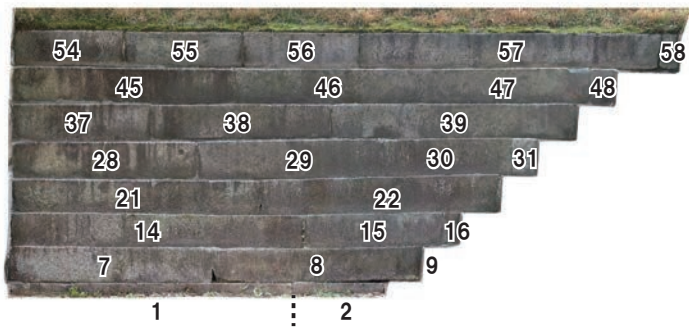
二之丸東二之門北側雁木 (1)



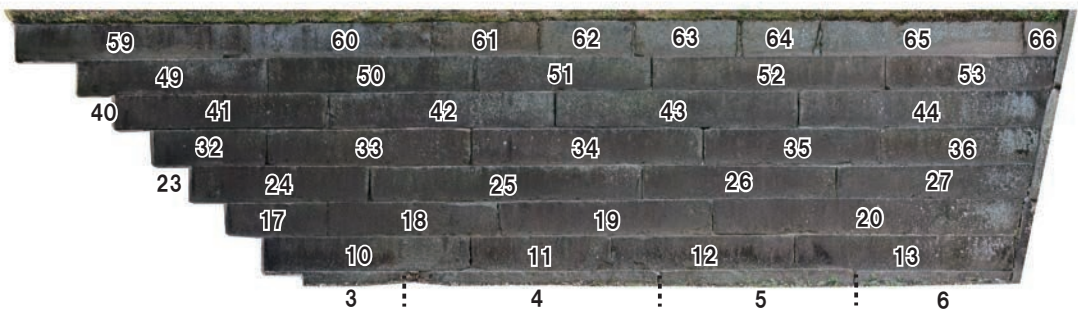
二之丸東二之門北側雁木 (2)



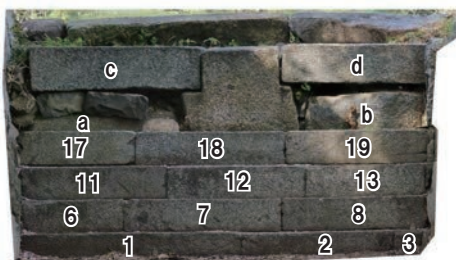
二之丸東二之門南側雁木 (1)



二之丸東二之門南側雁木 (2)



二之丸大手二之門南側雁木



二之丸大手二之門北側雁木

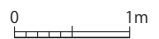
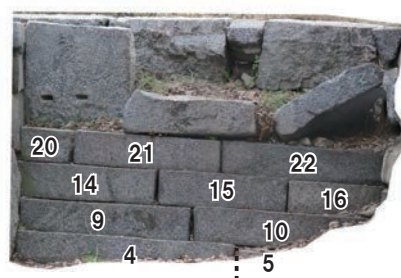


図5-8 二之丸東二之門・大手二之門石材番号

表5-2 東北隅櫓石段 計測値一覧

No.	段数	蹴上 (m)	踏面 (m)	傾斜 (°)	横幅 (m)	奥行 (m)	備 考
1	1	*0.05	0.24	0.60	0.45	—	
2	1	*0.25	0.28	-4.90	1.60	—	
3	1	*0.23	0.23	-13.50	1.68	—	
4	1	0.26	0.22	-4.30	1.68	—	
5	2	0.32	0.23	-7.10	1.28	*0.27	
6	2	0.30	0.20	-9.20	0.51	—	
7	2	0.24	0.24	-7.30	1.10	*0.33	
8	2	0.28	0.24	-6.80	1.44	0.36	
9	2	0.29	0.23	-4.00	1.24	0.34	
10	3	0.28	0.21	-6.60	1.70	—	
11	3	0.28	0.21	-5.60	1.11	*0.35	
12	3	0.32	0.27	-9.70	0.56	—	
13	3	0.32	0.27	-7.00	1.50	—	
14	3	0.23	0.17	-7.70	0.80	—	
15	4	0.30	0.27	2.20	0.89	*0.26	奥行露出
16	4	0.30	0.27	-12.30	1.72	0.36	
17	4	0.30	0.24	-7.10	1.64	0.34	
18	4	0.21	0.28	-13.50	1.67	—	
19	5	0.32	0.26	-6.00	1.40	*0.30	
20	5	0.32	0.20	-11.80	1.05	*0.29	
21	5	0.30	0.24	-8.70	1.14	0.33	
22	5	0.28	0.27	-6.00	1.52	—	
23	5	0.30	0.26	-11.50	0.74	—	
24	6	0.30	0.23	-14.60	1.80	—	
25	6	0.31	0.24	-24.00	1.50	—	
26	6	0.31	0.24	-9.80	1.13	*0.36	
27	6	0.30	0.23	-8.60	1.53	—	
28	7	0.28	0.24	-9.20	1.37	—	
29	7	0.32	0.26	-9.40	1.43	—	
30	7	0.30	0.25	-11.80	1.42	0.31	
31	7	0.29	0.26	-5.50	1.71	0.32	
32	7	0.30	0.15	-4.30	0.25	*0.22	
33	8	0.30	0.22	-12.00	1.12	—	モルタル詰まる
34	8	0.30	0.23	-13.80	0.65	—	
35	8	0.32	0.21	-7.00	1.45	—	
36	8	0.32	0.25	-12.30	1.33	—	
37	8	0.31	0.26	-15.80	1.66	—	
38	9	0.31	0.23	-11.90	0.53	—	
39	9	0.31	0.23	-8.60	1.06	*0.27	
40	9	0.30	0.23	-5.10	1.24	*0.32	
41	9	0.32	0.24	-7.40	1.05	*0.32	
42	9	0.32	0.22	-8.60	1.19	*0.40	
43	9	0.31	0.26	-4.00	1.19	—	
44	10	0.32	0.23	-9.70	1.26	—	
45	10	0.30	0.24	-10.20	0.80	0.48	
46	10	0.30	0.26	-5.80	1.58	0.45	
47	10	0.30	0.24	-4.40	1.11	—	
48	10	0.22	0.27	-9.50	1.30	—	
49	11	0.31	0.23	-10.50	1.72	—	
50	11	0.30	0.20	-6.80	1.62	—	
51	11	0.29	0.24	-5.60	1.68	*0.35	奥行露出
52	11	0.29	0.21	-3.20	1.51	*0.24	
53	12	0.29	0.21	1.90	0.15	—	
54	12	0.30	0.22	0.40	0.81	*0.21	
55	12	0.30	0.23	-5.30	1.69	—	

表中*は全長が計測できなかった未確定箇所

No.	段数	蹴上 (m)	踏面 (m)	傾斜 (°)	横幅 (m)	奥行 (m)	備 考
56	12	0.26	0.25	-6.40	1.16	*0.40	変色激しい
57	12	0.30	0.25	-10.20	1.33	0.38	変色激しい
58	12	0.30	0.25	-10.30	1.33	0.38	
59	13	0.31	0.24	-3.10	1.65	*0.35	
60	13	0.30	0.25	-6.30	1.47	—	
61	13	0.31	0.24	-4.50	1.18	*0.36	
62	13	0.30	0.22	-6.70	1.70	0.26	
63	13	0.30	0.22	-5.10	0.63	*0.30	
64	14	0.32	0.23	-11.50	0.50	*0.30	
65	14	0.32	0.24	-6.20	1.44	—	
66	14	0.32	0.23	-6.50	1.69	*0.38	
67	14	0.32	0.23	-12.20	0.22	*0.36	右：瓦詰まる
68	14	0.31	0.23	-11.50	1.65	*0.35	右：瓦詰まる
69	14	0.33	0.22	-11.10	1.07	—	
70	15	0.31	0.22	-4.50	1.34	—	
71	15	0.29	0.21	-8.50	1.51	—	
72	15	0.29	0.22	-6.00	1.63	—	
73	15	0.27	0.23	-7.30	1.71	—	
74	15	0.28	0.20	-11.50	0.48	—	
75	16	0.32	*0.16	-4.50	1.61	—	
76	16	0.28	*0.20	-7.80	1.61	—	
77	16	0.30	*0.20	-7.50	1.11	—	変色激しい
78	16	0.30	*0.25	-4.40	1.12	—	
79	16	0.30	*0.20	-3.70	0.49	—	
80	16	0.30	*0.10	-3.30	0.90	—	

表5-3 二之丸東二之門北側雁木 計測値一覧

No.	段数	蹴上 (m)	踏面 (m)	横幅 (m)	奥行 (m)	備 考
1	1	*0.05	0.28	1.44	—	
2	1	*0.05	0.28	2.02	—	
3	1	*0.07	0.29	1.65	—	
4	1	*0.05	0.28	1.20	—	
5	1	*0.06	0.28	1.00	—	
6	1	*0.08	0.28	1.66	—	
7	1	*0.08	0.29	1.27	—	
8	2	0.30	0.29	2.12	—	
9	2	0.28	0.27	2.64	—	
10	2	0.30	0.28	2.00	—	
11	2	0.31	0.29	0.61	—	
12	2	0.30	0.29	1.30	—	
13	2	0.30	0.29	2.29	—	
14	3	0.31	0.30	1.66	—	
15	3	0.30	0.30	1.95	—	
16	3	0.30	0.29	2.27	—	
17	3	0.31	0.28	1.25	—	
18	3	0.30	0.29	0.81	—	
19	3	0.31	0.27	1.77	—	
20	3	0.29	0.28	1.84	—	
21	4	0.30	0.29	1.13	—	
22	4	0.31	0.29	1.63	—	
23	4	0.31	0.29	1.86	—	大きいひび割れ
24	4	0.30	0.31	1.67	—	
25	4	0.29	0.30	1.74	—	
26	4	0.30	0.30	1.11	—	
27	4	0.29	0.31	1.91	—	
28	4	0.31	0.29	1.19	—	
29	5	0.29	0.30	2.05	—	
30	5	0.30	0.30	1.40	—	変色激しい、剥離あり
31	5	0.31	0.30	2.09	—	
32	5	0.31	0.31	1.44	—	
33	5	0.30	0.30	1.75	—	
34	5	0.30	0.31	1.37	—	
35	5	0.30	0.28	1.27	—	
36	5	0.30	0.29	1.58	—	
37	6	0.30	0.30	1.70	—	
38	6	0.29	0.30	1.42	—	
39	6	0.30	0.30	1.65	—	
40	6	0.31	0.30	1.01	—	上面に刻銘「石工□吉」
41	6	0.31	0.30	1.41	—	
42	6	0.30	0.30	1.60	—	
43	6	0.29	0.28	0.87	—	
44	6	0.29	0.29	1.48	—	
45	6	0.30	0.29	1.30	—	
46	6	0.32	0.29	1.18	—	
47	7	0.31	0.30	1.41	—	
48	7	0.31	0.31	1.22	—	
49	7	0.30	0.29	1.65	—	
50	7	0.31	0.32	1.80	—	
51	7	0.30	0.31	1.66	—	
52	7	0.30	0.31	1.40	—	
53	7	0.31	0.30	1.39	—	
54	7	0.31	0.30	1.64	—	
55	7	0.30	0.28	2.19	—	

表中*は全長が計測できなかった未確定箇所

No.	段数	蹴上 (m)	踏面 (m)	横幅 (m)	奥行 (m)	備 考
56	8	0.31	0.45	1.36	—	
57	8	0.30	0.42	1.49	0.42	
58	8	0.32	0.44	1.96	0.44	
59	8	0.32	0.48	1.78	0.48	
60	8	0.31	*0.35	1.86	*0.35	
61	8	0.31	*0.21	1.27	*0.21	
62	8	0.31	*0.32	0.69	*0.32	
63	8	0.30	*0.41	1.39	*0.41	
64	8	0.30	*0.34	1.56	*0.34	
65	8	0.30	*0.39	1.58	*0.39	
a	—	0.12	—	0.60	—	
b	—	0.15	—	0.66	—	
c	—	0.15	—	0.60	—	
d	—	0.17	—	0.83	—	
e	—	0.18	—	0.80	—	
f	—	0.16	—	0.88	—	
g	—	0.13	—	0.70	—	
h	—	0.10	—	0.77	—	
i	—	0.11	—	0.68	—	
j	—	0.10	—	0.78	—	
k	—	0.11	—	0.80	—	
l	—	0.10	—	1.25	—	
m	—	0.10	—	0.56	—	
n	—	0.08	—	0.13	—	
o	—	0.08	—	0.17	—	
p	—	0.10	—	0.98	—	
q	—	0.13	—	0.75	—	
r	—	0.14	—	0.83	—	
s	—	0.17	—	0.70	—	
t	—	0.17	—	0.81	—	
u	—	0.16	—	0.84	—	
v	—	0.16	—	0.60	—	

表5-4 二之丸東二之門南側雁木 計測値一覧

No.	段数	蹴上 (m)	踏面 (m)	横幅 (m)	奥行 (m)	備 考
1	1	*0.08	0.29	2.29	—	
2	1	*0.08	0.30	1.03	—	
3	1	*0.08	0.26	1.28	—	
4	1	*0.10	0.28	1.92	—	
5	1	*0.13	0.28	1.62	—	
6	1	*0.11	0.28	0.71	—	
7	2	0.30	0.28	1.61	—	
8	2	0.29	0.28	1.94	—	
9	2	0.29	0.29	0.10	—	
10	2	0.30	0.28	1.70	—	
11	2	0.30	0.28	1.14	—	
12	2	0.28	0.28	1.47	—	
13	2	0.30	0.28	1.76	—	
14	3	0.29	0.29	2.38	—	
15	3	0.29	0.28	1.14	—	
16	3	0.28	0.28	0.13	—	新補石材か
17	3	0.30	0.30	1.10	—	
18	3	0.31	0.29	1.39	—	
19	3	0.30	0.28	1.72	—	
20	3	0.32	0.27	2.49	—	
21	4	0.28	0.28	2.02	—	
22	4	0.31	0.29	1.95	—	
23	4	0.31	0.28	0.14	—	新補石材か
24	4	0.30	0.29	1.62	—	
25	4	0.30	0.27	2.20	—	
26	4	0.29	0.29	1.59	—	
27	4	0.29	0.28	1.62	—	
28	5	0.31	0.29	1.41	—	
29	5	0.32	0.29	1.50	—	
30	5	0.31	0.29	1.04	—	
31	5	0.30	0.29	0.21	—	新補石材か
32	5	0.30	0.28	1.21	—	
33	5	0.31	0.30	1.65	—	

表中*は全長が計測できなかった未確定箇所

No.	段数	蹴上 (m)	踏面 (m)	横幅 (m)	奥行 (m)	備 考
34	5	0.31	0.29	1.88	—	
35	5	0.31	0.29	1.45	—	
36	5	0.31	0.29	1.30	—	
37	6	0.31	0.30	1.13	—	
38	6	0.28	0.30	1.46	—	
39	6	0.30	0.30	1.98	—	
40	6	0.29	0.30	0.20	—	
41	6	0.30	0.30	1.83	—	
42	6	0.30	0.28	1.83	—	
43	6	0.32	0.29	1.97	—	
44	6	0.31	0.29	2.07	—	
45	7	0.30	0.41	1.77	—	
46	7	0.30	0.37	1.51	—	
47	7	0.30	0.39	1.36	—	
48	7	0.29	0.41	0.20	—	
49	7	0.31	0.4	1.64	—	
50	7	0.31	0.36	1.68	—	
51	7	0.31	0.38	1.42	—	
52	7	0.30	0.42	1.89	—	
53	7	0.29	0.39	1.36	—	
54	8	0.30	—	0.88	—	
55	8	0.28	—	0.96	—	
56	8	0.30	—	0.95	—	
57	8	0.29	—	2.40	—	
58	8	0.29	—	0.15	—	
59	8	0.30	—	1.85	—	
60	8	0.30	—	1.52	—	
61	8	0.30	—	0.86	—	
62	8	0.32	—	0.75	—	
63	8	0.32	—	0.83	—	
64	8	0.30	—	0.62	—	
65	8	0.30	—	1.64	—	
66	8	0.28	—	0.20	—	

表5-5 二之丸大手二之門雁木 計測値一覧

No.	段数	蹴上 (m)	踏面 (m)	横幅 (m)	奥行 (m)	備 考
1	1	*0.25	0.24	1.68	—	
2	1	*0.1	0.27	0.80	—	
3	1	0.23	0.22	1.61	—	
4	1	0.20	0.21	1.10	—	
5	1	0.18	0.18	0.21	—	
6	2	0.27	0.25	1.31	—	
7	2	0.28	0.25	1.25	—	
8	2	0.25	0.19	0.75	—	
9	2	0.24	0.20	1.14	—	
10	2	0.24	0.21	1.16	—	
11	3	0.29	0.22	1.06	—	
12	3	0.27	0.22	1.06	—	
13	3	0.27	0.16	0.66	—	

表中*は全長が計測できなかった未確定箇所

No.	段数	蹴上 (m)	踏面 (m)	横幅 (m)	奥行 (m)	備 考
14	3	0.25	0.20	1.08	—	
15	3	0.24	0.21	1.10	—	
16	3	0.25	0.20	0.85	—	
17	4	0.27	0.24	0.40	0.24	
18	4	0.26	0.44	1.10	0.44	
19	4	0.28	—	1.25	—	
20	4	0.26	0.29	0.85	0.29	
21	4	0.24	0.29	1.09	0.29	
22	4	0.26	0.29	1.02	0.29	
a	—	0.25	—	1.06	—	
b	—	0.36	—	0.90	—	
c	—	0.31	0.28	1.25	—	
d	—	0.28	0.28	*1.20	—	

参考文献

名古屋市教育委員会文化財課 1997 『特別史跡名古屋城跡 二之丸旧東二之門跡北側・二之丸東面石垣修理
工事報告書 1996年度』

名古屋市教育委員会文化財保護室 2000 『特別史跡名古屋城跡 二之丸東二之門跡石垣保存修理工事報告書
1999年度』

第6章 総括

第1次調査の成果

調査区1では表二の門西側控柱下端の根継石が地表から約48cm下でコンクリート基礎へ切り替わることを確認した。コンクリート基礎は平面が1辺約1.2mの大きさと考えられる。しかし、表二の門の修理履歴を確認しても門の控柱を改修した記録は残されておらず、近代～現代のいつの時期に設置したものかは不明である。調査区2では附属土塀控柱の基礎構造を確認したところ、地表から約95cm下で控柱下端に鉄製のボルトが止められた状態で出土した。控柱の周囲約30～40cmの範囲で掘り下げたような痕跡も確認したことから、近代～現代に修理されていると考えられる。修理履歴と照らし合わせると、平成24年(2012)の工事では修理対象となっていないため、昭和48年(1973)に実施された附属土塀の部分修理にあたる可能性がある。

第2次調査の成果

各調査区の斜面裾部にて、高さが揃う切石が横並びで計7石出土した。出土状況や石材の寸法、側面の変色の線などから雁木の最下段と考えられる。土塁に面した石垣面では階段状の加工痕を確認した。雁木を設置する際に石垣面と噛み合うように加工した痕跡と考えられる。加工痕は雁木の輪郭の形状を示しているものではなく、部分的に1～4段分のみ確認することができた。土塁斜面では円礫が密集する状況を確認した。雁木の背面に意図的に充填された可能性が高いが、円礫が密集する土層中に瓦片が含まれていた。また、切石は1石分抜き取られており、切石の背面と下面を確認することができた。背面と下面ともに円礫が密集しており、そのなかに瓦片が含まれていた。瓦片を伴う円礫の背面構造と、切石表面の整形面が裏面にある切石が見られることから、出土した切石の設置時期は築城期ではなく、後の時期に積み直されたものである可能性が考えられる。

調査区3・4の平坦部では地表から約50cm下で近世盛土層と思われる褐色土を面的に確認することができた。調査区5・6の平坦部では中央にサブトレンチを設定して深掘りしたところ、地表から約60cm下で近世盛土層と思われる黄褐色土を確認した。ただし、これらの近世盛土層は近世以降のかく乱の影響を受けており、切石側面に据えつく近世の地表面を確認することはできなかった。

雁木について

名古屋城の絵図の変遷をみると、表二の門では江戸時代から雁木が描かれており、大正8年(1919)以降になると土塁の描写に切り替わることから、その頃に雁木が取り外された可能性がある。雁木は、表二の門両脇の旗台石垣が地表面から高さが約2.7mあることから、1段の蹴上が30cmと考えると8～9段必要と考えられるが、大正4年(1915)以前の絵図では4～6段で描かれている。試掘調査では最下段が出土し、確かに雁木があったこと、雁木の位置が明らかになったが、その上部は石垣面の加工痕が参考となるのみで、それも部分的であるため、雁木の正確な段数は未だ不明である。また、雁木の背面構造は、試掘調査によって円礫が密集する状況を確認できたが、円礫中に瓦片が含まれており、後世の積み直しの可能性がある。したがって、築城期の雁木やその背面構造については不明である。こうした試掘調査の成果を踏まえつつ雁木整備の可能性について今後も検討を続けていきたい。



1 第1次調査 調査区1完掘状況（東から）



2 調査区1 完掘状況（南から）

図版2



1 第1次調査 調査区2完掘状況（東から）



2 調査区2 控柱基部検出状況（北東から）



3 調査区1 コンクリート基礎検出状況（北から）



4 調査区2 控柱下端鉄製ボルト検出状況



1 第2次調査 調査区3・4完掘状況（北から）



2 第2次調査 調査区5・6完掘状況（北から）

図版 4



1 第2次調査 調査区3完掘状況（西から）



2 調査区3 控柱根固め検出状況（西から）



3 調査区3 石垣面検出状況（北西から）



4 調査区3 切石検出状況（西から）



5 調査区3 切石側面検出状況（西から）



1 第2次調査 調査区4完掘状況（北から）



2 調査区4 瓦だまり完掘状況（東から）



3 調査区4 ピット検出状況（南から）



4 調査区4 切石検出状況（北から）



5 調査区4 切石側面検出状況（北から）

図版 6



1 第2次調査 調査区5完掘状況（北から）



2 調査区5 近世層検出状況（北から）



3 調査区5 地表下石垣検出状況（北西から）



4 調査区5 切石検出状況（北から）



5 切石抜き取り痕検出状況（北から）



1 第2次調査 調査区6完掘状況（東から）



2 調査区6 控柱根固め検出状況（東から）



3 調査区6 地表下石垣検出状況（南東から）



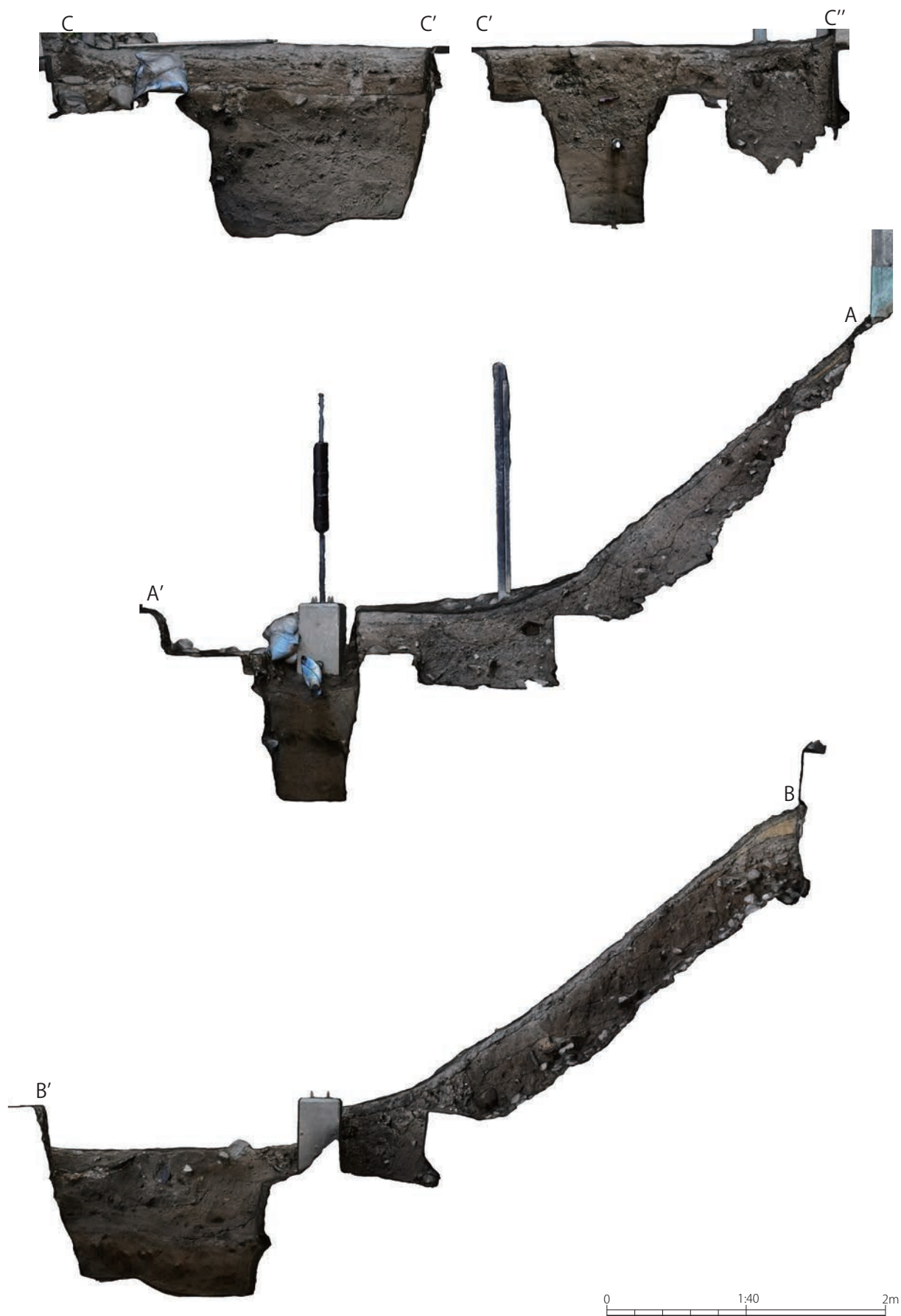
4 調査区6 切石検出状況（東から）



5 調査区6 切石側面検出状況（東から）



1 調査区 3・4 土層断面 オルソ画像



1 調査区5・6土層断面 オルソ画像

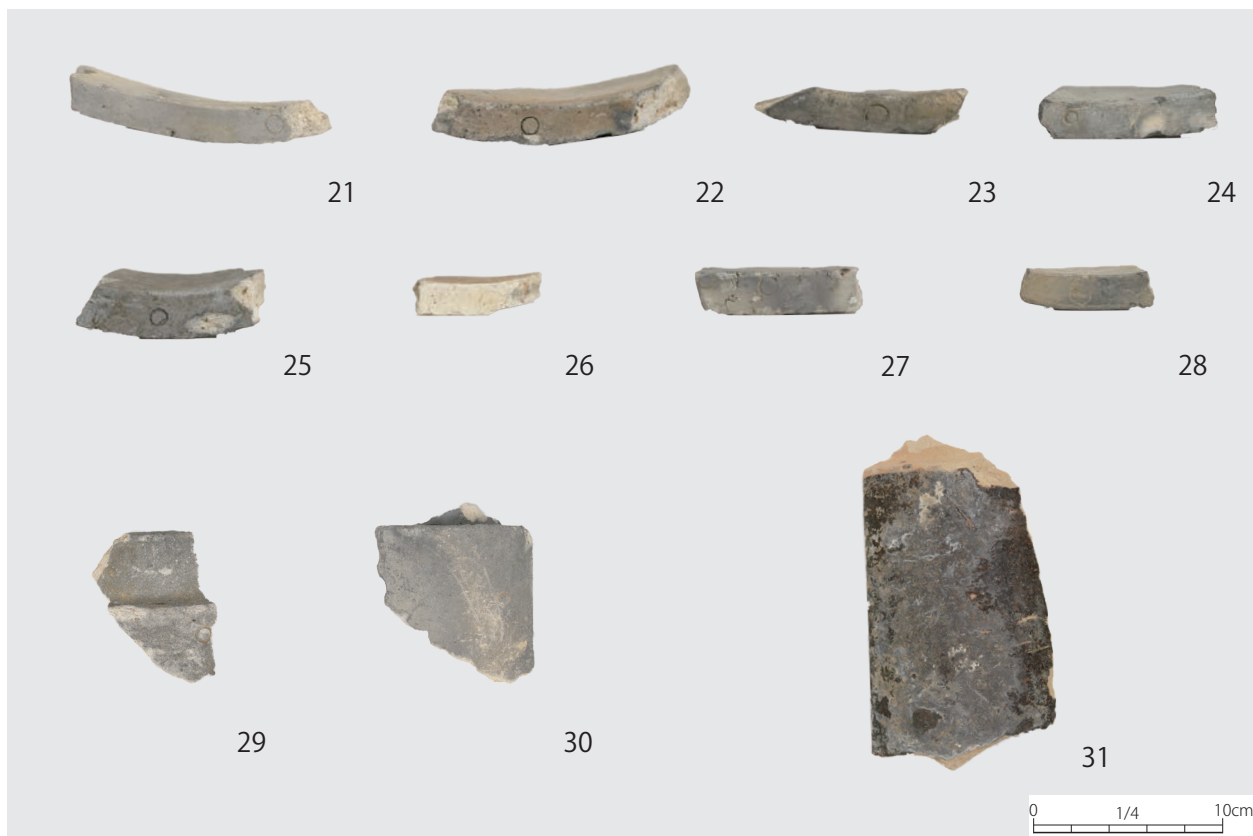
图版10



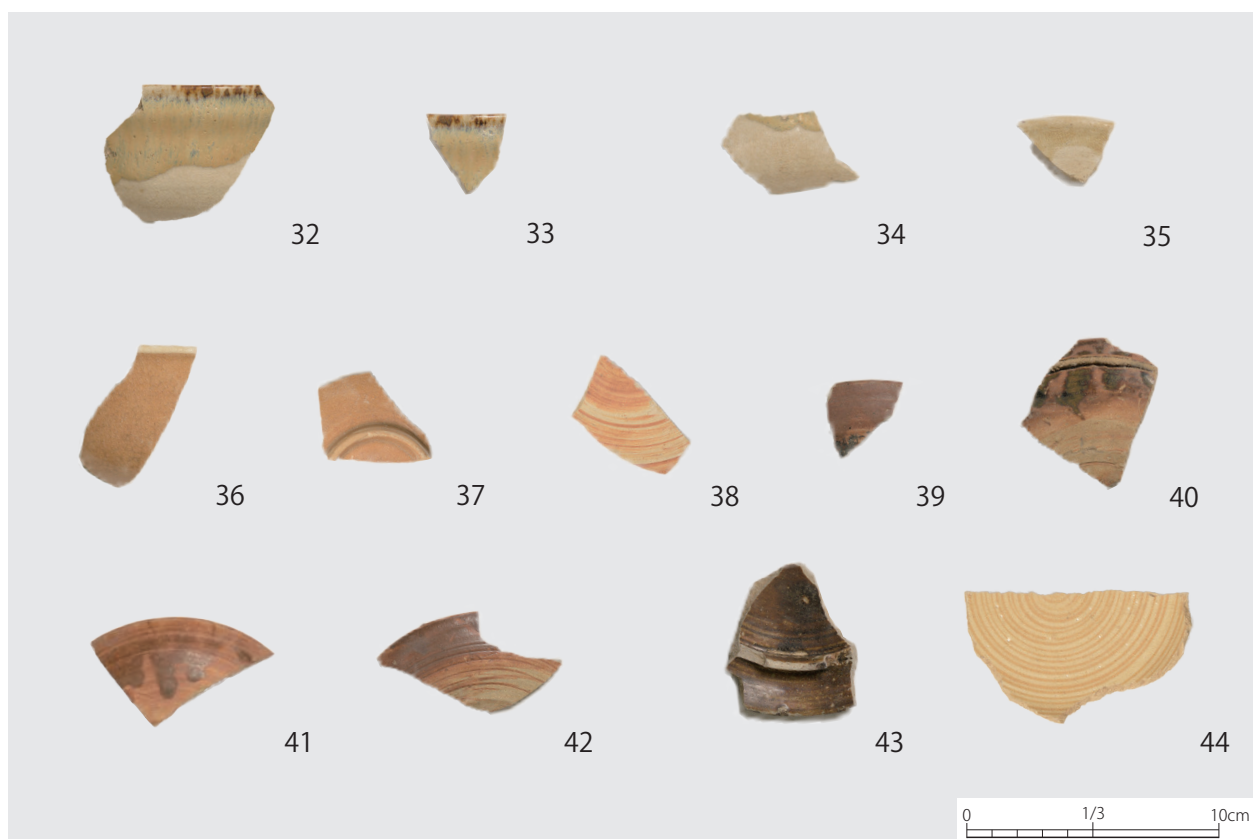
1 出土遺物1 軒丸・軒棧瓦



2 出土遺物2 軒平・軒棧瓦

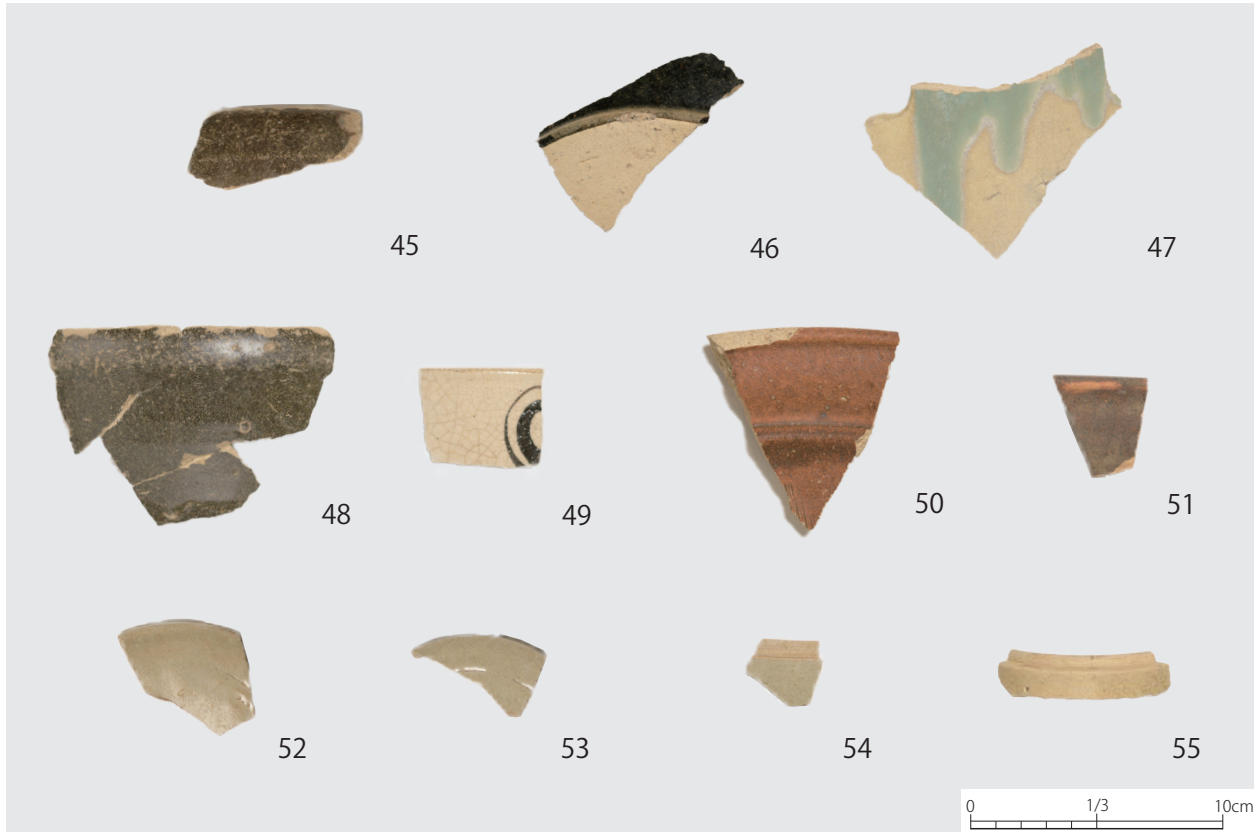


1 出土遺物3 刻印瓦、施釉瓦

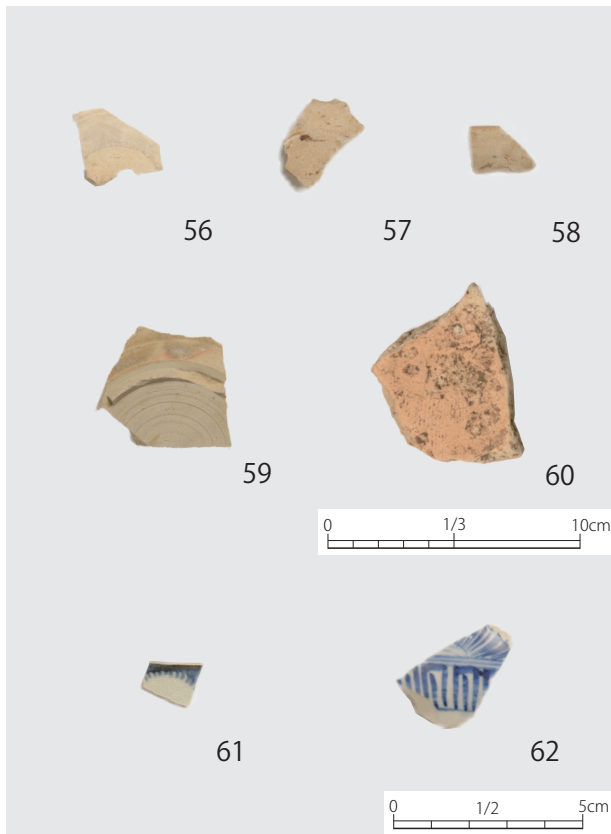


2 出土遺物4 陶器（碗類・皿類）

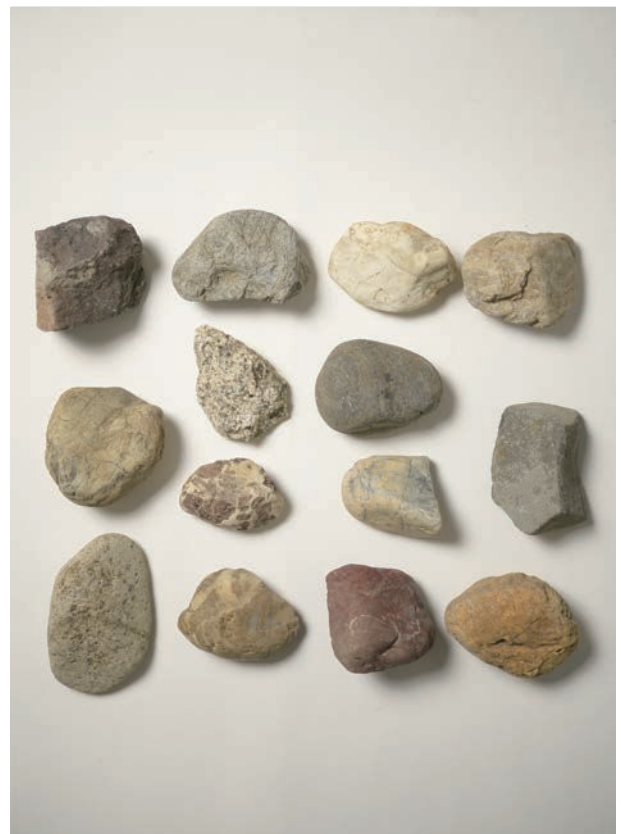
図版12



1 出土遺物5 陶器（鉢類・蓋類・壺類）



2 出土遺物6 陶器（近世以前）・磁器



3 出土遺物7 円礫サンプル

報告書抄録

ふりがな	なごやじょうおもてにのもんしくつちょうさほうこくしょ							
書名	名古屋城表二の門試掘調査報告書							
副書名	第1次・第2次調査							
シリーズ名	名古屋城調査研究報告6 埋蔵文化財調査報告書5							
編著者名	大村陸・種田祐司							
発行機関	名古屋市観光文化交流局名古屋城総合事務所名古屋城調査研究センター							
所在地	〒460-0031 愛知県名古屋市中区本丸1番1号 TEL 052-231-2481							
資料の保管機関	名古屋市観光文化交流局名古屋城総合事務所名古屋城調査研究センター							
発行年月日	2023(令和5年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
なごやじょう 名古屋城跡	あいちけん 愛知県 なごやしなかく 名古屋市中区 ほんまる 本丸	23100	市遺跡番号 7-1 県遺跡番号 007001	35° 11' 06"	136° 54' 8"	第1次 2019/11/7 ～11/14 第2次 2022/8/22 ～9/22	第1次 約2㎡ 第2次 約36㎡	重要文化 財修理・ 史跡整備
遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
名古屋城跡	城跡	近世・近代		控柱基礎・ 雁木ほか		近世陶磁器・ 近代陶磁器・ 瓦ほか		—
要約	<p>第1次調査では、表二の門及び附属土塀の控柱基部を発掘調査し、現在の表二の門の控柱がコンクリート基礎であること、附属土塀の控柱下端に鉄製ボルトが差し込まれていることを確認した。</p> <p>第2次調査では、附属土塀背面土塁にて発掘調査を実施し、土塁斜面裾部で雁木の最下段と考えられる切石計7石が横並びで出土した。土塁に面した石垣面では雁木の設置に伴う階段状の加工痕を確認した。土塁斜面では雁木の背面構造と推定される円礫が密集する状況を確認した。</p>							

名古屋城調査研究報告6
埋蔵文化財調査報告書5

名古屋城表二の門試掘調査報告書

第1次・第2次

令和5年3月31日

編集・発行 名古屋市観光文化交流局
名古屋城総合事務所
名古屋城調査研究センター

印 刷 長苗印刷株式会社

